
心の中の ” こころ ”

c a d e t

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の中の”こころ”

【Nコード】

N7408Y

【作者名】

cadet

【あらすじ】

夢、希望、野望、さまざまな思いを抱いた若者が集うソルミナテイ学園。ここに恋人の夢を支えたくて入学した一人の少年がいた。しかし、思いしかなかった少年の實力は伸びず、周囲からは笑われ、友人もいなくなり、恋人も彼のそばから離れ、彼の歩みは止まった。だが、彼は一人の老婆と出会い、その出会いが少年を徐々に変えていくきっかけとなる。

これは心の歩みを止めた少年の物語です。

第1章第1節（前書き）

はじめまして、c a d e tといたします。

この小説は、私が脳内で描いていたものを衝動的に投稿してしま
ったものです。

小説を書くのも初めてで素人丸出しの文ですが、どうかよろしく
お願いします

第1章第1節

第1章

ソルミナティ学園、夢、希望、野望などを抱いた大陸中の若者が集う場所。

完全な実力主義で、一定の成績に満たない者は容赦なく落とされる場所。

この場所にきて2年目、この俺、ノゾム・バウンティスは昼休みの間、日の当たる屋上でこれまでのことを思い返していた。

俺がこの学園に来たのは2年前、2人の幼馴染とともに故郷の村を出て、この場所に来た。

1人はケン・ノーティス。

子供のころからの無二の親友。

もう一人がリサ・ハウズ。

赤みがかったポニーテールを持つ美少女。

俺の恋人で一番大切な人。

彼女は昔から勝ち気な性格で村のガキ大将と喧嘩をしては一方的にボコボコにするほどの悪ガキだった。

そんな彼女との出会いは俺8歳の時、村の近くの河原で魚釣りをしているときだった。

「あ、あんた、今暇？」

そんな一言を彼女が掛けてきたのが切っ掛けだった。

赤みがかったショートカットと勝ち気な表情、徐々に熱を帯びて

いく自分の顔……一目惚れだった。

彼女の両親は今まであちこちの土地を転々としながら生活していたが、彼女の父親が旅の途中で亡くなったことで、故郷であるこの村に定住することを決めたそうだ。

彼女は子供のころ、よくいたずらをして怒られていたが、本当に嫌がられることはせず、むしろそんな輩は絶対に許さない人だった。そんな彼女に一番ボコられたのは村のガキ大将となぜか俺だったが。

彼女に俺が告白したのが3年前、彼女への想いを抑えきれず、彼女に自分の想いをぶつけた。

一目惚れであること、ずっと好きであったこと。

そんな自分の告白に彼女は、

「ま、まあいいわよ、付き会っても。」

と、何事もないかのように振舞っていたが、顔は赤くなり、声も震えていて、すごく喜んでくれていた。

彼女と俺が正式に付き合うようになってしばらくすると彼女は俺に自分の夢を語ってくれた。

「父さんと同じようにいろんな世界を見てみたい。」

俺は彼女が亡くなった父親のことを母親から聞いて、外の世界にあこがれていたことは知っていた。

俺は、

「じゃあ、俺はリサの背中を守るよ。」

と俺は彼女の背中を支えることを固く誓った。

彼女はそんな俺に、「おりがとう！」と大喜びして抱きついてきた。

まどろみの中、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴る。

俺は体を起こし、固まった体をほぐすと午後の授業を受けるため教室に向かった。

もうその誓いが果たせないことを無理やり頭の中から切り捨てて。

俺のクラスは2学年10階級、2学年の最下位クラスだ。

その中でも俺は最底辺、いわゆる落ちこぼれの中の落ちこぼれ。クラスに入ると周囲からの侮蔑と嘲笑が俺を出迎える。

「また来たよ。最底辺。」「いい加減消えればいいのに。」「さっさと退学してくれないかな。」

それらの心無い声に心が痛むが無視して自分の席に座る。

俺が席につくと3人の男子生徒が俺の席の周りに集まった。

「よう最底辺、また意味もなく授業を受けにきたのかよ。」

真ん中の大柄な男、マルスがこちらを威圧するように話かける。

「いい加減無駄なことだと諦めれば良いのに。」「お前のせいでこちまでお前と同レベルに見られるんだからいい迷惑だぜ。」

大柄な男の脇にいた取り巻きの2人も続いて罵る。

「まあ、幼馴染の紅髪姫にすら見捨てられたんだ、いい加減夢見る

のはやめたほうがいいんじゃないか。」

3人の嘲りに同調して周囲も笑い始める。

担任の教師が教室に入るまで、3人は俺を罵ることをやめなかった。

そう、俺は1学年の夏にリサに振られた。

彼女は一方的に別れを告げるとすぐさま背を向けて立ち去った。

俺は彼女に何度も訳をたずねた。しかし、彼女はまるで汚物を見るような眼で俺の話の話を聞こうともしなかった。

周りでは俺が浮気をしたのが原因となっていた。

リサはその容姿と実力から“紅髪姫”と呼ばれるほどの女性。

一方の俺の容姿は普通で、成績も振るわない。

そんな彼女と付き合っていた俺はやっかみの対象だったが、俺が彼女に振られたことが一気に周囲からの俺の評価を下げた。

友人は一人残らずいなくなり俺を嘲笑う側に回った。

それでも学園でまじめに授業は受けたし、自主鍛錬も怠らなかった。

誓いを守り続ければいつか……………そんな思いが俺にはあった。

そんな中、幼いころからの親友と彼女が付き合いだしたとことを知った。

愛しい彼女の隣を歩く親友と楽しそうに微笑む彼女。

実習では息の合ったコンビネーションを発揮し、他ペアを圧倒する様子を見て俺は彼女の隣に居場所が無いことを無理やりにも理解された。

ノゾム side

「ふっ！」

学園の自動人形が勢いよく振り下ろした模擬剣の側面を摸造刀で打ち落とす。

打ち落とした摸造刀を返し、人形の首筋に売り込むと人形内の術式が作動して、自動人形を停止させる。

教室で座学が終わると今度は訓練場での実習となった。

この学園には、訓練場のほかに魔法実験場等の施設も複数あり、それぞれの施設では生徒たちが自分の能力を研鑽していた。

訓練場は複数のエリアに分かれており、同じ授業を複数の階級がこなせる様になっている。

今日は主に対人戦の訓練の様で、それぞれが模擬剣などで自動人形と打ち合っていた。この人形は魔法の陣術の一つで人形内の陣に魔力を込めることで自律戦闘を行う人形である。

ただ、10階級に支給される自動人形は質があまり良くなく、ある程度決まった動きしかしないので、主に準備運動に使かわれている。

「はっい。次はそれぞれペアになっての模擬戦よ。組み合わせはこちらで決めるわね。」

10階級担任のアンリ・ヴァール先生が声をかけると自動人形が停止したので、みんな手を止め、組み合わせが決まるのを待つ。

アンリ先生は長いウェーブがかかった茶髪と優しそうな眼をしており顔立ちは間違いなく美女である。

ただこの先生、頭のねじが2、3本抜け落ちているような言動をしているので、この実力主義の学園には似つかわしくない人である。学年最下位である10階級の担任を任せられている（押しつけられているともいう）のも、この性格で10階級を担当することの意

味を理解していないと周囲には思われている。

ただ本人の能力は相当なものであることはこの学園の教師をしていることから明らかである。

やがて組み合わせが決まり、それぞれがそれぞれの相手と模擬戦を開始する。

肝心の俺の相手は、

「よう、最底辺。あいにくだったな。」

先ほど俺を罵っていたマルスだった。

「さっさと始めようぜ、最底辺の相手なんて時間の無駄だからな。」
マルスはそういうと背中に背負った大剣を引き抜く。

マルスは粗暴な男だが実力はかなりのもので、10階級にいるのは普段の言動と素行の悪さからである。

俺も腰にさしている摸造刀を抜く。

俺の武器は刀と呼ばれる東の島国の剣である。切ることに特化したその剣は、達人が振るえば鉄さえたやすく切り裂くという。

ただし、高い技量が必要とすることと、刀自体の希少さもあって、大陸には普及していない。

ある事情から力に頼ることができない自分にとっては一番適した武器である。

「それでは、はじめ〜〜。」

アンリ先生の気の抜ける声とともに模擬戦が開始された。

「うおりゃあああああ」

大声とともにマルスが大剣を振り下ろす。

大振りの攻撃を俺は刀を沿わせる様にして受け流す。
甲高い音と共にマルスの大剣が逸れて地面にたたきつけられる。

「はっ！」

マルスの攻撃後の隙に間合いに踏み込み、首筋を狙って刀をなぎ払う。

「遅えよ！」

マルスは腕のガントレットで刀を防ぐ。摸造刀は刀本来の切れ味を發揮せず、ガントレットにはじかれる。

マルスはそのままガントレットで顔に殴りかかってくるが、俺は頭を下げて避ける。

再び俺は切りかかろうとするがマルスは大剣を片手で強引に振りぬいてくる。

俺はやむ追えず後退し、仕切り直しとなる。

大剣でたたきつぶしにかかるマルスと、大剣の間合いの内側に入ろうとする俺との間でしばらく一進一退の攻防が繰り広げられるが、
「いい加減つぶすか。」

マルスが一言そう呟くと彼の威圧感が膨れ上がった。

“ 気術 ”

大陸東部発祥の技術で、本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。

マルスはこちらに一気に踏み込んでくる。その速度は今までとは比較にならない。

気術による身体強化の成果である。

一気に獲物を間合いに捕らえると大剣を振り下ろす。

俺も咄嗟に気術を使用し避ける。避けた大剣は轟音とともに土面を捲り上げた。

「ちっ！かわしのかよ。」

一撃で決められなかった事にいらついたのか、マルスが毒づく。彼は地面にめり込んだ大剣を引き抜くとそのままこちらに再度切りかかってきた。

強力によって振り回される剣戟を気術による身体強化を使い捌く。鉄と鉄とがぶつかる音が戦いの壮絶さを物語っているが、その内容は一方的だった。

マルスの身体強化は俺の身体強化をはるかに上回る効果を上げている。

対する俺の身体強化の効果は俺自身の特異性もあってスズメの涙程度。

マルスは素行こそ悪いが、その実力は間違いなく学年の中でも上位である。

逆に学年上位の実力を持っていても最下位階級に甘んじているマルスの素行の悪さもひどいが。

そのマルスの強化した剣技はいつものノゾムではさばききれない。しかしこのスズメの涙程度の身体強化がそれを可能にしていた。強力によって振り下ろされる剣戟をさばき切れる最低限度の身体能力を授けてくれている。

「いいかげんつぶれやがれ！！」

すぐにつぶせると思った俺の予想外の抵抗にマルスのいらだちはさらに募る。マルスはさらに気力を高めて襲いかかる。

「グ、簡単につぶされてたまるか！」

俺は相手のペースに巻き込まれないよう必死に食らいつく。

斬撃の威力は上がったが、マルスの攻撃は単調になり、その単調さゆえさばききることは不可能ではなかった。

しかし、あくまでさばき切れるだけであり、反撃する余裕は俺にはなかった。そして反撃できなければ、結果分かり切っている。やがて限界が訪れた。

マルスの一撃を捌ききれず体制が崩れる。

崩れた体制を立て直す暇もなく、返す刃が俺を襲う。

「くたばれ！」

大きく体制の崩れた俺はとっさに刀をマルスの大剣と自分の体に入れるが、相手の強化された斬撃を止めることは出来ず、そのまま吹き飛ばされて訓練場の壁にたたきつけられた。

「ちっ、ウジ虫が無駄な抵抗しやがって。」

そんなマルスの言葉を聞きながら俺は意識を失った。

ノゾム side out

「痛ッ！」

ぼんやりとした意識が背中痛みで覚醒する。気がつくとは彼は保健室のベットの上がった。

「おや、気が付いたかい？」

保健室の机では眼鏡をかけた白衣を着た女性が仕事をしていた。

彼女はノルン・アルティナ、この学園の保険医で知的な美女という言葉がぴったりな女性だ。

彼女はこちらに来ると目の前で指を動かしたりして意識の状態を

確認している。

「よし、意識ははっきりしているな。どこかほかに痛みを感じる場所はあるか？」

彼は首を横に振ってこたえる。

特に異常はなさそうだ。

「分かった。もしどこか痛みを感じるようになったらいつでも来なさい。我慢して悪化したらなお悪いからね。」

彼女は、微笑みながら言う。その表情は知的な雰囲気とは違い、頼りがいのあるお姉さんといった感じで、はじめとはまた違う印象を覚えるだろう。

事実、彼女は決してクールなだけではなく面倒見の良い頼れる先生の一人で、実際男女問わず、学園でもかなりの人気がある。

そんなとき、間延びした声とともに保健室に入ってくる人影があった。

「ノルンくくく、ノゾム君の様子はどおくくく。」
入ってきたのは担任のアイリ先生。

「アンリ。ここは学園だ。呼び名には先生をつけなさい。」

「えくくく、ここじゃなら誰もいないし、大丈夫よくくく。」

「彼がいるだろう、彼が。」

彼女たち二人はプライベートに置いても仲が良く、実は学生時代からの親友同士であるらしい。

ちなみに二人ともこのソルミナティ学園出身である。

「ノゾム君なら大丈夫だよ。それよりノゾム君体のほうは大丈夫くくく？」

アンリ先生が彼を心配そうに見つめてくる。

「だからはじめを・・・もういい。彼は大丈夫だ、かるい脳震盪くらいだよ。」

「はい。少し頭がクラクラしますが大丈夫です。」

「よかつたくくく。心配したんだよ。ノゾム君にもしものことがあったら大変なもの。」

そう言っ て彼女は微笑んだ。

その様子は本当に安心した様子で、彼女が彼をどれだけ心配していたかが分かる。

「大丈夫だよ、アンリ。彼はこのくらいではリタイヤはしないよ。」

「もう、ノルンは冷たいよ。」

「ちゃんと彼の状態は把握した。心配するのはいいが行き過ぎてはだめだよ、アンリ、生徒を信頼して生徒自身の成長に任せることも必要だ。」

言い合いをする二人だが、アイリ先生はいつもと違って強い口調だし、ノルン先生はかなりくだけた感じで話している。

いつもとは違う調子で気兼ねなく話しているところを見ると、2人の信頼関係がうかがえる。

ノゾムはそんな様子を見てみると、もう放課後で日が暮れており、いつもの鍛練の時間が迫っているのが分かった。

あわてて荷物をまとめて帰り支度し先生たちに挨拶をする。

「ノルン先生、アンリ先生ありがとうございました！失礼します！」
彼ははじかれたように保健室を飛び出した。

ノルン side

あわてて保健室から飛び出して行った彼を見送ると、私は親友に声をかける。

「彼が噂の人物か。なるほど噂はあてにならないな。」

「でしょ~~~~。」

親友がうれしそうに微笑む。

ノゾム・バウンティス。

2学年きつての落ちこぼれ。

噂では1学年の時、幼馴染で同学年でもトップクラスの実力を持つリサ。ハウন্ズの恋人だったが浮気がばれて振られたそうだった。成績自体も高くなかったため、すぐさま嘲笑の的となった。

だが私自身、彼は決していい加減な人間ではないと分かった。

彼が運び込まれて時、体の状態を確認するために服を脱がしたが、その時柄もなく驚いた。

彼の体は鍛え上げられた筋肉に覆われていた、その身体には無駄がなく一種の完成形に近いと思った。

最も驚いたのはその身体は決して天性のものではないというものだった。

ちようど彼の使う刀のように、気の遠くなるほど鍛練を行うことによって鍛え上げられた肉体。

欲に溺れている人間では無理だ。

いや、今の2学年にあれほどの肉体を作る鍛練を行う者はいない。しかも彼の身体には無数の傷があり、それはもしかしたらベテランの冒険者にも匹敵していたかもしれない。

おそらく噂は彼の特異性やリサ・ハウন্ズの恋人だったなどが複雑に絡み合ったことが原因だろう。

彼の特異性。

それは彼が1年の時に発現した“アビリティ”だ。

アビリティ

種族を問わず発現する能力の総称で、発現すると本人はアビリティに応じて様々な恩恵を受けることができる。

その内容は魔法の適性向上や、身体能力の向上など多岐にわたり、その種類は無数にある。

ノゾム君のアビリティは“能力抑圧”。

発現すると本人の能力を抑圧し、一定以上成長しなくなる。

抑圧される能力は人によって変わるが彼の場合、力、魔力、気量と3つもの能力を抑圧されており、彼の大きなハンデとなっている。発現することが極めてまれなアビリティではあるが、本人への恩恵は全くなく、むしろ足を引っ張るアビリティである。

アイテムや魔法、気術による強化は可能であるが、その効果は普通の人間にもたらす効果より明らかに劣る。

これにより彼の成績はさらに下がり、同学年で最下位となる。

これまで進級できたのは、筆記試験の結果を上乗せしているからである。

それでも進級の際、2回追試を受けている。

「アンリが彼を気にする理由がわかったよ。」

「でしょう〜。みんなノゾム君のこと悪く言うけど、あれだけ頑張っているんだもの。私は報われてほしいわ〜。」

アンリは普段はばやんとしていて頼りないが、肝心な事には極めて鋭い観察眼を発揮する時がある。

彼については、普通の日常では悪い噂しか聞かない。

おそらく日々の生活の中で、噂の彼と現実の彼と間にわずかな違和感を感じ取ったのだろう。

なぜ彼がここまで食らいつけるのかはわからないが、そこまで努力しているのだ。

私には親友と同じように教師として、人間として彼を応援してやりたい気持ちが確かにわいていた。

ノルン side out

第1章第1節（後書き）

いかがだったでしょうか。初めての小説ということでもいろいろ至らないところがあるかと思えます。

ですが、私もこの場の小説が好きなので、私の小説で少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

いろいろ考えましたが、この小説を続けることにしました。
皆さんの意見、感想をお待ちしています。

登場人物紹介

ノゾム・バウンティス（主人公）

地方の農民出身、能力値は魔力以外平均的。

恋人の夢を支えたくて学園に入学するが、成績は伸び悩み、さらにアビリティの能力抑圧により、さらに成績が伸び悩む。

入学半年後に突然恋人から別れを通告され、成績も最下位クラスまで落ち、生徒たちから嘲笑の対象となる。

使用武器は主に刀。

アビリティ

能力抑圧

本人の筋力、魔力、気を一定値以下まで落としてしまうアビリティ。

魔法、気術、アイテムなどによる強化は受けられるが、効果が著しく減退する。

ほとんど発現しないアビリティではあるが本人への恩恵は全くと言っていいほど

ない。

ランクD -

リサ・ハウンズ

主人公と同郷で元恋人、現在もう一人の幼馴染と恋人同士。

成績優秀、容姿端麗、勝ち気な性格であるが、根は純情でさみしがり屋。

世界中を見てみたいと思い、世界中の人が集まる学園に入学する。主人公とは相思相愛の恋人同士だったが、1年の夏に突然別れを言い渡す。

現在はもう1人の幼馴染と恋人同志である。

成績はかなり良く、学園内の最上位の1階級である。

武器は片手剣と短刀の2刀流、炎、風の魔法にも適正がある。
ランクA

ケン・ノーティス

主人公のもう一人の幼馴染で現在のリサの恋人。
あらゆる方面に才を持ちを持つ。所属クラスは1階級。

顔立ちもよく、性格もいいので告白してくる女生徒が絶えないが、あくまでリサー筋。

ノゾムと普通に会話する数少ない学園関係者。
ランクA

アンリ・ヴァール

主人公のクラスである10階級の担任。

茶色のウェーブがかつたロングヘアの美女。

性格は天然で基本的にはわはわしている。

だが、鋭いところがあり、意外なことで核心を突くことがある。

鈍そうな外見に似合わず、戦闘能力はかなりある・・・と思われる。

ノルン・アルティナ

学園の保健室の先生であり、魔法の授業も担当している。

アンリとは学生時代からの親友同士。

切れ目のクールな美女で、一見冷たそうに見えるが実はかなり面倒見がいい。

シノ

主人公に刀術の手ほどきをおこなった老婆。

東の異国出身、戦闘能力は極めて高い(ランクS)。

この国に来たのは偶然で、理由は実家のお家騒動で追放されたから。

性格は齡のわりに子供っぽく（80歳ほど）口より先に手（ランクス相当の技）が出る。

滅龍王ティアマット

龍の中でも異端中の異端。

本来は黒龍であつたが、他の龍を食らい、その力を取り込み続けたため、その力は他の龍種が手を下せないほどになり、やむをえず大陸各地の地脈を利用し、封印されていた。

齡1万年以上を生きており、正確な年齢は把握されていない。

漆黒の体軀に黒の5色6翼の翼を持つ。翼の色は闇属性である黒が2枚、地水火風の属性に対応した色の羽がそれぞれ1枚ずつ

黒以外の羽はティアマットが殺して奪い取った他の龍の力の象徴で、彼の本来の翼は黒色。

光属性の白だけがない理由は今のところ不明。

取り込み続けた力に理性がほとんど飲まれている。

封印自体がティアマットの力で揺らぐことがあり、その揺らぎに巻き込まれたノゾムに偶然遭遇し、彼をおもちゃにして遊んでいたら、反撃され殺された。

登場人物紹介（後書き）

誤字や脱字を修正。

間違いが多くてすみません。

世界観説明

アークミル大陸

本小説の舞台となる大陸。

この大陸は定期的に北方の荒地に生息する強力な魔獣の侵攻に曝される。

本編開始の10年前にこれまでをはるかに上回る侵攻があり（通称、大侵攻）、3つの国が崩壊している。

崩壊した国の領地は強力な魔獣の生息圏（通称、獄地と呼ばれている）。

この大陸には人間の他に獣人、妖精、エルフなど多種多様な人種が生活しており、大侵攻で崩壊した国には異種族の国もあった。

学園都市アルカザム

ソルミナティ学園設立のために作られた都市。ソルミナティ学園を中心に北に行政庁、東に市民街、南に商業区、西に職人区がある。また、各所に冒険者ギルドもあり、学生たちもランクに応じた仕事を受けることができる。

都市間の交通の便はあまり考えられていない。これは各国勢力図の中立地点にこの年が作られたからである。

しかし、この都市は最新の研究機関も存在し、都市建造において多くの資金が導入されたので大陸における一大拠点であることは疑いようもなく、それゆえに多くの人と物資、経済が成り立った。

ソルミナティ学園

魔獣の大規模侵攻に対抗できる人材を育成するために大陸中の国が出資して作られた学園。

最高学年は4年生で、教育内容は戦闘だけでなく、研究、政治等

多方面に活躍できる人材を育成している。

生徒は能力に応じて1から10階級のクラスに分けられ、待遇も変わる。

1階級では訓練場や魔法の実験場を優先的に使用でき、場合によっては専門の先生からの個別指導も受けられる。

良くも悪くも実力主義の学園で一定の成績に満たない者の落第は当たり前で、退学も珍しくない。

また、各国の将来を担う人材を育成しているので、将来の国家間の勢力に影響を与えるので、政治的な駆け引きの場にもなっている。主人公は能力抑圧のせいで実技の成績が良くないので筆記で成績をどうにか保っていた。

魔法

大気中の魔素または体内の魔素を自身の精神力と術式で隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術。

基本的に詠唱術、陣術に分けられるが他にもさまざまな術式が存在する。

精霊魔法

世界の眷族たる精霊の魔法。

人間や亜人などが使う魔法違い、詠唱、陣など外界に干渉するためのプロセスを必要としない。

気術

本人の生命力を隆起させさまざまな現象を顕現する技術。

基本的に魔法と違い、詠唱、陣を必要としないものが多いが、魔法程大規模な現象を起こしにくい。

また気は生命力そのものなので気の完全な枯渇は死を意味する。

ランク

大陸で採用されている冒険者や軍人等の個人能力を段階的に評価

したもの。

ランクを上げるには魔獣を倒す、依頼や任務を完遂するなど、本人の行動によって評価される。

ランクE

最下位ランク、新米冒険者、新米兵士、学園では1年まではほとんどの人がこのランク。

ランクD

ランクとしては下位の冒険者や兵士、学園では2年生あたりが妥当なランク。

ランクC

ランクとしては中堅の冒険者や兵士、学園では3年生あたりのランク。

ランクB

上位の冒険者や騎士、学園では4年生に相当する。

ランクA

一流の冒険者や近衛騎士などだけでなく、政治、経済、軍事の中核にかかわる人も相当するランク。

ランクS

超一流の人物に与えられるランク、現在大陸に十数人しかいない。ランクSS

現在大陸には数人いるが、ほとんどの国にはこのランクを持つ人はいない。

龍

大陸内で最強の生物。

生物であるが実は精霊種の1種。

精霊と違い、物質的な肉体を持っているがその肉体は精霊の源であり、この世界の根源物質である源素の塊。

ただ肉体を持つのでその生態は生物に近い。

自らが死ぬと自分の子孫または自分を殺した対象に自分の力を継承させる。

龍殺し

龍を殺し、その力を継承した者のこと。

歴史上数人しか存在せず、その力は絶大、また異能に目覚める者もいる。

この数百年出現していない。

竜

魔獣の1種。

魔獣の中でも群を抜いた戦闘能力を持っているが龍には遠く及ばず、龍にとっては大したことはない。だが、人間には脅威そのものであり、恐怖の具現である。

源素

この世界の根幹の要素、この源素が寄り集まり、精神的なエネルギーに変化したものが魔素又は魔力であり、生命力のエネルギーに変化したものが気である

第1章第2節（前書き）

第1章第2節です。今回は主人公の師匠が登場します。それではどうぞ。

第1章第2節

学園都市アルカザム、ソルミナティ学園が作られた都市であり、学問の街として大陸でも有名である。

都市の中心部にソルミナティ学園があり、その周囲をクモの巣状に道が作られている。

都市の北部には都市の政治を司る行政庁をはじめとした政治機関と、その政治機関をまとめている各国貴族などの富裕層が生活している。

東は市民街で、生徒たちの寮や、一般市民が多く生活し、南は商業区で各国から集まった商品や物品が集まり、この都市の経済の中心となっている。

また、冒険者ギルドもあり、学生もランクによっては仕事を受けることができる。

西は多くの職人が集まる職人区で鍛冶屋や医者、裁縫など各国の技術を生かした職人たちが日々のぎを削っている。

都市の外は東西南北に道が走り、道以外は鬱蒼とした森が広がり、人の進入を阻んでいる。

この森には様々な魔獣が現れ、一般人でも勝てるような魔獣から、ベテラン冒険者がてこずるものまでさまざまいる。

ただ、基本的に強力な魔獣は森の奥に生息しており、街や街道周辺には強力な魔獣は出現しない。

そんな森の中に人目を忍ぶように1軒の小屋があった。その小屋の庭で一人の少年と一人の老婆が刀で打ち合いをしていた。

一人は学園の落ちこぼれ、ノゾム・バウンティス。もう一人の老婆の名はシノという。

その打ち合いは圧倒的に老婆が勝っていた。それは学園でのマルス

との打ち合いなど比較にならなかった。

学園の試合で彼はマルスの斬撃をまかりなりにも凌いでいたが、老婆との打ち合いはさらに一方的で、ノゾムはまさに老婆のおもちやだった。

刀での打ち合いは3合程で体制を崩され殴り飛ばされる。転がったノゾムに老婆はすぐさま追撃し、刀を躊躇なく振り下ろす。

ノゾムは脚部に気を集中させて爆発させる。気術の技の一つ、“瞬脚”である

一瞬で加速し、離脱するがすぐさま老婆も同じように瞬脚を使用し加速しつつ刀を納刀。離脱したノゾムの先に回り込み、抜刀術による抜き打ちを打ち込む。

勢いがついて止まり切れない彼は、片足を軸に体を回転させて抜き打ちを切り払うが体制が大きく崩れる。

そこに老婆の切り返しによる追撃が迫る。

ノゾムは刀を老婆の剣筋に対して斜めに寝かせ、わざと足の力を抜いて体を落とす。老婆の切り返しは寝かせた刀の上を滑り、彼の身体には当たらないが、同時に老婆の蹴りが襲う。

ノゾムは体を落とした状態では避けるのは無理と判断。咄嗟に足に力を入れ、後ろに飛ぶと同時に刀の柄を蹴りと体の間に入れるが大きく飛ばされる。

地面に転がったノゾムが体制を立て直す暇もなく老婆が追撃。首に刀を突き付ける。

「まいりました。」

「ふむ、まだまだじゃな。修練が足りん。」

老婆はそう言うと刀を納めた。この老婆、シノこそノゾムの刀術の師である。

彼女との出会いはノゾムが森の中で鍛錬していたときだった。

その時の彼はリサに振られ、誓いを果たせなくなったことで自暴自棄になっており、がむしゃらに鍛錬していた。

それは鍛錬でなく逃避。体がぼろぼろになるまで鍛錬することで恋人とのことを考えないようにしていた。

そのあまりの過酷さと無意味さに我慢できず老婆が声を掛けたことが始まりだった。

「そろそろ夕餉か、ノゾム、用意しとくれ。」

「はい。師匠。」

老婆の声にノゾムが答える。

その声には疲れが見えるものの、はっきりとした口調で夕餉の準備にかかる。

シノ side

(未だ引きずっているが、まだましになったかの)

老婆は彼の様子を見て声を出さずに呟く。

彼と出会ったとき、彼は森の中で鍛錬をしていが、その状態はひどいものだった。

蓄積された疲労を回復する間を与えないほど鍛錬を繰り返したせいで筋肉はやせ細り、頬はこけて餓鬼のようになっていた。剣を握る手の皮はズル剥け、関節は炎症を起こし、彼の体はぼろぼろになっていた。

あまりにひどいので口出ししたが一向に止める気配がない。

その時見た彼の顔には見た目どおり生気がなく、眼の奥には外見よりさらに暗い負の感情があった。

その眼に今の落ちぶれた自分を見た私はひどい嫌悪感に襲われた。すぐさまその場を離れてしまった。

一時は無視を決め込んだが、時間とともに彼の暗い眼が気になった。

考えないようにしても頭をよぎる彼の眼に業を煮やし、様子を見に行くと彼は魔獣に襲われていた。

襲っていたのはワイルドドック。大陸中に生息する魔獣であり、群れで行動する。

魔獣のランクは低く、一般の冒険者でも討伐できるが、疲労が極限に達している彼には竜にも等しい脅威だった。

体中に傷を負い、流れ出す血とともに朦朧となる意識、まわりにはたすけてくれる普通の人間なら絶望的な状況でところが、彼は諦めがなかった。

もはや失血死してもおかしくないほどの血を失っても彼はワイルドドックに抗っていた。

“死にたくない” “あきらめない”

剣術、戦術はまだ未熟。しかし暗い感情を宿していた眼は“生きる”という明確で強い意志を輝かせていた。

それを見た瞬間、私は彼を襲っていたワイルドドックを切り飛ばしていた。

その1週間後、私の小屋の前で剣ではなく、刀を振るう少年の姿があった。

シノ side out

ノゾム side

夕餉を済ませ、後片づけをして、食後のお茶を飲んでいる師匠の向かいに座り、俺もお茶を飲む。

師匠と出会い、刀術を師事してもらい、今日まで様々なことを教

わった。

闇の中でもがいていた自分に確かに光が見えた。

リサに振られ、誓いを果たせなくなり、周囲に誰もいなくなった。そんな日常からの逃避で無茶な鍛錬を続け、ボロボロになった自分を襲ってきたワイルドドック。

生死の境の中で“もう死にたい”という感情よりも“死にたくない”という思いをが湧いた。

“死にたくない”という感情は“生きたい”という感情になり、“あきらめない”という意思になった。

そんな窮地を師匠に救われ、弟子入りし、鍛錬を続けている。

リサのことを考えるとやっぱり辛い。けど、今は以前よりは気持ち軽くなった。

それはやはり師匠がいるからだろ。

そんなことを考え、師匠を見ると満面の笑みでお茶菓子をほおばっている。鬼神のごとき強さを持つ師匠の年不相応のその姿に少しほほえましく感じる。

「なんじゃ。人の顔をじろじろ見て。さては私にほれたな？」

ふざける師匠に即座に反撃する。

「自分の年齢考えて発現してください。いくら俺でもさすがに師匠の年齢は守備範囲がツブツブ！」

余計な事を言った俺の顔面に衝撃が走る。師匠が拳を抜き打ちのように振り、衝撃波をピンポイントで放ったのだ。

しかも卓上のお茶菓子にはそよ風すら吹かないという徹底ぶり。

「ノゾム、ナンダツテ？」

師匠が竜もかくやという表情で俺をにらむ。あまりの形相に脊髄反射で謝罪という自己保身に走る。

「イエエ、ナンデモアリマセン、シシヨウニミホレテイタダケデス。」

ツッコミだけなのに無駄に高度な技を披露する師匠。

彼女はこんなところに隠居しているが、実力は間違いなく大陸でも上位、師匠いわく“学園の中でもトップの剣士と並べるじやろう”と言っていた。

ちなみに、学園最高の剣士はジハード・ラウンデル。Sランクの騎士で大陸でも超が付くほど名の知れた剣豪である。

そんな人物と同格な師匠。いったい何者が疑問である。

お茶を飲み終わりそろそろ寮に戻る時間となった。

「それでは師匠。俺は寮に戻ります。」

「うむ、ではまた明日な。」

「はい、師匠おやすみなさい。」

シノ side

私は帰っていくノゾムの背を見送り小屋に戻る。

彼は強くなった。能力抑圧に抑圧された身体能力のため本人も気付いていないし、刀の技量はまだ私のレベルに達していないが、かなり近づき、全く届かないとは思えない位置にある。

この1年間での成長を考えれば異常だ。

もともと彼の癖はこの大陸で使われている直剣より曲刀を使うことに向いていた。

腕の力で叩き切るより、体全体を使い断ち切る動きをしていたのだ。

何より彼を強くしたのは、本人の努力だろう。たとえそれが現実からの逃避からくるものでも。

はじめは単純な素振りのみを1日中させ続け、ひたすらに森を走らせた。

当然、魔獣に襲われもしたが自力でどうにかさせた。さすがに手の余る相手は私が気付かぬ様に処理したが。

次はひたすらに模擬戦である。

当然、私は持てるすべての技を死なない程度にあいつに打ち込んだ。

なすすべなく私に倒され、骨折、嘔吐、気絶は当たり前だった。

今はまだどうにか捌けるようになり、骨折などの重傷を負うことは少なくなっている。

私が課した修練を堪え切っているのだ。並みの奴なら1週間を経たずに辞めるだろう。

今の彼の技量なら本人の能力抑圧がなければ私とかなり打ち合えることは間違いない。

それでも模擬戦に勝てず、学園での成績も伸びないのはやはり能力抑圧の影響が大きい。

力、気量に制限を受け、魔力いたってはほぼ無く、初級魔法さえ使えない。

気術やアイテムによる強化もほとんど効果がなく、強化魔法も使えない。

これらのハンデを埋めるため、技や気の制御を磨いたが、使う技は必然的に一点集中型の高威力であり、殺傷能力が極めて高いので、学園の模擬戦では使えない。

幸い、肉体能力は瞬発力が必要となる筋力は能力抑圧による制限が厳しいが、本人の運動神経や持久力などの基礎能力は抑圧を受けていないようなので鍛えることができた。

しかし、気術等の強化の効果が低いので、それでも目に見えるほ

どではないし、相手が強化をかければ抑圧されていない能力でも相手が上回る。

なかなかうまくいかないものだ。

もう一つ気になるのが、本人のこれから先の目標が定まっていな
いということである。。

その場の戦闘では“生きるため”という理由でいいかもしれない
が、これから先はそうではない。

“何のために強くなるのか”言うならば“こころの芯”が必要に
なる。

“こころの芯”がないまま力をつければ、いずれその力に振り回
される。

そして彼の芯はすでに1度折れている。

これから先、彼がどうするのかわからないが、私はすべてを教え
よう。彼が私のように後悔しないように。

シノ side out

第1章第2節（後書き）

いかがだったでしょうか。主人公の師匠であるシノは第1章の核となる人物で、後々の主人公に大きな影響を与えます。

このばあさん、80歳ほどですが大陸でも十数人しかいないランクスクラスの達人です。

ただ、意外に子供っぽく、怒ると即座に達人級の技が飛んできます。

また、今の主人公が訓練する理由はその根幹に“逃避”があります。

恋人に振られらることからまだ立ち直っていません。その辺も徐々に書いていこうと思います。

第1章第3節

ノゾムはいつものように学園に登校する。教室に入るとすでに登校していた生徒が彼を見るが、すぐにバカにしたような視線を浴びせる。彼の机には誹謗中傷がいくつも書かれ、それを片付ける彼を周囲がクスクスと笑う。

徹底した実力主義が基本方針であるこの学園は極めて明確に勝者と敗者を分ける。

このクラス、10階級の生徒は間違いなく後者であり、この学年で最下層扱いされる。そんな敗者たちは、大抵自分たちよりさらに弱い者を見つけ、それに自分たちの不満をぶつけるのだ。

彼はこのクラスでは腫れ物扱いであり、彼が話しかけても徹底的に無視する。

彼に話しかけるのは担任のアンリ先生か素行が悪く、問題児のマルスくらいである。もっともマルスは徹底的に彼をこき下ろすことしか考えていないが。

「それでよくその女がまたいいカラダで……………」

バカ話に花を咲かせながらマルスたち3人組がやってきた。マルスはこちらに気付くとニヤニヤ笑いながらやってくる。

マルスは背が高く、体格はいい。素の顔も悪くないがその人を馬鹿にするような表情がすべてを台無しにしていた。

「よう、落ちこぼれ。また無駄なことをやりに学園に来たのかよ。どうせなら便所掃除のほうがいいと思うぜ、まだ俺たちのためになるからよ。」

「おいマルスやめとけよ。こいつの掃除した便所なんて誰も使えね

えよ。」

「そうだが、それより俺たちの訓練人形なんてどうだ。武器の試し切りの役には立つだろう。」

ノゾムは何も言わない。いつもど通りの罵倒、いつもど通りの嘲笑、いつもど通りの日常の始まりだった。

ノゾム side

今日は午前中が魔法の講習だった。講師は保険医のノルン先生。

「知つてのとおり魔法は自身の精神力を糧に体内の魔素を隆起させ、さまざまな現象を顕現する技術だが、隆起させる対象は自身の魔素だけではなく外界、つまり大気中の魔素も可能である。」

主に大規模魔法を使用する際は、必ずと言っていいほど外界の魔素を使用する。これは儀式魔法と呼ばれ、もともと精霊たちや神などに祈りをささげる神事が起源である。大勢の人が同じ様に祈りを捧げこれが現在の詠唱術の基礎でもある。

すなわち……………」

彼女は無駄なく、つづがなく授業を進めていく。アイリ先生の授業は彼女の雰囲気もあってどこかゆるい雰囲気だが、ノルン先生の授業は逆にシンと静まり返り、張り詰めるような雰囲気がある。

俺は先生の話すことを逐一メモを取っていた。能力抑圧によって実技の点が思うように取れない自分にとって、筆記試験はまさに生命線だ。1学年末の学年末試験の実技重視の試験では、追試試験に追加される筆記試験でどうにか進級した。実技試験に筆記試験が追加されるので普通の生徒ならさらに追い打ちだが、俺にとってはまさに最後の砦である。

授業終了の鐘とともに、講習の時間が終了し、実技の時間に入る。

ノルン先生の呼びかけとともにクラス全員が訓練場に移動する。

訓練場に到着し、それぞれが思い思いの魔法を使っているのを見ながら、俺はただ自分の中の魔力を感じ、操るという1学年でしかやらない訓練に没頭していた。

この大陸の人間は大なり小なり魔力を持っているが、俺の魔力はその中でも特に低い。元々はそこまで低くなかったが、能力抑圧が発現してからは初級魔法さえ使えなくなった。

だからこそ、ただ初級の鍛錬を繰り返し、制御力を上げることのみをしている。

その様子を見て周囲の生徒たちが再び笑い始める。それにつられてマルスがやってくるとう授業中にも関わらず俺をのしり始めた。

「なんだよ、まだ1年の時の訓練なのか最底辺。赤ん坊の歩行器がいるんじゃないか。ハハハハ。」

それらの嘲笑を無視して訓練に没頭する。そもそもこのとき俺には彼らの声が聞こえていなかった。

訓練に集中すると周りが見えなくなる。特に基礎訓練のときは顕著でこれは師匠と出会った時の状態でもある。

「……………おい、何無視してんだ。」

俺が聞いていないことにイラついたのかマルスの雰囲気が一気に剣呑なものになる。元々彼は自己顕示欲の強い人間だ。

最下位の俺に馬鹿にされたと思ったのだろう。それでも俺には聞

こえない。完全に自分の内側の世界に籠ってしまっていた。

突然、横から衝撃を受け弾き飛ばされた。マルスが風の魔法で俺を吹き飛ばしたのだ。

放った魔法は“エア・バースト”風の魔法の一種で、圧縮した風を解放したときの衝撃波で相手を吹き飛ばす魔法だ。

まだ収まらないのかマルスが続けて魔法を放とうとする。だがその前にノルン先生の魔法がマルスの足元をえぐった。

「そこまでだ、これ以上は教師として必要な措置を取ることになるぞ。」

放たれた魔法は“エア・アロー”。風の初級魔法だが、詠唱速度はマルスより早く、精度、威力もマルスをしのぎ中級の単体魔法に匹敵している。

マルスのエア・バーストより彼女のエア・アローのほうがすぐれていることは明白だった。

「ちっ、わかりましたよ。」

捨て台詞を吐くようにマルスは離れていき、それにもなつて周囲の生徒たちも訓練に戻る。

「大丈夫かい。」

ノルン先生が俺に声をかける。

「大丈夫です。」

俺は即座に答える。いつも師匠に吹き飛ばされているので受け身はとてもうまくなった。数少ない俺の特技である。

即座に訓練を再開する。この程度のこといつものことである。だからこそ、

「あの手の奴はどうやっても面倒になる。ノルン先生も君を心配し

ている。必要ならいつでも相談に来なさい。」

その言葉を真正面から受け取れず、生返事しか返せなかった。

ノゾム side out

翌日、この日学園は休み、学生たちは束の間の休日を思い思いにすごしていた。

ノゾムはこの日、冒険者ギルドから仕事を受けて、商業区のバイトに来ていた。冒険者ギルドは様々な都市で仕事を斡旋しており、それはこの都市でも例外ではなかった。

仕事はランクが高ければ条件付きで弱い魔獣の討伐なども受けられるが、彼のランクは低いので主に雑用系しか受けられない。

彼の仕事の内容は単純な荷物運び。

商業区には各国からたくさんの荷が届くので、運び手は1人でも多いほうがいい。

荷を集めている集積場に来ると親方に挨拶をして自分の運ぶ荷を受け取る。受け取った荷を馬車に乗せ、相方と目的地まで運ぶ。

今日の荷は商業区の道具屋と職人区の医者。

どうやら店で使うものをまとめ買いしたらしく荷は多いが、行先は少ないので早く終わるだろう。

「そういえばノゾム。お前さん彼女はいるのかい？」

突然の質問とその内容にノゾムは思わず答えに詰まる。

「えっ、……………いませんよ。どうしたんですか急に。」

その様子にある程度の確信を得たのか相方の目の色が変わる。

「いや、なんとなくさ。いるにしろいないにしろ、おまえさん好きな人はいるんだらう。教えろよー。」

相方は性格明るく悪くないが、逆に相手の気分そつちのけで自分本位なところがあり、この手の話はしつこく聞いてくる。

“好きな人”の言葉を聞きたびに彼女の影がよぎり、つらくなる。

この手の話を聞かれることはあったが、その時の彼の様子を見て追及する者はいなかった。

「なあなあなあ、美人か、それとも可愛い系か、話を聞かせてくれよー。」

「……………いきますよ。」

ノゾムは即座に馬を進める。相方がしつこく聞いてくが無視する。仕事中ずつと質問してくる相方を表面上は受け流していたが、彼の表情は明らかに強張っていた。

終わると親方から給金を受け取り、ノゾムは即座に帰路に就いた。

彼の実家は一般的な農民なので、親の仕送りが期待できない彼は生活に必要なものである。

ソルミナティ学園の授業料は各国の援助のおかげで、学園の規模と比較しても十分良心的だ。

10年前の大侵攻で失った人材の確保は各国でも死活問題で、それだけこの学園に各国が期待し、支援しているのが分かる。

この学園でどれだけ優秀な人間を確保するかが、今後の各国家間の優劣を決める大きな要素となる。

そのため優秀な人材を自国に引き入れることに各国は余念がなく、様々な好条件をつけてスカウトに来る。

特に俺の学年は過去に例を見ないくらい、優秀な生徒がいる。ランクにしてAランクに足を踏み入れている生徒が5人もいるのだ。

Aランクは一流の冒険者や近衛騎士などが保有するランクで、まだ十代後半の学生がこのランクに至ったと考えれば、彼らの優秀さが理解できるだろう。

ノゾム side

家への帰り道の途中、前方からよく知っている人たちが歩いてきた。ケン・ノーティスとリサ・ハウンス。

かつての恋人と俺の幼馴染。

ふたりはデートの途中なのだろう。ケンは楽しそうに笑い、彼女もとても楽しそうでケンに心を許しているのが分かる。

ケンがこちらを見て俺に気付くと手を上げる。リサもこちらに気付くが、顔をしかめており、不機嫌さがありありと見える。

それを見て俺の心はきしりと軋んだ。

「やあノゾム、奇遇だね。」

ケンが気さくに話しかけてくる。その表情に彼女のような嫌悪感
みえない。ケンは俺が彼女と別れた後も気さくに俺に話しかけてく
る。リサと付き合っていることに対して複雑だが、以前と変わらず
俺に接してくれるので、少しホッとしている。

「ああ、まあそうだな。どれくらいぶりになるのかな。」

「3ヶ月ぶりぐらいだよ。なかなか時間が合わないから。」

「仕方ないさ。俺と違ってそっちはやることがいっぱいあるんだろ
う。」

「うん、この前もジハード先生に稽古をお願いしたらつい熱が入っ
ちゃって。」

ケンは、たははと苦笑いしながら話す。1階級の生徒となれば学
園の期待も大きく、それ相応の待遇が約束される。それにケンは学
園でもわずかしくないAランクに到達した生徒だ。大陸に名立たる名
士達から個人的に手ほどきを受けることができるのだ。

ケンと話をしていたら隣にいたりサが話しに割り込んできた。

「ケン、いくよ。」

彼女はそう言つとケンの手を取り、歩き出す。俺の顔を見るのも
イヤなのかこちらを見ようともしない。

「あつ」

俺はつい引き止めようとしてしまうが、彼女のその横顔は明らか
に俺を拒絶していた。

ケンの手を引き、去っていく彼女に結局俺は何も言えず、ただ立
ちすくむしかなかった。

家に帰っても俺の心は落ち着いてくれなかった。彼女がどうして
俺を拒絶するようになったのか。その理由はいまだ分からず、俺の

気持ちは宙ぶらりんのまま。

普段はそれほどでもなくなったが、学校でリサを見つけたり、恋人について聞かれたりすると気持ちがざわめき、やはりまだ引きずっていると感じる。

彼女に拒絶されたときを思い出す。冷めた目でこちらを見つめる彼女。「さようなら」と一言だけ告げて彼女は背を向ける。

訳が分からず問い詰める俺に答えることなく、彼女は俺の前から去っていった。

あれ以来、俺の気持ちは止まったままだった。

第1章第3節（後書き）

いかがでしたか？幼馴染二人の登場です。いろいろと足りない分ですが徐々に主人公を含めた3人の関係について書いていこうと思います。

リサについてですが今言えるのは、彼女にも彼を振った理由が彼女なりにちゃんとあります。

それについても徐々に書いていきますので、長い目で見て頂けると幸いです。

第1章第4節（前書き）

今回は第1章の転機となる出来事があります。また新しい設定も出てきますので、それらも人物設定紹介、世界観設定に追記します。いろいろ考えましたが、この小説をできる限り続けることにしました。

完結目指して頑張りたいと思いますので、ご意見、ご感想をお待ちしています。

第1章第4節

ノゾムは次の日も商業区の集積場でバイトをしていた。

この日は相方はおらず、親方には集積場内の貨物の整理と記録を頼まれていた。

運ばれてきた荷と出荷した荷の確認が終わり、その旨を担当に伝えると、彼は伝えることがあるといい、ノゾムを自分のところと呼んだ。

「そう言えばノゾム、この間獵師が森で龍を見たっていう話を聞いたことあるか。」

「龍……ですか？」

龍。

大陸で最強の存在。

精霊種の1種で絶大な力を誇る。

かつては龍を倒し、その力を手にした者もいるらしい。

龍殺しと呼ばれるその存在は今現在おらず、歴史の教科書や伝説に残るのみである。

「でもこんなところに龍なんて伝説上の存在いますか？」

「おれもそう思う、おおかた竜を勘違いしたんだろう。まあお前はよく森に行くんだ、竜だとしても耳に入れておいたほうがいいと思うてな。」

そう言うと親方はニカツと笑った。

竜は龍と違い、魔獣の1種である。

力は龍に及ばず、また知能も低いが人間には非常に大きな脅威である。

その力は魔獣のカテゴリでは間違いなく最上位の1種で。確か

にどう考えても俺では勝ち目はない。

「分かりました。気を付けます。」

俺は親方に礼を言いい、師匠のところへ行くために帰路についた。

ノゾムは家に帰り、愛刀などの準備をして師匠の小屋に向かう。

服装は魔獣の皮を使用した動きを妨げない最低限のもの、腰のベルトにはナイフとポーチを取り付け、ポーチの中にはポーション等の治療具一式、あとは、煙幕玉と音玉と爆雷玉が入っている。

煙幕玉はその名の通り煙幕を発生させるもの、音玉は大きな音を出して驚かせるもので、うまくいけば弱い魔獣なら追い返せる。

最後に爆雷玉。

これは投げた周囲に上位魔法に匹敵する雷を放つ物で値段もそれ相応に高い。

しかし、彼は基礎能力が低い上、威力のある気術も気量の関係上使用回数が限られるので、もしものためにと、師匠が買ってくれたものだ。このように自分自身に影響する強化系のアイテムの効果は制限されても、自分自身の能力に依存しないアイテムの威力は制限されないのです、森に行くときは必ず持つていくようにしている。

シノの小屋に向かう途中、霧が出てきたので彼は少し足を速める。その霧は段々と濃くなり、1メートル先も見えないほどになる。

「まずいな、これは。」

ノゾムはつぶやき、常備しているコンパスを見るとクルクル回り、

一定の方角を指さない。

「どういうことだ、これは。」

この森は確かに多くの魔獣がいるが、コンパスを狂わせるような特性はなかった。

異常な事態に焦る気持ちを深呼吸して落ち着かせると、周囲をもう一度確認してみた。

木々が生い茂り身を隠せるが、安心して休めるような場所ではない。

「とりあえずここについても仕方がないか。」

とりあえず安全な場所の確保が必要と判断し、迷わないようにナイフで通る木々に印をつけながら歩く。

しばらく行くと森を抜けたらしく、木がなくなり、開けた場所に来た。

霧も徐々に晴れはじめたらしい。

彼がほっとした瞬間、突然周囲の風景がゆがんだ。

「えっ。」

次の瞬間、彼は見知らぬ場所に立っていた。

周囲を山々が囲み、見渡す限り不毛の地。明らかにアルカザム周辺ではない。

困惑している彼を巨大な影が覆った。

何事かと思い上を見た瞬間、ノゾムは絶句した。

巨大な黒い物体が空の半分を覆っていた。

それは巨大な5色6枚の翼を持ち、力強く羽ばたいている。それには漆黒の鱗があり、その重厚さはその生きてきた年月を象徴しているようだ。

その瞳は深淵の闇を抱き、地上のちっぽけな彼を睥睨している。それすべてが絶望を体現していた。

“滅龍王ティアマット”

同族の龍族すら食らい、恐れられた異端中の異端の龍。5千年以上前に地上から消えた伝説の龍がそこにいた。

ノゾムは呆然とした表情で佇んでいた。

今の自分の状況が理解できないのだ。

普通に考えればいくら魔獣が出るとはいえ自分の生活する街のすぐ目と鼻の先で伝説の龍に遭遇するなど考えない。

混乱している彼は知る由もないが実はこの空間はティアマットを
持て余した龍族が大陸の地脈を使い、精霊たちの住む幽界と現実世界
の狭間に作った仮初の世界でティアマットを封印するための世界
なのだ。

ただ、所詮仮初の狭い世界、極端に強い力を持つティアマットの
力を受けて揺らぐことがある。

その揺らぎは地脈を通し、つながれた地脈のせいで大陸のどこか
に繋がり、道を作ることがある。

その道はティアマットが通るには遙かに小さいが、人間などのた
いていの生物は通過できる。

彼はその道を知らないまま通り、この封印世界に来てしまったの

だ。

ティアマツトがノゾムを見下ろす。その眼には久しぶりの獲物を見つけた純粹な歡喜がある。

漆黒の龍は翼をたたむと一直線にノゾムに向かって降下してきた。ノゾムは咄嗟に全身に気を張り巡らせ、地面を蹴ってその場から離れる。

直後、轟音とともにティアマツトが降り立つ。

龍の自重と、降下時の衝撃で地面がめくり上がり、衝撃波とともに周囲に飛び散る。

ノゾムは衝撃波にもみくちやにされながら吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

咄嗟に受け身を取ったので目立った外傷はないが、飛び散った石や岩の破片で所々切り傷ができている。

彼は即座に撤退を決めた。

持っていた煙幕玉をすべて叩きつけ、発生した煙幕にまぎれて全速で森まで逃げる。

森の木々に隠れてしまえば逃げる時間が稼げると彼は考えた。

だが考えが甘かった。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

彼が煙幕にまぎれて走っていると、途轍もない咆哮とともに煙幕が全て晴れてしまった。

それだけではなく襲ってきた衝撃波で再び吹き飛ばされた。

ティアマツトの方を見ると、奴は一切動いていない、どうやら単

純な咆哮と、それに伴う衝撃波だけで、煙幕もろとも吹き飛ばされてしまったようだ。

ノゾムが驚愕しているとティマツトは口を大きく開く、その口には黒い巨炎が集まる。

その炎は様々な色が混じった混沌の黒。

ノゾムは自分の本能が鳴らす最大の警報に従い、瞬脚で離脱する。吐き出された巨炎は彼のギリギリ横を通過し森に着弾。

次の瞬間、世界から音が消失した。

ノゾムは気が付くと空を舞っていた。

人生初体験の空中遊泳、そんな自分を他人事のように感じていが、数秒後、地面に叩きつけられた衝撃で彼の意識は無理矢理現実に引き戻された。

落下の衝撃で痛むからだに鞭を打ち、ポーチからポーションを取り出して飲み干す。

回復薬が体を癒していくのを感じながら森のあった方を見て絶句した。

森は完全に焼失していた。

着弾地点にはソルミナティ学園が入ってしまったのでは思えるほどのクレーターができており、その中の存在は完全に消滅していた。

クレーター周辺の木々は吹き飛ばされた上、一瞬で焼き尽くされたのか、原形すら分からない状態で炭化している。

かろうじて焼かれなかった木々も衝撃波ですべて根っこから吹き飛ばされていた。

呆然とした表情でティアマツトに振り替えると漆黒の龍が翼を5色6枚の翼を広げた。

翼に無数の5色に彩られた光球が作られる。

“精霊魔法”

世界の眷属と呼ばれる精霊種たちが使用する魔法。精霊種以外が使用する他の魔法と違い、外界に干渉するプロセスを必要としない魔法は奴がその魔法を使うと決めた瞬間に発動し、他の魔法に比べ圧倒的な速攻が可能となる。

ノゾムは再び本能が鳴らした警鐘に従い気の身体強化を全力でかける。

無数の光球が光の尾を引きながらこちらへ向かってくる。その量は桁外れで彼の視界の大半を埋め尽くす。

ノゾムは全力で退避しながら刀で光球を切り払うが、あまりの量にたやすく光の群れに飲み込まれる。

それでも致命傷を避けようと全力で抵抗する。

光の雨がやんだとき、その場には身体中を貫かれたノゾムがいた。

彼は、ポーシオンを複数鷲掴みにして一気に煽る。

「ぐううう！」

ポーシオンが無理やり体を癒す感覚にうめきながらティアマツトを見ると、奴は悠々とこちらに近づいてくる。

森の状態を見れば逃げることは不可能。

身を隠す森は焼失し、たとえ身を隠せてもまとめて吹き飛ばされる。

もはや彼に選択肢は一つしかなく、絶望しかない戦いが始まった。

「ハアハアハアハア……………」

戦いが始まって十数分。

いや、それは戦いではなかった。

戦いとは敵と成りえる存在がいてこそ成り立つものであるが、漆黒の龍にとってそんなものは目の前にはいない。いるのは自分の退屈を紛らわせるだけの玩具である。

漆黒の龍ならば瞬きの内にノゾムを殺せるが、龍にとって、これは戦いではなく遊びである。

ちょうど猫が仕留めたネズミをもてあそぶように。

だが、それゆえにノゾムはこの永遠ともいえる十数分を生き延びられていた。

それでもその先は絶望しかなかった。

後先考えずに放った全力の斬撃や気術は鱗に傷すらつけられない。ティアマツトが振り下ろす腕を避けても衝撃波で吹き飛ばされる。逃げることは状況的に不可能。

手持ちの道具には相手の鱗を貫けるものはない。気量も尽きかけ、気術での身体強化も限界に近い。

そんな綱渡りの状況で、ついに限界が訪れる。何度目か分からないが、吹き飛ばされ、地面にたたきつけられた衝撃で体が痺れる。気術の効果が切れたのだ。

最後のポジションを震える手で飲み下し、どうにか立ち上がる。

そんなノゾムにティアマツトは再び塔の様な腕を振り上げる。

その腕を気術による強化ができない彼は避けきれない。

ノゾムは避けようの無い死を目の前にして、今までのことを走馬灯のように思い返していた。

ノゾムside

朦朧とした意識の中、絶望的な状況の前に走馬灯が流れ、自身
身の過去を思い返していた。

故郷にいる両親の笑顔。

「考えてみれば、ろくに親孝行してないな。
いい両親だった。」

リサを支えたいという自分の我儘に何も言わず、生活も良くない
のに学園に通わせてくれた。

リサに出会い、一目惚れをした。

「考えてみれば初恋かあ、初恋は実らないっていうけどこれは実っ
たっていうのかな？」

あの時、告白し、一度は確かに想いが伝わった。しかし結局は…

……

リサの夢を支えたい。その誓いを胸に、ただその思いだけでソル
ミナテイ学園の扉をたたいた。

「リサの夢を支えたい。そう願ったけど……今でもそうだけど……
……。」

思うように伸びない実力と成績、焦りが募り、足掻いたが能力抑
圧の発現でその道を閉ざされた。

リサに突然別れを言い渡され、学園から孤立した。

「おれが……悪かったのかな、何でなのかな、何で……何も答えて
くれなかったのかな……。」

いまでも胸の奥がいたい。考えるだけでいたい。彼女にとって俺
は大したことない存在だったのかな。

師匠と出会い、わずかだけど光がさした。

「師匠に出会えてよかったな。破天荒な人だけど、間違いなくいい人だもんな。」

散々振り回され、地獄のような鍛練の日々だったが、彼女は間違いなく自分の身を案じてくれた。

初めは無視する気だったのに、ワイルドドックに襲われた自分を、文句を言いつつ助けてくれたのだから。

今思えば、彼女の前では以前の自分に戻っていた。素直に笑い、素直に怒っていたころの自分に。

次の瞬間、衝撃が彼を襲い、彼の思い出を彼の意識ごと消し去った。

ノゾム side out

ティアマットの腕がノゾムの前の地面を叩く。その余波で彼は吹き飛ばされ、無様に地面を転がる。

ティアマットは明らかに遊んでいた。その表情は面白そうで、彼を完全に脅威としていない。

ティマットが大きく口を開く。その深奥に混沌の炎が集まる。彼で遊ぶのに飽きたのか、はたまた彼がどのくらい耐えられるのかを試しているのか。

いずれにしろ、今の彼には抵抗する術がなかった。

「ググ、アグツェ……。」

彼はすでに声にならない声をあげて、その炎を見つめる。

すでに彼の意識はほぼ無く、もはや過去を思ふことすらできなかつた。

走馬灯は過ぎ去り、ただ濃密な冷たい死の気配だけが彼を包んでいた。

“死ぬ。”

彼はその濃密な死を直視し、硬直する。

“死ぬ”

それはかつて森の中で一人ワイルドドックに襲われた時以上の“死”。

“嫌だ”

理性による思考能力のほぼない彼は、本能のままの思考を展開する。

“死にたくない”

それは強烈な生への渴望となって、彼の中の最後の命を燃やす。

これでは目の前に迫る死の巨炎を避けられない。
ふと自分の体を見ると身体中を見たこともない鎖が縛っていた。

“こいつのせいか!!”

彼はこの鎖が自分の枷であると確信し、引き千切ろうと鎖に手をかける。

普通に考えれば鎖を引き千切るなど簡単にできるはずがない。だが彼にはなぜか鎖を千切れるという確信があった。

” 邪魔・すんなああああああああああああ!!!!”

力任せに鎖を引くと、崩れるような音をたてて鎖がちぎれる。

次の瞬間、彼は一瞬で加速し、巨炎の下をくぐりぬけた。

あまりの加速にティアマットは一瞬彼を見失った。千載一遇の機会にノゾムは全力を掛ける。

身体には今までにないほど気力が満ち、血はまだ流れているものの、身体は彼の思考を即座に反応する。

彼の身体的能力は明らかに全快時の状態以上に跳ね上がっていた。走りながら抜いていた刀を納刀。納刀した刀に全力で気を送り込む。送り込んだ気を極圧縮。裂ばくの気合とともに刀を抜刀する。

気術 “幻無”

髪の毛よりも細く、鋭く圧縮された気は、抜刀の速度と同じ速度で飛翔。ティアマトの両目を真一文字に切り裂いた。

考えてすらいらない反撃にティアマトが咆哮し首を持ち上げる。

幻無は刀身に圧縮された気による斬撃を放つ単純な技だが、極圧縮された気は視認することは難しく、高速の抜刀術と同じ速度で飛び、十数メートル以内なら、ほぼ抜刀した瞬間に着弾するので回避は非常に困難である。

しかも極圧縮された気は、鋼鉄の盾だろうと魔法障壁だろうと問答無用で両断し着弾するので防御も難しく、極めて殺傷能力が高い技である。

ただ、気を極圧縮する必要があるので、半秒から数秒の溜めが必要であり、また複数の敵に囲まれた状況では大きな隙をさらすことになる。

ティアマトに駆け寄ると奴は前足を持ち上げ、何度も地面に打ち込んだ。

巨大な前足が何度も何度も地面を叩き、その度に地面が揺れ、局所的な地震を起こす。

ノゾムはあわてて離脱し、ギリギリ奴の前足の間合いから離れるが、あまりの地響きに足を取られる。

このままでは身動きが取れない。だが次の瞬間、地面が陥没しその穴にティアマトの巨体が入り込んだ。

どうやら地下に存在していた空洞を踏み抜いてしまったようだ。ティアマトはどうか抜け出そうとしているが、目をつぶされているのでうまくいかない。

ノゾムは奴との間合いを詰めながらポーチの中のそれを全て取り出し、一塊にして奴の頭に投げつける。

投げつけたのは音玉。それはティアマトの顔面近くで炸裂し、

強烈な音を周囲に響かせる。

至近距離で音玉の直撃を受けたティアマットは一瞬目を回し、動きが鈍る。

これがもし精霊ならここまで大きな影響は受けなかっただろう。龍は精霊種の一つであるが源素の塊とはいえ物理的な肉体を持ち、生物としての側面を持っている。

物理的な肉体の感覚を使ってるがゆえに、不測の事態でその感覚が失われたり、混乱させられることがあると、その影響をもろに受けってしまうことがあるのだ。

もちろん彼ら龍は物理的な影響を受けやすいとはいえ精霊種である。それにふさわしい超常的な感覚も身に着けてはいるが、肥大しすぎた力を持ち、それゆえに理性の大半を維持できないティアマットはあり得ない事態の連続に完全に混乱していた。

ティアマットは完全に動きを止めている。ノゾムはティアマットのそばに全速力で駆け寄る。

狙うのは龍の首。首を狙った理由は、かの龍の頭の頭蓋を割れるか、ノゾムには自信がなかったからだ。

龍は物理的な肉体を持つ。つまりその肉体を死に至らしめることができれば、殺せるのである。

肝心なことは奴の肉体を殺すこと。

だが、龍自体が極めて強い肉体を持つので、容易ことではない。

ノゾムは持ち上げられた龍の首に向かって跳躍。再び納刀した刀に気を送り、極圧縮。抜刀しつつ、刀を一閃する。

気術“幻無”がティアマットの喉元の鱗を切り裂き、圧縮した気

次の瞬間、眩い光とともに雷が奔った。上位魔法に匹敵する雷は突き入れた刀と首の神経を通り、龍の脳神経細胞を焼き切った。だが雷は彼の体も焼き、残っていた力を完全に奪い取った。

龍の巨体が崩れ落ち、彼の身体が投げ出される。龍の身体はわずかに動いているが、その眼にはもはや生命の輝きはない。

やがて龍の巨体が崩れ落ち、光の粒子となって津波のように舞い上がる。

ノゾムは光の粒子が天に舞い上がる様子を、もはや考えることも出来ず、ただ見ていた。

彼自身も満身創痍、四肢あるが無事な所はひとつもない。

やがて光の粒子は、彼の上空で集まると、怒濤の勢いで彼めがけて落ちてきた。

限界を超え、動くことができない彼は迫りくる光の激流に飲まれ、意識を失った。

ゆっくりと意識が覚醒する。

いまだ夢の中にいる意識がティアマットとの戦いを思い出し、覚醒する。

激痛が全身を襲うが無理矢理上体を起こし、周囲を見渡すとそこは都市郊外の森の中だった。

「いつの間に……戻って……きたんだろう。」

訳の分からない状況の中、全身に走る痛みが先程の戦いが夢でないことを伝えてくる。

「とにかく師匠のところ……」

自分がどれだけ意識を失っていたか分からないが、ここに居続けるのは得策ではない。そう判断し、ノゾムは痛む体を無理やり動かし、朦朧とした意識の中、シノの小屋へ向かう。

自分が歴史上数人しか存在しなかった“龍殺し”になったことに気付かないまま……。

第1章第4節（後書き）

第1章第5節投稿です。

いかがでしたか？今回ティアマツトを倒して龍殺しになった主人公ですが、完全な最強にはなりません。理由は次回の話で説明します。彼がティアマツトを倒せたのは、ティアマツトの油断や龍の体の特性、5000年間の封印、主人公のいきなりの能力の変化、空中ではなく地上だったなどいくつもの偶然が重なった結果です。本来なら彼ごときでは傷も負わせられません。

今回はいろんな意味で転機のきっかけとなる事件です。

そろそろ第1章の終結も近いです。第2章は設定はほぼできていますが、まだ執筆していません。

第1章の結末もまだ途中なので、少し時間がかかるかもしれませんが、ご容赦ください。

それではまた。

第1章第5節（前書き）

まずはじめにすみません。書き始めたら色々アイデアが浮かんで付け加えたので主人公の龍殺しの説明は次回になりました。

正確には完全な最強主人公にならない理由です。

今回はほとんどがシノばあさんの話。

考えてみたらシノばあさんは主人公を成長させるための存在なのにヒロインっぽい……………。

というかヒロイン登場していないorz

第1章第5節

夢を見ている。ノゾムにはそこが何処だかわからないが、少なくとも夢であることは分かった。

真つ暗な空間の中に彼はただ一人立っている。その空間に地面はなく、一面を水が湖の湖畔の様に広がっている。

周囲には人や水以外のものは存在せず、風すら吹いていない。水面にも波はなく、全く音というものが聞こえない。

ふと彼が下を見ると、水中に何か巨大なものが見えた。漆黒の巨躯と5色6翼の翼。滅竜王ティアマツトである。

巨龍はこちらを凝視してくる。その眼の奥にある感情がなんなのか、ノゾムにはわからなかった。

しばらくお互いが無言で見つめあっていると、徐々に周囲が明るくなってきた。どうやら目を覚ますらしい。

まだ自分が生きていることにすこし安堵しながら、再び龍に視線を移す。

龍はいまだこちらを見つめているが、やはりその表情は読めない。ノゾムは一抹の不安を抱えながら、白い光にのまれた。

「おや、起きたのかい。」

「うおあ！」

目の前にドアップで映ったのは皺くちやの老婆の顔、ノゾムは思わず大声を上げて寝ていた布団を跳ね飛ばす。次の瞬間顔面に強烈な拳打をくらった。体中傷だらけの彼はその衝撃が傷に響き、声も出だせずにのた打ち回るハメになった。

「し、師匠ひどいです……………」

「ひどいのはどっちじゃ！せっかく人が森から連れてきて3日間も

看病してやったというのに！……！」

彼の全身には包帯が巻かれ、薬の香りが漂っている。本当に治療してくれていたようだ。

「すみません師匠。ありがとうございます。」

シノはいまだ頬を膨らませているが、その眼はともうれしそうだ。よほど心配してくれていたらしく、そのことを思うとノゾムは自分の胸が暖かくなってくるのを感じた。

「さて、3日間も徹夜で治療したんじゃ。あんなところでどうして傷だらけで倒れていたのか話してくれるんじやろうな？」

師匠の纏う雰囲気かわる。極致に達した達人の雰囲気に吞まれ、自然と背筋が伸びる。

「……………わかりました。すべてお話しします。」

張り詰めた雰囲気の中、彼は自らの事の顛末を話し始めた。

数時間後、すべての顛末を話し終えた後には、静寂のみが残った。「……………ついてくるんじや。」

師匠が一言だけいうと刀を取り、小屋の外へ向かう。ノゾムも刀を取り、外に向かう。

外に出るとお互い無言で刀を構える。構えるのはお互い抜刀術の構え。いまだ彼の体には無数の傷が残り、巻かれた包帯が痛々しい。

「いつツ！！」

ティアマットとの戦いで負った傷が痛み、声が漏れる、ぼろぼろの体は刀を構えるだけでつらい。

次の瞬間、師匠が一瞬で踏み込んできた。傷の痛みを意識を割かれていた彼は明らかに反応が遅れる。咄嗟に刀を抜刀するがこれまでの経験からどう考えても間に合わない。

しかし、シノの刀はノゾムの予想に反し、甲高い音とともに彼の刀にはじかれていた。

「えっ。」

彼は気の抜けた声をついもらしてしまう。今までの彼なら今の攻撃は防げなかった。

「やはりのう。」

「ど、どういうことですか師匠。」

シノが納得したように声を漏らす。その声に反応し、ノゾムが問いかける。彼は明らかに困惑している。

能力抑圧によって制限された能力は咄嗟の行動にも大きく影響する。筋肉の瞬発力が不足し気量も制限されているので、単純な行動では不意打ちを防ぎ切れない。そのため彼はその時の状況に対応した刀術の動きを欠かさず鍛錬しているのだが、今回のシノの斬撃は

その動きをする余裕はなく、単純な抜刀術で対応してしまった。

本来なら間に合わず、切り伏せられるが、なぜか防ぐことができた。その理由は、

「おぬしの身体能力が上がっているのじゃよ。」

それがシノの攻撃を防げた理由、

「で、でも俺は。」

「たしかに能力抑圧のせいでおぬしの身体能力は上がらん。しかし龍殺しは龍の力を継承し、さらに強くなるという。それがおぬしに起こったことじゃろう。」

「俺が、龍殺し……………」

ノゾムはさらなる困惑の渦にのまれる。当然だろう、龍殺しは伝説上の存在。一番新しい龍殺しでも生きていたのは数百年前、今現在には存在していない。

最強の継承者。絶大な力の体現者。既存の魔法では説明できないような魔法を使う者や異能に目覚めた者もいる。そんなおとぎ話の存在なのだ。

「といっても対して強化はされていないようだが……………」

「えっ！……！」

伝説を否定しかねないシノの発言にノゾムはもつと困惑する。

「やはり能力抑圧の影響が大きいのじゃろう。そういえばおぬしティアマットの戦いするとき能力抑圧を解除した様じゃが今もできるの

か？」

師匠の言葉にあの戦いのときのことを思い出す。確かにあの時、自分を縛る鎖とそれを引きちぎる感覚があった。そしてその後の解放感。鋼鉄の楔を解き放ち、何処までも行けるのではないかとも思えるほどの感覚を思い出す。

ノゾムは己を縛る鎖をイメージした。すると体に巻きつけられた鎖が浮かび上がる。

「あつ。」

思わず声上がる。

「どつやらできそつじゃのつ。」

シノの言葉にノゾムはうなずく。

「それで……………おぬし、どうするのじゃ。」

「どうするって……………」

「その力、桁外れに強大じゃ、強い力は様々なものを引き付ける。地位、名誉、権力、嫉妬、あげればきりがない。……………改めて聞くぞ、おぬしこれからどうしたいのじゃ。」

「……………」

ノゾムは答えられない。今までこれからのことなど考えなかった。今しか考えなかった。

いや、今も見えていない。彼はいまだ彼女に、過去にとらわれているのだから。

「前々から思つとつた。おぬしにはこれ以上強くなる理由がない。」
「そ、そんなことは……………」

言いよどみ、逃げ道を探そうとするノゾムにシノは厳格な態度と表情で断ずる。

「恋人のためか。かの女子はすでにおぬしの恋人ではなからう。そやつを支えたいと思つてもそやつ隣の隣にはすでに別の男がある。おぬしが強くなる理由はない。……………おぬしもすでに分かっていたことのはずじゃ。」

シノの言葉は容赦なくノゾムの心を抉る。今まで蓋をして無意識に考えようとしなかつたことを無理矢理直視させられる。

ノゾムは言い返すことができず、ただ俯くしかなかった。自分でも分かっていたことだから。

今の彼女のそばに自分の居場所がないことも、すでに自分の居場所がああ学園にはないことも。

「……………まあいきなり先のことを決めろというのも無理じゃろう。今は傷を治すことに集中するとじゃ。」

“いずれ選択を迫られるがのう。”シノは最後そう言って釘を刺すと小屋へと戻る。

「……………さすがにその怪我で街に変えるのは無理じゃろ、今日は泊まっていくがいい。」

小屋に入っていくシノを見届け、ノゾムも覚束ない足取りでシノの後を追う。その表情は曇つたままだった。

「そうじゃ、まだ言っとらんかった。」
「?????」

シノが再びこちらを向くが、ノゾムは彼女が何を言う気なのかわからなかった。

「……………おかえり。かんばったのう。」

彼女は嬉しそうに、本当に嬉しそう顔を綻ばせる。その顔は隠しきれない疲れが見えるものの、心からの安堵があった。

彼の身を案じ、ずっと付つきりで看病してくれたのだ。彼女の深い愛情はこの街に来てから凍りついた彼の心を優しく溶かす。久しぶりの心からの愛情に彼の視界がゆがむ。

「た……………だい……………ま。」

声はかすれ、やがて啜り泣きとなり誰もいない森に木霊する。
そのそばでシノはただ泣き続ける彼の背中をさすっていた。

シノside

目の前ですすり泣く彼の背中をさすりながら、私は彼をあやし続ける。まるで小さな子供の様だ。

……………無理もないのかもしれない。恋人に捨てられ、今まで友達だと思って信じていた人たちからの嘲笑と侮蔑、私にも経験がある。

私はそもそもこの国の人間ではない。この大陸の東の果てにある島国の出身だ。

その国は領土こそ大きくないが独自の文化や気術、呪術（こちらでは魔法か）を発達させてきた。

高い山と海が隣接し、戦や魔獣の討伐では巨大な軍隊は身動きが取りづらく、勝利には必然的に個人、または少数で高い力量と、状況対応能力が求められた。

私たちの一族はその中でも群を抜いた武勲を誇っていた。刀術といえは間違いなく私の家が筆頭であり、私はその家の次女として、この世に生を受けた。

刀術の名家に生まれたがゆえに幼いころから刀の修行を強制されたが、それを当然だと思っていたし、私もそのことに疑問を抱かなかった。

才能があつたのか、私はすぐさま頭角を現した。メキメキと腕を上げていく私に両親も誇らしそうだったし、歳の離れた姉も我が事のように喜んでくれた。

だから、私はますます刀術にのめり込んだ。自分でもどうしようもないほどに。

腕を上げ続け、遂には家のだれも私に勝てなくなった。

刀術の筆頭たる家で最も刀術に優れているということは、必然的にこの国の一番の使い手であるということだ。

そのため私には多くの弟子が師事を願い出てきたし、有力な権力者が強力な魔獣の討伐などをこぞって頼みこんできた。

刀のみの生活をしていいたから、女らしく着飾ることもしなかったし、化粧や恋なども興味がなかった。

そんな私に両親は呆れて無理やり見合いを進めてきたが、姉だけは私の味方をしてくれた。

この時の姉は女の私が見惚れるほどの器量良しで、各地の名家たちがこぞって婚姻話を持ち掛けていた。

しかし、姉には心に決めた人がいるらしく、頑としてその縁談を受け入れなかった。

そんな日々を過ごしていたある日、私は彼と出会った。

彼は姉に付き添われて修練していた私のところにやってきた。

優しそうな瞳と穏やかな微笑み。体つきは一般の成年男子よりも小柄で、知的な雰囲気醸し出していた。

彼はこの国の呪術の名家の3男で、頭首である彼の父が我が家に来るときの馬車に紛れ込んできたそうだ。

そしてそれに姉も結託し、屋敷にこっそり招きいれたと言っていた。

あきれ返る私に彼は真剣な表情で頼み込んできた。

「あなたがシノ殿ですね。実はあなたに折り入ってお願いがあるの

です。」

彼の頼みとは自分に刀術を教えてほしいとのことだった。

何でも彼はほとんど魔力がなく、呪術の名家の中では落ちこぼれであり、居場所がなかったそうだ。

だからこそ、家族達に認めらるる為に武術とそれに連なる気術の修練を独自にやっていたが、やはりうまくいかなかった。

そんな時、国の重鎮たちの会食のときに姉と知り合い、私の事を聞いたらしい。

姉もそんな彼の頼みを断りきれなかったそうだ。

彼の熱意を汲んで彼を試したが、まったくだめだった。

我流のせいで変な癖がつき、刀本来の鋭さがまるで生かされていない。体裁きも悪く、足や腰、腕がまるで連動していない。

はじめは話にならないと断ったが彼が余りにしつこいのと、姉の真摯な頼みを断りきれず、結局彼に刀術を教えることにした。

「違う！刀の持ち手が逆だ！！！師事される身なら基礎くらい身に着けてから来い！！！」

「何だそのへっぴり腰は！じじいの餅つきのほうがまだ迫力があるぞ！！！！」

「泣くこともわめくことも許さん！きさまは私の練習用の木偶だ！

本物の斬撃というものを体に教え込んでやる！！！」

「……………まあ今思えば私も少しとがっていた頃だったからちよつとだけやりすぎたかもしれん……………」

はじめはろくに基礎すらできなかったが、徐々に彼は強くなっていった。

姉はそのことをとても喜んでいたし、わたしは表に出せなかったが嬉しかった。

自分をはじめから仕込んだ弟子が強くなっていくのだ。嬉しいわけがない。

この頃からか、私は時々彼の事で考え込むようになった。

食事のとき、寝ているとき、湯浴みをしているとき、修練をしているとき。

やがて時間も場所も関係なく彼のことを思い出すようになり、姉に相談したが、

「誰でもそんなときがあるわ、気にしなくても大丈夫、いずれ治まるわ。」

といった。

しかし、それは治まるどころかますます大きくなり、どうしよう

もなくなっただけだった。

そんな様子を見た我が家の女中が尋ねてきた。

「シノ様、もしかして恋をしていらっしやるのですか？」

その一言は今までの私をひっくり返してしまった。

「こ、恋？」

「はい、恋です。やはりシノ様は恋をしていらっしやるんですね。」

「し、しかし・・・私が恋など。」

「シノ様。恋は誰にも訪れます。そしてそれは誰に止められません。たとえ神様でも恋に落ちることがあるのですから。」

その女中に話を聞いているうちに、私は自分の恋心を完全に自覚してしまった。

そして自覚してしまうと自分でもどうしようもないほど彼を意識してしまう。

彼の立ち姿や真摯に修練を打ち込むときの瞳。休憩時間中のたわいない話や彼の修練服からの汗のにおいにすら心を躍らせてしまう。

そんな自分が嫌でつい彼を避けてしまったときも会った。

「どうして私を避けるのですか。」

かれが私に問いつめる

「……………避けてなどいない。」

「うそです。今までのように私に目を合わせる事すらしなくなったではありませんか。」

「……………勘違いだ。」

「いいえ。勘違いなどではございません。」

「ずいぶんと自信たっぷりだな。」

「はい、ずっとあなたを見ていましたから、あなたが私の事を知るよりずっと前から。あなただけを」

「……………なに？」

彼の言葉に何か深い意味を感じてつい問い返してしまった。

「……………ずっとあなたに憧れていました。この国随一の刀術を誇り、それに驕らない高潔な心とその刀のように透き通る瞳に。私ごときがこのようなことを言うのは分不相応だと思っておりますが・・・私 はあなたを愛しております。この世の誰よりも。」

それは間違いなく愛の告白。

私の心臓は私の胸を破裂させるほど高鳴り、顔は夕焼けよりも赤くなり、私は彼の顔を見ることができず、彼に背を向ける。

「……………馬鹿か貴様は。私のような女の身だしなみひとつできぬ様な者を好くなど。」

普通の男なら私より姉のような女性らしい人を好くだろうに。

「かもせしれません。ですが私が愛したのはあなたです。ほかの誰

でもありません。．．．もしよければ私とともに歩んではくれませんか？」

「……………馬鹿だ馬鹿だと思っていたがこれほどの馬鹿とはな……………」の……………阿呆。」

「ええ馬鹿です。それで、答えを聞かせてはくれませんか。」

「……………あなた様の気持ち、確かに受け取りました。不束者ではございますが末永くよろしくお願いいたします。」

私は彼とともに歩むことをこのとき誓った。

私と彼との仲はすぐに知れ渡り、あれよあれよという間に祝言の日取りまで決まってしまった。

武術の名家と呪術の目池の縁談は大々的に告知され、両親も喜んでくれた。

ただ、姉は体調が良くないらしく部屋にこもることが多くなっていった。

そして祝言の日、あの事件が起こった。

その日集まった親戚の前で突然一人の男が私に言い放った。

「彼女は将来を誓った相手がいるにもかかわらず、ほかの男と蜜月をかわしている。この祝言は穢れに満ちたものであるぞ！！！」

その男はかつて姉に求婚して来た男の一人で、縁談を断られ、我が家にまで詰め掛けてきたことのある男だった。

突然の出来事に祝言の場は騒然とし、誰もが困惑していた。私はその男の言うことがでたらめであると断言したが、その男は自信満々にこういった。

「ならば彼女の部屋を確かめれば良からう。」

と、そして私の部屋からは身に覚えのない男の下着が見つかった。

このことで新郎側の親族は激怒し、祝言はご破算となり、私は両親から責め立てられた。

私は必死に無実を訴えたが聞いてもらえず、彼も冷たい瞳を私に向けるだけだった。

私は姦淫をしたことで破門され、部屋に軟禁された。

そして1年ほどたったある日。姉が私を訪ねてきてこういった。

「あ那时的男、あれは私が差し向けたの。」

「……………えっ。」

「あなたを祝言の場で問い詰めれば縁談の話を考えてもいいってね。そうしたらあの男、大喜びして話に乗ったわ。」

「な……………んで……………ですか、あねっえ。」

そう問いかける私に姉は憤怒の表情で詰め寄ってきた。今まで見たこともない姉の表情に恐怖し、後ずさる。

「あなたが彼を私から奪ったから、私が最初にあの人を見つけたのに！私のほうがずっとあの人を見守ってきたのに！！！！」

その表情はまさに鬼女と呼ぶに相応しい顔だった。姉は私の髪の毛をつかみ上げて呪いの言葉を吐く。

「絶対に許さない！！あなたのすべてを奪ってやる！！！地位、名誉、なにもかも！！！人として2度と幸せを掴めないようにしてやる！！！！！！」

ブチブチと髪が千切れて痛み、私は子供のように懇願するが姉は一向にやめない。

「どちらにしてもあなたの居場所はこの家にはもうないわ。誰もあなたを庇わないし、助けない。じゃあねシノ。安心していいわよ、私が彼と生涯を添い遂げるから。」

姉はそう言うときびすを返し部屋から出て行く。

私はどうすることもできず、ただ泣くしかできなかった。

結局、私は家を出て行った。私の祝言での話は国中に知れ渡っていたため、国の中にも居場所はなく流れ続けてこの場所にたどり着いた。

「おぬしとわし、驚くほど似ておるのう。」

同じように見捨てられ、打ち捨てられたもの同士。はじめこそ過去の自分を見て嫌悪してたが、今ではかけがえのない弟子だ。

気がつくと弟子は泣きつかれたのか眠り込んでしまっていた。その表情に顔が綻ぶが・・

「グツ!!」

突然視界がゆがむ、頭が朦朧とし、意識が保てなくなりそうになる。

「ええい!このポンコツの体め!」
意識をどうにか繋げると視界がはつきりとしてくる。

(……………最近間隔が短くなってきている。もう……………長くないのう)

“ 睡死病 ”

本人の気が徐々に低下し、死にいたる病。原因は特定されておらず、完治は極めて困難な病気である。

治った例は数例しかなく、治った理由も特定されていない。

この病気は徐々に体から気が抜けていき、最後は眠るように死に至る。

しかしシノの顔には死の恐怖はない、あるのは後悔の念。

（もっと色々おぬしと話をしたかったのう。刀の技ばかり教えて・・わらしいといえ、らしいがのう）

胸の中で眠るノゾムを見ながら、彼女は決心を固める。

（最後におぬしに伝えることが、伝えたいことがある。そのときは……全力で……）

シノ side out

第1章第5節（後書き）

どうでしたか今回はシノばあさんと主人公の絆の確認とシノばあさんの過去話でした。

私では女性のドロドロとした関係表現し切れませんでした……

…すみません（涙）

第1章第6節（前書き）

まず皆さんに謝罪をさせてください。

以前主人公が普通の最強にならない理由を今回の話で説明するつもりでしたが、ちよつといろいろアイデアが湧いて書き足していたらその理由を書けなくなってしまいました。

書けるのはおそらく第2章の初めか、その時更新する登場人物紹介で書くと思います。

これも偏に私の行き当たりばつたりの執筆が原因です。すみませんでした。

第1章第6節

ノゾムside

ティアマツトとの戦いからおよそ3週間。師匠の手当のおかげで俺はどうか日常生活を送れるようになっていた。

師匠の薬は彼女のオリジナルらしく、ポーションの様な急激な回復力はないが、体の治癒能力を無理なく高めてくれる薬らしい。

戦場のような即座の回復が求められる場所ならともかく、ゆっくり休める街中では非常に頼りになる薬だ。

しかしこの3週間の間ろくに動けず、おまけに学園を3日間も無断欠席したため、3日ぶりに登校したときはアイリ先生に相当絞られる羽目になる。

だが、意外なことに3日間の無断欠席と全治3週間の傷は学園ではあまり騒がれなかった。

というのも、3日ぶりに登校したノゾムの体の傷を見たマルスが、

「なんだ、ポーつと道を歩いて馬車にでも轢かれたか。まったく、鈍すぎるぜ。」

と、いつもど通りの調子で馬鹿にしてきて、しかも周りもそれに同調したものだからそのまま有耶無耶になってしまった。

もつとも自分も否定しなかったのが原因の一つでもあるが。

ただアンリ先生は誤魔化されてはくれず、そのまま職員室でお説教コース行きになってしまった。

「ノゾム君、なにか隠しているでしょう〜。さすがに無断欠席の後にそんな怪我を負っているなんて、普通じゃないわよ〜。」

「い、いえ、別に大したことじゃありませんよ。単純に仕事中にドジをして怪我しただけで・・・。」

「嘘よ。ノゾム君森に入るでしょう〜。龍が出る、なんて噂はさすがにただの噂でしょうけど、それでも森の奥にいる強力な魔獣が街道の近くに来ることはあるわ〜。」

「……………。すいません。マジで龍でした。しかも結果的に倒してしまいました。などとは言えず、結局仕事中に事故があつて、その事故に巻き込まれたことが原因と言ひ張った。」

「じゃあどうして無断欠席なんてしたの〜、ノゾム君は寮住まいだから学校に連絡はできるわよね〜。」

「怪我のせいで熱を出して寝込んでいたんです。それに俺のことを気にかけてくれる同級生はこの学校にはいませんし……………。」

「……………。自分で言っていて少し悲しくなる。友人がいないのは事実だし、さすがに本当のことは言えないし。」

「ここはどっにかして言い逃れようとしていた俺だけど、」

「……………ぐす。」

なんとアンリ先生が泣き出したのだ。
突然のことで俺は困惑する。

「えっ。と、突然どうしたんですか。」

「え〜〜ん！ノゾム君はわたしのこと信じてくれないのね〜〜！
！こんな頼りない半人前のことなんか〜〜！！！！」

「えっ、え。ち、違いますよ。どうしてそんな話になるんですか！
！」

「だって本当の事話してくれないんだもの〜〜！！傷はどう見ても戦いの傷だし、事故があったなんて街では聞かないし、手当に使われてる薬はこの街で出回っている薬じゃないし〜〜！！。」

……………やっぱり誤魔化すのは無理があったようだ。

でもやっぱり本当の事は話せない。どうにか誤魔化そうとする俺と、泣きながら俺を問いただそうとするアンリ先生との攻防がしばらく続く。……………というかアンリ先生の泣き顔は反則です。

優しそうな瞳を涙でうるませてこちらを見つめてくる美女。しか

も彼女は純粹にこちらを心配しているだけ。

男ならその表情を見たら何でも言うことを聞いてしまいそうだ。

……………というかこの人、天然で男を落とすタイプの人間だよな、しかも本人に自覚がないから尚の事たちが悪い。

「ノゾム君……………話してくれないの？」

だ・か・ら反則ですってば！！！！

結果から言えば授業開始の鐘によってアンリ先生の説教という名の涙目攻撃は終了。俺は逃げるように職員室から退散した。

でもやっぱりアンリ先生は不満そうで、午前中の授業の間ずっとプリプリ怒っていた。

……………すみません先生。

「ノゾム君！ポーとしていないでこの問題を解きなさ〜〜い！」

そして授業中に集中的に指名される俺。

……………アンリ先生、いくらなんでも大人げないです……………。

午後は戦闘術の授業。前回と同じようにクラス内での模擬戦である。俺の相手は……

「またお前か最底辺。」

よりもよつてまたマルスである。

「お前も運がないな、この間に続いて俺が相手なんてな。まあ、お前じゃ誰が相手でも勝てないから気にする必要はないか。ハハハハハハハハ！」

相も変わらず人を馬鹿にしてくるマルスを無視して自分の立ち位置に立ち、自分の状態を確認する。

怪我の様子は大丈夫。きちんと治っている。

刀も大丈夫。模造刀だが自分の愛刀とほぼ変わらない感覚で振るえる。

能力抑圧は………どうやら解除できそうだ。

でも………解除はしない。

夢に見たティアマットとその時に感じた一抹の不安。そして解除してしまうことで自分の何かが壊れてしまいそうな予感。それらが自分の楔を解き放つことを躊躇わせていた。

「それでは、はじめ〜。」

ノルン先生の掛け声とともにマルスがこちらに迫ってくる。

はじめから俺を叩きつぶす気なのか、今回はすでに気術による身体強化を既に使用しているようだ。

突進してくるマルスから目を離さないようにして気術を使用し、身体能力を上げる。

「つぶれちまいな!!!」

マルスが大剣を上段から振り下ろそうとして、横薙ぎに変化させる。

俺は体を回転させて勢いをつけ、刀を大剣の下を打ち上げるように振り上げる。刀は大剣の下側を打ち上げマルスの剣筋を逸らす。

マルスはすぐさま剣の軌道を修正し、唐竹に振り下ろす。

俺は手首を返してマルスの剣筋に対して刀を斜めにかかげる。同時に足の力を抜いて衝撃を吸収し、剣戟を受け流す。

龍殺しとなったことで、わずかとはいえ上昇した身体能力は俺の体勢をマルスの斬撃で崩すことなく受け流すことを可能にしていた。

そのまま間合いに踏み込み刀を一閃する。

マルスは前回のようにガントレットで防ぐがこちらはすでにその行動を考慮している。

一閃させた斬撃のあたる瞬間、俺はわざと力を抜く。刀はガントレットで防がれるが、力を抜いていたことで即座に次の行動に移れる。

振りぬいた刀の勢いを利用し、さらに一步踏み込むと刀から片手を離し、さらに踏み込みの勢いを拳に乗せて、マルスの腹部に痛烈な拳打を打ち込む。

「がっ！」

マルスの顔が苦悶にゆがみ。体がくの字に折れる。

さらに下がったマルスの頭を抱え、その顔に膝蹴りを叩きこむ。

マルスは鼻血を噴出させながらよろめく。

さらに攻撃を加えようとするが・・・

「こ、この屑がああああああああああああ！！！！」

マルスの絶叫とともに大量の気が噴出する。

無作為に放出された気に押され、俺は一時互いの間合いの外に後退する。

マルスは憤怒の表情で俺をにらみつける。

自分の前に這いつくばるだけだった弱者に予想もしない反撃をくらう。完全にキレていた。

「殺す！この糞野郎！！絶対殺してやる！！！！！！」

マルスは激高したまま大剣に気を送り込む。注がれた気は猛烈な風の刃となって大剣に纏わりつく。

気術 “塵風刃”

剣に纏わりついた風の刃が近づく物体を切り刻む気術である。

また剣の周囲の風は相手の防御も弾き飛ばすので、風の刃に弾き飛ばされないほどの膂力で防ぐか、回避するしかない。

マルスは俺に風の刃を振り下ろす。

俺はその刃の軌道を見切って躲すが、マルスはそのまま連撃を放

っ。

その刃をかわし続ける。俺の膂力では今のマルスの剣を受け流そうとしても周囲の風に弾かれる。

だが怒りに支配されているマルスの剣撃は前回の模擬戦時よりも単調で、躲し続けること事には支障はない。

それを可能にしていたのは若干とはいえ上がった身体能力だ。能力抑圧が効いている状況下では、俺の今の身体能力は他の生徒たちと比べればやはり劣る。

それでもわずかとはいえ上昇した能力は俺の戦い方の幅をかなり広げてくれている。

今までは受け流すしかなかったが、いまは身体強化をして回避に集中すればマルスの斬撃をどうにか躲すことはできるようになっている。

俺は自分の成長を確かに感じながら、次の手の準備を始めた。

ノゾム s i d e o u t

マルス s i d e

「どっぴいっことだー！」

マルスは明らかに今までと動機の違う奴に戸惑っていた。

「なんで俺の剣が当たらない!!!!!!」

今までの奴はこれほどの動きはできなかった。

剣を受ければよろめき、回避は無様に地面を転がるだけだった。

最近は多少捌けるようだったがそれでも結果は変わらず、いずれ無様に地面に転がるだけだった。

だが今の奴の動きにそんな結果を見ることはできなかった。

俺たちに比べれば動き自体は遅いが、きわめて的確な回避。俺の剣だけでなく纏う風の刃すら見切っているのではと思えるほどの見切り。

ふと奴の顔を見るとその表情に焦りはない。確信した。あいつは俺の剣を完全に見切っている。

「ありえね・・・ありえるかよ!そんなこと!!!!!!」

奴は2学年最底辺。対する俺は実技なら学年の中でも上位。

俺の実力はBランクでも通用する自信がある。

俺は奴のふとアビリティを思い出した。

“能力抑圧”

本人の能力を一定以下に落としてしまうアビリティ。確か奴は力、気量、魔力に制限を掛けられていたはずだ。

そんな足枷をつけた状態でその俺の剣を見切っている奴は、本来ならどれほどの実力を身に着けていたのだろう。そしてそんな足枷をつけてもなお身体能力を上げたあいつはどれほどの修練を積んだのだろうか。

“……………認められねえ。認めてたまるか！”

奴の隠れた実力を冷静に判断していた理性の警告が感情が握りつぶす。

それが、俺の敗因だった。

マルス side out

マルスは今まで自分の力に自信を持っていた。生まれつき気量が多く、体格が優れていた彼はすぐに強くなり、周囲に彼に勝てる者

はいなくなつた。

いまだ10階級にいるが実力はある。そんな彼の力に対するプライドが彼の眼を曇らせた。

マルスの斬撃にノゾムがわずかに体勢を崩す。マルスはここぞとばかりに剣を振り下ろすが、それはノゾムの罠だった。

崩れたと思えたノゾムは瞬時に体勢を立て直すと、後方へ跳躍、マルスの剣は地面に突き刺さり、剣に巻き付いていた風の刃が周囲に土を巻き上げ、彼の視界を遮る。

「くそがあああああ！」

焦ったマルスは剣に纏わりついていた風の刃を今ノゾムがいたと思われる方向に開放する。

気術“裂塵鎚”

風の刃たちは風の塊となって、まるで破城槌のように突進する。

この選択は偶然にも周囲の土煙を吹き飛ばし、マルスの視界を確保するが、その時彼の目に飛び込んできた光景は己の選択の間違いを突きつける。

裂塵鎚を放った先にノゾムはおらず、彼はすでにマルスの横にいた。

土煙がマルスの視界を覆った時、彼は瞬時に瞬脚を発動、刀を納刀し、マルスの側面に回り込んでいた。

2人の視線が交差する。ノゾムは抜刀術の体勢を既に完了し、マルスは大きな隙をさらしたまま。

マルスには回避は不可能と判断。咄嗟にガントレットで防ごうとするが体勢が崩れ、行動がわずかに遅れる。

ノゾムの刀が抜刀される瞬間。

ゴ~~~~ン、ゴ~~~~ン、ゴ~~~~ン

「は~~~~い。試合は終了で~~~~す。今日の授業はこれで終わりだけどもみなしっぴかり復習してね~~~~。」

授業終了の鐘が鳴り、アンリ先生の号令とともに授業の緊張感から解放されたクラスメートたちが思い思いの話を始める。

ノゾムは半ばまで抜いた刀を収めると踵を返す。

マルスはただ何も言わず、訓練場を後にするノゾムの背中を見つめるだけ。

「おいマルス。どうだった、今日の落ちこぼれは。」

「見たところあいつ、今日は無事みたいだな。マルス、いくら相手するのがめんどくさいからって手抜きすぎたんじゃないか！」

取り巻きの2人が何か言ってるが、マルスにはその言葉は全く聞こえていなかった。

マルス side

あいつは間違いなく強くなっている。いや、元々強くて俺たちが気づいていなかったただけか？

少なくとも剣の技量なら間違いなく俺より上だろう。今日の模擬戦の結果がそれを示している。

「……………なんだこのモヤモヤ感は……………」

気持ちが落ち着かない。胸の内から怒りが湧き上がる……………なぜだ。

あいつが実力を隠していたこと？

……違う。少なくとも今あいつの事を考えても怒りは湧かない。

じゃあ誰に対して……そうか……俺に対してか。

……俺はこれほど俺自身に怒りを覚えたことはない。

……俺は自分の強さに誇りがある。少なくとも弱くて何もできないくせに陰でコソコソやる奴は大嫌いだ。

そしてそれ以上に踏み躪られても抵抗せずそれを受け入れるような奴はもつと嫌いだ。

今まで俺のあいつに対する感情はまさにそれだ。学年最底辺の扱いをされても表情一つ変えずにそれを受け入れるあいつ。それはまさに俺の一番嫌いな奴そのものだった。

だけど実際はどうだ。

あいつは誰よりも抗っていた。理由は分からないが、強くなるうとしていた。

そしてその努力は俺なんかが想像もつかないレベルだろう。

能力抑圧を持つ人間の能力が制限を超えて上がるなんて聞いたこともない。

それほど努力して抗っていたやつに俺たちがしてきた事はなんだ。ただ憂さ晴らしに罵声と嘲笑を浴びせてきただけじゃないか。

今までの自分に強い憤りを感じながら、俺は訓練場から出ていくあいつを見続けた。

マルス side out

第1章第6節（後書き）

第1章第6節終了です。どうでしたでしょうか。

今回の話は主人公の実力の片鱗を垣間見たマルス君です。

マルス君は単純に周囲の扱いに抵抗しない（実際主人公は逃避していましたがマルス君の勘違いも多少あります）主人公が気に入らなかつただけです。

つっぱっていて不器用な少年なんです。

さて、そろそろ第1章終幕が近づいてきました。あと2話ほど終了・・・できればいいなあ（汗）

明日から仕事で更新が2、3日できなくなりますがご容赦ください。………というかこの小説楽しみにして下さる方いらっしやるのかな（汗）

第1章終幕・前編（前書き）

第1章終幕・前編投稿です。

2、3日投稿できないはずでしたが投稿できました。

第1章終幕・前編

ノゾムside

マルスとの再度の模擬戦から数日後、この日、俺は放課後すぐに寮に帰ると師匠のところへ向かう。今日は師匠から授業が終わったら小屋まで来るように言われていた。

実は学年末試験が近く、試験まで残り2日と迫っていた。

いくら多少能力が上がったとしてもソルミナティ学園の試験は難解だ。

それが学年末試験ともなれば難しい試験がさらに難しくなる。

特に俺は筆記試験でどうにか進級してきたので、試験勉強に集中しなかった。

いつもなら試験の直前には修行は控え、試験に集中するのだが、今回はどういうわけか師匠が今日絶対に来るよう念を押していた。

「絶対に来いだなんて、師匠どうしたんだろう。」

いつもと違い真剣な表情で「いいか。絶対にくるのじゃぞ!」と念を押していた師匠の様子に少し不安になる。

師匠の小屋に到着すると、彼女は普通に小屋でお茶を飲んでいた。

「お〜お〜、ノゾム来たか。」

そのあまりにいつもと変わらない様子に脱力してしまう。

「師匠、どうしたんです今日は。俺、そろそろ試験が近いので追い

込みかけないとさすがに不味いんですけど。」

はつきり言つて切実な問題である。今は多少だが身体能力が上がり、以前は修練ならともかく戦いでは使えない技が使えるようになったことで、戦いの選択肢が広がったがそれでも厳しいのは変わらない。

「まあまあそういうな。今日ぐらいわしに付き合え。こんな美女のお誘い、受けねば男でないぞ。」

……………何言ってるんだろうかこの人は……………

「……………師匠。昼間から酒でも飲んでるんですか？」

「そんなわけなからう！お前はもつと師を敬わかんか。」

「敬ってますよ。師匠が悪質な詐欺師まがいなこと言わなければ。」

「誰が詐欺師か！それにわしが何時そんなこと言った！！！」

師匠、詐欺師はみんなそう言いますよ。

「美女ってあたりウソでしょう！よく言つて元・美女です！！！」

「……………ソコニナオレ」

師匠が鬼の形相で刀に手を掛ける。彼女の体から目で見えるほどの殺気が立ち上る。小屋の周りの野鳥たちが一斉に飛び立ち、少しでも場から離れようと羽ばたく。

……………メチャクチャ可愛い。師匠の髪は逆立ち、まさしくオーガ……彼女の故郷を考えれば夜叉というべきか。でも俺だって負けられない。いつもちょっとした冗談でボコボコにされ、ツッコミにすら高ランクに相当する技を放ってくるのだ。

彼女は殺す殺さないの力加減はできても、その場に合わせた力加減が全くできない（と思われる）。

いい加減この等価交換の法則にケンカを売っている人に力加減というものを教えなくてはならない。

……………でないといつまでも日常生活で日常的に気絶なんてアホな状態から抜け出せない！！！！

「お、おれだっていつまでもこんな理不尽（キンツ！）ナニカイツタカエ」イエナニモイツテイマセン、イツモシショウキヨウモオキレイデスネー。」

……………できませんでした。

……………師匠、真剣を殺気と一緒に首筋に当てるのは勘弁してください……………

それから師匠は特に取り留めのないことを話しはじめた。故郷の国の事。家族の事。この大陸に来てからの事。

彼女は俺の話も聞きたがったので、これまでのことを話した。故郷の村の事。両親の事。リサの事。学園での出来事、師匠と出会った時の事、その後の地獄のような修行の事。

師匠も既に知っていることもあったけど、彼女はそれでも聞きたがった。

一度話したことも、彼女は何度もうなずき、嬉しそうに聞いていた……
まるでもう2度と忘れないように自分自身に刻み込むように。

話をしていると、景色は紅く色づいていた。いつの間にか夕方になっていたらしい。

師匠はその景色を一瞥して呟いた。

「じゃあ、最後の修練を始めるかのう。」

ノゾム side out

シノ side

ノゾムとだた言葉を交わす。内容はごくありふれたもの。故郷はどこだ。家族はどつだ。好きなものは。

そんなごく普通の会話。今までそんな会話はあまり交わさなかった。教えるのは刀で、語るのも刀。

刀、刀、刀。

そんなことしか教えてこなかったし、それが一番わいらしかった。

だから今、彼が話すごく普通の話がすごく新鮮で、わしの話を聞いて彼がコロコロ表情を変えることが、すごく嬉しい。

こんな風に人と言葉を交わすことなど、もうないと思っていた。

……………いや、意図的に避けていたのだろう。ノゾムが“恋人に振られた”という事実から無意識に逃げていたように、わしも“家族に裏切られた”という事実から逃げ、人を避け、立ち止まっていたのだ。

……………つくづく愚か者だ。

これでは弟子の事をとやかく言う資格などないのう……………

そんな不出来の師を此奴は慕ってくれた。口では何だかんだ言うが、私を信用し、信頼してくれているのはとてもよく感じ取れた。

もし、わしが生まれるのがもう数十年遅かったなら……………きつ

とわしはおぬしと共に生きていきたいと願ったじゃろう。

しかしわしらの間にある絆は恋人ではなく師弟の絆。それが少し残念じゃが、それでも最後におぬしの心に残せるものがある。

わしはそれでええ。それで十分じゃ。おぬしの隣は……
……おぬしと共に歩めるものに譲ろう。

「じゃあ。最後の修練を始めるかの
シノside out

ノゾムside

師匠はまるで散歩に行くかのようにその言葉を言った。

「あ、あの師匠。最後って……」

「言った通りじゃ。これが、わしのつけてやれる最後の修練じゃよ。」

師匠の様子は変わらない。いつもの飄々とした師匠だ。そんな雰
囲気で次に彼女が言った言葉は……

「だ、だから！最後まで！最後まで！最後の修練は………わしと本気で殺し合うことじゃ。」……………え。」

俺は師匠が何を言っているのか理解できなかった。

殺し合う？俺が？師匠と？

「な、なにをいってるんですか！どういことですか！！」

師匠は庭に立つと鞘に収めた刀を構える。彼女はすでに戦いの準備を終えていた。

「師匠！！答えてください」「何も言う気はない。それともおぬし、自分を本気で殺そうとする者に一々理由を訪ねる意味はあるのか？」
師匠！！！！！！」

師匠の目の色が変わり、彼女の身体からは重い覇気を感じ取れる。明らかに本気の師匠だ。

俺はそれでも師匠に問いかける。

「当たり前です！最後まで！最後まで！どういことですか！！それに殺し合えって……………何考えてるんですか！！！！」

「……………」

彼女は何も言わない。代わりにその行動で示してきた。

師匠の身体が一瞬ぶれたかと思うと、猛烈な殺気が俺に叩きつけられる。

次の瞬間には彼女は既に俺の目の前に迫っていた。抜き打ちの構えから鞘に納められていた刀が俺の首めがけて抜刀される。

俺はそのさつきから逃げるように地面を転がる。師匠の刀は俺の直ぐ上を薙ぐが、そのまま彼女は回し蹴りを放つ。

俺は咄嗟に掲げた右腕でその蹴りを受けるが、気で強化された蹴りはあまりに重く、そのまま吹き飛ばされて木に叩きつけられた。

「クハツツウ。」

痛みに顔を顰めるが、修練で身に染みついた動きですぐに起き上がり、体勢を立て直す。本能的に刀を抜刀、次の攻撃に備える。

「師匠！ いったい何がしたいんですか！」

師匠は何も言わず、刀をこちらに向けている。

その眼は“何も語る気はない”と宣言している。

……………師匠はいつもそうだ。他の修練のときもこちらに質問な

ど許さず、一方的に宣言して何か言えば倍の修練をやらせるなど理不尽極まりないことを言ってきた。どうやら闘わないと何も教えてくれないらしい。

でも今回の師匠は明らかにおかしい。

今までの修練でも、模擬戦でも彼女は“死にかねない”事はやつても“殺そう”とはしなかった。

でも今の彼女からは濃密な殺気が俺に突き刺さってくるし、先ほど抜き打ちも狙いは俺の首。明らかに俺を殺しに来ている。

師匠の姿が再びぶれる。そして側面から放たれる殺気。

俺は咄嗟に気術で身体強化をかけて刀を掲げる。掲げた刀は奇跡的に師匠の斬撃を防ぐが、彼女はそのまま連撃を放つ。

袈裟切り、左薙ぎ、右切り上げ、左切り上げ、流れるような無駄のない動きと、精密極まりない斬撃の嵐が撃ち込まれる。

俺はその斬撃を僅かに下がりながら迎撃する。膝、腰、腕、すべてを無駄なく連動させて、師匠の刀を受け流す。

それでもやはり圧倒される。同じ流派の刀術であるが、技量、身体能力、経験、どれも師匠が上だ！

たまらず瞬脚で離脱するが、師匠はすぐさま追いつき、追撃してくる。

互いに高速移動しながらぶつかり合う。

黄昏は去り、周囲を闇が包むなか、満月に照らされた刀の軌跡だけが二人の存在を映していた。

2人の動きは直線的な瞬脚とは違い、互いに曲線を描きながら互いの周囲を纏わりつくように移動している。

気術“瞬脚 - 曲舞 - ”

気術“瞬脚”の発展系。膝の動きとそれに伴う重心移動、さらに体幹の動きと肩の動きを全て連動させて、本来直線にか動けない瞬脚に複雑な曲線移動を可能にした技。

言うのは簡単だが、実際は瞬脚の勢いを完全に御しきれただけの強靱な足腰と、全身の動きを無駄なく連動させる繊細さを要求される。

強靱な足腰がなければ瞬脚の勢いに体勢を崩して地面にたたきつけられるし、全身の動きが連動していなければバランスを崩し、これもまた地面にたたきつけられる。

強靱さと繊細さが要求される、極めて難易度の高い高等技術なのだ。

瞬脚 - 曲舞 - での打ち合いはやはり師匠が上だ。瞬脚 - 曲舞 - は瞬脚の発展系だがその移動速度はやはり使用する者の能力がかかわってくる。

師匠の瞬脚 - 曲舞 - は明らかに俺のそれを上回っていた。俺は徐々に後手に回らざる負えなくなり、遂に移動先に先回りされた師匠

に足を止められてしまう。

「クソ!!」

再び師匠と足を止めて打ち合いになるが状況は先ほどと変わらず
圧倒されていた。

しかも師匠の攻撃は刀だけではない。

「くっ!!」

斬撃を捌いた後に師匠が片手で鞘を振り抜いてくる。気術で強化
された鞘は人の骨など容易くへし折ってしまう。

いつの間にか刀と鞘の二刀流になった師匠の攻撃は、威力は落ち
るものの先ほどよりさらに濃密な攻撃を可能とし、その顎で俺を喰
らい尽くくさんとする。

彼女の戦い方はこのように刀術だけでなく鞘、さらに体術を織り
交ぜた総合戦闘技術であり、これが本来の俺たちの戦い方。

俺も戦い方を鞘による二刀流に変更。さらに激しくなった師匠の
攻撃を裁く。

しかし元々の能力、技量差により押される一方となり、そのうち迎
撃が間に合わず、鞘による打撃が俺を捉えた

「ゲアツツ!!」

ズドンツツと言う鈍い音とともに鞘を持つ方の二の腕に師匠の鞘が
当たる。幸い骨は折れず、鞘は保持できている。

一瞬動きの鈍った俺の隙を逃さず、師匠はもう一方の刀を一閃す

る。

刀での迎撃は間に合わず、やむを得ず体を逸らすことでどうにか躲すが、再び師匠の蹴りがとんできた。

俺は避け切れないと判断し、後ろに跳び、彼女の蹴りの威力を殺す。

後ろに跳んだことで大きく飛ばされ、間合いが開く。

まるで以前の打ち合いの焼き直しの様だが実際は違う。俺は飛ばされながら痛む腕に鞭を打ち、刀を鞘に納める。

地面にたたきつけられる瞬間、受け身を取り、後方に跳ねるようにして起き上がりながら刀に気を送り、極圧縮。

生半可な技では師匠には通じない。気量の都合上、使える回数は限られるが自分の最も信頼できる技に望みをかける！

気術“幻無”

極圧縮された気の刃が高速で飛翔。瞬きするまもなく師匠に着弾する……そのはずだったが、現実はその上を行った。

「なっ！！」

突然俺と師匠のちょうど中間地点で炸裂音がした。極圧縮された気が拡散し、周囲に散っていく。

師匠を見ると同じように抜刀術の体勢で刀を振り抜いていた。信じられない事態に呆然となる。そんな隙を師匠が逃すハスはなかった。

師匠が瞬脚でこちらに呐喊してくる。あわてて迎撃しようとするが明らかに間に合わない。咄嗟に鞘を刀の軌跡に入れるが、彼女はその鞘を無視して刀を振り抜いた。

気術“幻無 回帰”

先ほどの抜き打ちとは逆の軌道を描き、俺の身体を袈裟懸けに切り裂いた。

第1章終幕・前編（後書き）

第1章の終幕・前編いかかでしたか。
尺の都合で後編はまた後日投稿します。

第1章終幕・後編（前書き）

第1章終幕後篇です。

とりあえず第1章はこの話で終わりです。

では、どうぞ！

第1章終幕・後編

ノゾムside

切り裂かれた傷口から血が噴き出す。

「あつ。ぐう！」

あまりの痛みと血が抜けていく喪失感で足から力が抜け、地面に膝をつく。

彼女がやったことは至極単純。俺が放った幻無を同じ幻無で相殺したのだ。

だが……………そんなことが可能なのか？

幻無はその特性上、視認することは極めて困難だ。

同じ幻無で迎撃するには俺の放った幻無と同じ軌道を寸分の狂いもなく正確に放たなくてはならない。

そんな針に糸を通すよりも遙かに困難なことを師匠は難なくやってのけたのだ。

俺師匠の実力差は明らかだ。技量、能力、経験どれも彼女が上、俺が勝てる要素はひとつもない。

“勝てない” そんな思考にとらわれた俺に師匠の言葉が響いた。

「ノゾム、能力抑圧を解放しろ。」

(えっ)

「わかつとるはずだ。わしに勝つには能力抑圧を解放するしかない。」

（そうだ、あれを使えば師匠に勝てるかもしれない）

確かに師匠に勝つにはそれしかない。それが自分の持つ唯一の可能性だ・・・だけど。

いまだあの夢がよぎる。夢の湖の中にいるティアマツトとその時に感じた一抹の不安。夢の中で見た奴の眼には、確かに意思があり、生きていた。

精霊種としての特性なのだろう。おそらく肉体は死んでも、魂はそのままなのだ。

そして能力抑圧は偶然にも奴の力を抑え、その魂までも押さえ込んでいるのではないか？

（このまま能力抑圧を解放したら奴まで解放される！）

「.....」

..... 決断できない。自分には出来ない。自分を殺す気がかかってくる師匠とそれに勝つにはティアマツトの解放が必要。そうしたらどちらにしても自分は死ぬ！

「まだ迷っておるのか。」

師匠が再び切りかかってくる。咄嗟に防ぐが先ほど切られた傷のせいで明らかに動きは鈍い。

斬撃だけはどうにか防ぐが師匠は容赦なく鞘による打撃と蹴撃を打ち込む。

「イツ、クツ、グアアア！」

痛みと失血で意識は朦朧となる。

“ここで死ぬのか”

相手が師匠だからだろうか、今まで戦いの時に溢れていた強烈な“生きたい”という思いは湧き上がらず、“師匠ならいいか”とあきらめの思考が俺を支配する。

ふと師匠を見ると彼女の顔は苦悶に歪んでいた。

“どうしてそんな顔をしているんだろう”

そんな疑問が頭に思い浮かんだ時、今にも泣きそうな顔で彼女は告げた。

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃないよ。」

ノゾム side out

シノ side

すまないと思いつつもノゾムに攻撃を打ちこむ。

いきなりこんな事をしてすまない。こんなに痛めつけてすまない。

でもこれで最後だから、最後のわがままだから。

そんな思いでふと彼を見る。

彼の眼には、これまでの危機に陥った時の彼のように“生きる”
という強烈な意思はなく。これから訪れる死を受け入れた眼をして
いた。

違う！ そうじゃない！ 私は彼に伝えたい事があるから、受け
入れてほしい事があるから・・・そんな目をしてほしいのではな
い！！

伝わらない自分の思いに泣きそうになる。

彼に伝えないと……………伝えたい事、受け入れてほしい事がある
と。

そのために……………。

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃよ。」

シノside out

ノゾムside

「ノゾム、わしはもうすぐ死ぬ。長くないんじゃよ。」

その言葉に思考が止まる。死ぬ？ 師匠が？ どうして？

「睡死病じゃよ。徐々に気が体から抜けていき、最後には気を使い
果たして死ぬ病じゃ。」

「なっ！ それならすぐに治療を「治療法は特定され取らん。それ

にわしの気は持って一晩じゃ。「そんな……………」。

「もう少し体の気を制御すればもう少し持ったのだがのう。」

「じゃあ！どうしてそうしないんですか！！少しでも時間があれば何かできるかもしれないで「わしはのう……………」。「師匠！！！！」

こちらの問いかけを無視して自分の話を進める師匠。次に発せられた言葉は俺の問いかけを完全に封じた。

「家族に裏切られてここに来たのじゃ……………」。

「えつ……………」。

「実の姉に嵌められ、両親から見捨てられ、周りから唾を吐きかけられて、この大陸に逃げてきたのじゃ。」

それから師匠が語ったことは、今まで聞いたことのなかった師匠の身の上話。師匠の家族の話は聞いたことはあったけど、そんな事があつたなんて師匠は全然話さなかつたし、全く感じさせなかつた。師匠が家族の事を話したときは嬉しそうで、とても家族が大好きだったことが雰囲気であつたから。

「わしとおぬし、驚くほど似ておる。互いに裏切られ、周りから嘲笑されて逃げ出した。」

そのとおりだ。俺はリサに振られたことをから鍛錬に逃げ、彼女は実際に国から逃げ出した。

「わしはもう死んでも構わなかった。じゃからこそ、こんなところに隠居したんじゃ。」

師匠は自分の思いの丈をぶちまける。

「わしには何もなくなった。じゃが、おぬしと出会った。初めはわし自身の分身を見ているようで苛立ったが、おぬしはわしと違い、生きることをあきらめなかった。それにわしは自分にはない何かを感じのじゃ。」

「ノゾム、これがわしの最後のわがままじゃ………………。逃げ続けたわしが最後に残したいことが、おぬしだからこそ伝えたい事があるから」

彼女はそう言って泣きそうな顔で俺に懇願した。

「どうか、わたくしの最後の願い。受け入れてはもらえませんか」

……………師匠の言葉で目が覚める。

彼女は自分の最後を目の前にして自分の道をとっくに決めていた。
たいた。

……………ここで師匠に言葉を掛けて、生きるよう説得することは簡単だ。でもそれは彼女の意思を捻じ曲げてしまうことなんじゃないか？ 彼女は自分の最後の時間を削ってでも伝えたことがあると
いったのだから。

……………認めよう、俺はずっと逃げてきた。あの学園で
自分を取り巻くものの全てから。

逃げて、逃げて、“逃げた”という事実からも逃げて……………

でも……………

師匠の顔を見るとその顔は涙があふれそうで、まるで迷子のようだった。

ここで師匠の願いから逃げたら二度と彼女とは向き合えない。何より師匠にあんな顔させたくない！！！！

自らを縛る鎖に手をかける。能力抑圧を解除すれば自分はその漆黒の龍に食われるかもしれない。

でも今ここで逃げたら一生後悔する！！

俺は鎖を引き千切り、初めて本当の自分を解放した。

次の瞬間。俺の視界は暗転した。

俺は夢で見た湖の湖畔にいた。目の前に黒い巨躯が佇んでいる。

“滅龍王ティアマツト”

奴は俺を見ると、前足を振り上げて叩き潰しに来た。

咄嗟に後ろに跳び、着地と同時に地面に伏せて衝撃波をやり過ごす。しかし次の瞬間、横薙ぎに薙ぎ払われた奴の尾が俺の目の前に迫っていた。

明らかに前回の戦いより速い!!!

躲す間もなく尾が直撃する。

「げはあっ!!!」

空中に投げ飛ばされて全身の骨が折れ、激痛で意識が飛ぶ。碌に受け身も取れずに地面に叩きつけられる衝撃で意識が戻るが、脳が痛みの処理能力を超えたのか何も感じ取れない。

全身があまりに傷つき、まだ体があるのかさえ分からないが、全身の筋肉を酷使してどうにか立ち上がる。奴は口をあけ、ブレスをこちらに放とうとしている。以前とは違い始めからこちらを殺しに来ている！

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

雄叫びをあげてティアマットに向かって突っ込む！

奴と自分の能力差を考えれば時間はかけられない。何より・・・

「お前なんかお呼びじゃないんだよ！ 俺の相手はお前じゃない！
！！！！！！」

今の俺にはお前なんか眼中にない！！！！！！！！！！

ブレスが放たれる。眼の前に迫る巨炎を、身を捻って躲そうとするが、ぼろぼろの身体では躲しきれはすもなく、炎が触れた右半身が消滅する。

それでもかまわず左足で跳躍。後ろで響く爆音と衝撃波を背に受けながらティアマットに突っ込むが、そこには開かれた奴の口があった。

俺が飛び込むと即座に口が閉じられ、奴の牙が俺を引き裂く。

下半身が断ち切られ、頭を半分抉り取られる。全身を貫かれて、もはや俺の身体は血みどろの肉塊に成り果てた。

だが、精神世界ゆえか、もはや死んでいるはずの怪我でも俺の意識はあった。それが螻蛄のように儚くても。

全身をグチャグチャにされながらそれでも前を見ると、血にまみれた視界の中に光る。

その光は5色に彩られ、小さいながら絶大な力を感じとれた。おそらくこれが奴の力。

その光に手を伸ばし触れようとする。既に体の下半身は喪失し、内臓が垂れ流しになっている。

右腕は喪失し、左腕も牙で抉られ、半ば千切れている。意識はほぼ無く、口からは呻き声しか出ない。

それでも手を伸ばす。指がちぎれた手が光に触れると光があふれ、俺の視界は再び暗転した。

気が付くと元の場所に戻っていた。

「グウ!!!」

全身から力があふれる。あまりに大きいその力は俺の精神をガリガリ削っていく。

時間はない。長引けば俺がこの力に食われるか、最悪制御できずに死ぬ！

師匠を見ると彼女は嬉しそうにこちらを見ている。

刀を構える。師匠に切られた傷からは血がいまだ流れ出るが、構いやしない。

「行きます！！！！」

「こい！！馬鹿弟子！！！！」

これまで以上の気を放出し、刀を構える師匠。

師匠のすべてを受け止める。その意思を固め、俺は再び師匠と対峙した。

ノゾム side out

2人は再び瞬脚・曲舞・を発動し、ぶつかり合う。複雑な曲線を闇夜に描き、月の光に剣閃をきらめかせる。

その速さはもはや超一流の戦士たちですら目では追えない領域に

到達していた。

互いに絡み付きあうように打ち合うその姿は、先ほどと変わらな
いが、その優劣は明らかに違っていた。

ノゾムの放つ一撃はシノの腕を痺れさせ、シノの攻撃はノゾムに
防がれ、逆に弾き飛ばされそうになる。

技量こそシノに分があるものの、抑圧を解放したことで、自らを
縛るものがなくなったノゾムの身体能力は明らかに彼女を上回って
いた。

徐々に劣勢に立たされていくシノ。その口から思わず愚痴が出る。

「クツ！ もう少しおなごに優しくせんか！ この馬鹿弟子！！」

「何言ってるんですか！ 少なくとも自分の前に優しくしなければ
いけないか弱い女の子はいません！！ いい加減自分の歳考えてく
ださい！！！！」

「何言つとるか！ おなごは何歳になってもおなごじゃ！！ 女心
のわからぬ奴め、そんなだから恋人に見捨てられるのじゃ、このへ
タレ！！！！」

お互い碌でもないことを口走りながら戦う。極めて高度な技の応酬と極めてくだらない舌戦である。

瞬脚・曲舞・での高速戦は身体能力で上回るノゾムに分があり、このままではまずいと思ったのか、シノが手を変えてくる。

「ちいい！ このままでは坊主を肅清できん！！」

「ちよ！ 今肅清って言った！！ 殺す気がこのばあさん！！！！」

「当たり前じゃ！！ 初めにそう言っただろうが！！ 乙女の心の傷を抉った罪、地獄で反省するがよいわ！」

シノが両手を腰だめにして気を圧縮する。彼女が両手を突き出すと圧縮した気が解放された。

気術 “震砲”

圧縮した気を一方向に開放して、相手を吹き飛ばす気術である。

震砲で吹き飛ばされたノゾムにシノは追撃をかける。

「くたばれ！ 乙女の敵！！！！」

乙女とは程遠い発言でシノは準備していた技を放つ。

気術“幻無”。

極圧縮された気が放たれるが、既にノゾムは迎撃の体勢を整えていた。

「それはこっちのセリフだ詐欺師！！ 年齢詐称と暴力は犯罪です！！！！」

放たれるのは同じ気術“幻無”。2つの技は互いの中間で激突し、互いに相殺し合う。

ノゾムが先ほどシノが行ったように、幻無を幻無で相殺を可能としたのは極限の集中力。

かつてティアマットと戦い、死に瀕したとき、彼は周りの時間が遅く見えるほどの集中力を発揮した。この極限の集中力のおかげでシノという超一流の剣士の剣閃を完全に見切れたのだ。

周囲に舞い散った気の残滓を2人は突っ切り、次の技を繋ぐ。

「師匠の偉大さを思い知れ！！！！」

「下剋上だ！！ 天然犯罪者！！！！」

気術 “ 幻無 - 回帰 - ”

極圧縮された気を帯びた返しの刃が激突し、周囲に再び気と火花の花を咲かせる。

2人はさらに次の技へ繋ぐ。

返しの刃の勢いを利用し体を回転させる。刀を納刀しつつ鞘尻を相手に向け、納刀と同時に叩きつける。

気術 “ 破振打ち ”

相手の体内に気と衝撃波を同時に打ち込み、相手の体内を破壊する内部破壊技。まともに当てれば内臓をグチャグチャにされてしまっただろう。

ドウンという腹に響く音とともに互いの技が打ち消される。

技がぶつかり合った時の衝撃で互いの間合いがわずかに離れるが、そのまま次の技へと繋ぐ。

2人は身を翻しながら、刀を持っていない方の手に気を送り込む。

その量は今までの気術とは比較にならないほど、膨大な気が込められていた。

多量の気を送り込んだ拳を互いに地面に叩きつける。すると2人の間の中央の地面が爆発し、光の柱が噴出した。

気術“滅光衝”

地面に打ち込んだ気を敵の足元で解放し、相手を空中に打ち上げ、気による光の奔流で滅する気術。

彼らの持つ技の中では最大の効果範囲と高い殲滅力を持っている。

2人の滅光衝は地面の中を突き進みそのまま激突。そのまま地上へ押し出されたのだ。

「まだまだじゃ!!!」

「あたりまえだ!!!」

さらに技を繋げる2人。互いに納刀状態のまま相手に突っ込み、四肢を使い体術戦を繰り広げる。

拳、脚、肘、身体のあらゆる部位を使い、まるで舞うように打撃を打ち込む。その型は全くの瓜二つ。

やがて2人の周囲に変化が訪れる。光の粒が現れ、それが螺旋を描きながら2人に集まり始めたのだ。

実は彼らはすでにある技を発動していた。

儀式体術 “輪廻回天”

儀式魔法と呼ばれる魔法がある。その名の通り、儀式を行い外界の魔素に干渉することで発動する魔法だ。

ノルン・アルテイナが魔法の授業で言ったように儀式魔法の起源は、神々や精霊に祈りや供物を奉納する神事である。

もともと“舞”はその神事の際に同じように奉納されていたものだ。

これを利用し、“舞”と“武”を融合して作られたのが儀式体術なのだ。

ある型で相手を攻撃しながらそれを“舞”として奉納し、儀式を成立させ、周囲の魔素に干渉。儀式魔法を展開する。

この“輪廻回天”は周囲の魔素を吸収し、身体強化を重ね掛けしていくもので。舞えば舞うほど威力が跳ね上がっていくのだ。

ただ儀式体術は決まった型にどうしても縛られるため、型を見切られると途端に劣勢になってしまう可能性がある。

身体強化を重ね掛けされた2人の激突は、やがて衝撃波で周囲の木々を震えさせるまでになる。

2人の舞いは途切れることなく続き、周囲にはその舞いを称えるように魔素の光が集っていった。

シノside

急激に気が抜けていき、目の前が暗くなっていく。

桁外れに強くなった弟子に対抗するにはすべての気と魔力を使い、すべての技を駆使して限界を振り切らなければならなかった。

それでもどうにか互角が手一杯。

限界を超えた気の喪失は睡死病を一気に進行させた。気の回復量と喪失量は逆転し、もう回復することはない。

それは自分の死が確定したこと。

(まあ……………いいかの)

そんな事実を他人事のように考えながら自分の最後の愛弟子をみる。

……………強くなった。本当にこの子は強くなった。楔を解き放つた時のこの子に勝てるのはもはや大陸でも数人だろう。

その者達ですら場合によっては打倒してしまうかもしれない。

この子は今自分の意思で自分の内に秘めた巨大な力と向き合った。

こんな小さな子など容易く押しつぶしてしまうほどの強大な力。
普通の人間なら恐怖のあまり発狂するだろう。もしくはその力に呑まれるか。

こんな婆の最後の頼みのためにその力と向き合い、戦ってくれた。

これが最後になるけれど……………ありがとう。
ノゾム。

シノside out

ノゾムside

ともすれば破裂してしまいそんな力に歯を喰いしぼって耐える。
もう長くは解放してられない。理性は削られ、強すぎる力に身体はガタガタだ。

能力はこちらが圧倒しているのに攻めきれない。繰り返し打ち込む攻撃は均衡し、ただ時間だけが流れる。

周囲の魔素の動きはさらに加速し、舞いは終局に近づく。

近づく終わりを感じて、師匠と出会ってからの今までのことが頭をよぎる。

森での偶然の出会い。

地獄のような鍛錬。

自分が目を逸らしていたことを突き付けてくれたこと

「おかえり」と言ってくれたこと。

師匠のいるところは間違いなく“帰れる場所”だった。

それはもうすぐ無くなる。

とても悲しくて……胸の内は悲しみで張り裂けそうだが……
……師匠の最後の頼みなのだ！

無様な姿は見せられない。

もうすぐ最後になってしまいましたが……………あ
りがとうございました。 師匠。

ノゾム side out

舞はついに終わりを迎えた。 限界まで強化された2人の蹴撃が激突する。

衝撃波で周囲の地面は捲れ上がり、吹き飛ばされる。 木々は大きくしなり、ギシギシと悲鳴を上げていた。

激突した時の衝撃を再利用して2人は独楽の様に身体を回転させる。

それと同時に納刀したままの鞘に全力で気を送り込み、限界まで圧縮する。

気術“ 幻無 - 閃 - ”

ただ己の最速の抜刀術を放つだけの技。 ただ己の想いを込めただけの技。

2人の思いを乗せた刀が交差した。

森に静寂が戻った。

ノゾムの刀は柄しか残されていない。

放たれた刀は2人の中心で激突し、その瞬間。ノゾムの刀が砕け散っていた。

直後、シノはその場に崩れ落ちる。

「師匠!!!」

ノゾムはシノに駆け寄り彼女を抱きあげるが、彼女の顔は青白く、生気が全くなかった。

「……………ノゾム。強くなったねえ……………もう刀で教えられることはなさそうだ……………」

「師匠……………」

医者としての知識のないノゾムにも分かった。彼女はもうここで死ぬ。

「嬉しかったよ。こんな婆の最後の頼みを受け入れてくれて。……
……わしの想いを汲んでくれて。」

目頭が熱くなる。もう避けようのない別れを前にしてノゾムは涙を抑えきれなくなっていた。

「ノゾムこれだけは覚えといておくれ。」

「逃げてもええ。立ち止まってもええ。でも“逃げたこと、立ち止まっている”という事実から目を逸らさないでおくれ。もしそれを忘れればわしの様に進めなくなってしまう。」

もはや目も見ないのだろう、彼女の視線は空中を泳ぎ、身体はどんどん冷たくなっていく。

「たとえ逃げて、たとえ立ち止まっても、それを忘れなければ、どんな形にしろ、いつか前へ進めるはずじゃから……。」

「……………ッ、はい。師匠……………」

彼女はノゾムの言葉を聞くと安心したように笑みをこぼした。

「よかった……………これで満足じゃ。」

彼女は月を見上げる。静かな、見守ってくれるようなやさしい月だった。

「ノゾム。……………疲れたから少し……………寝るわい。……………いつかまたの。」

「……………はい師匠。……………おやすみなさい。」

彼女は満足し、ゆっくりと目を閉じ、深い、深い眠りについた。

もう覚めることのない深い眠りへ。

後に残ったのは、声を押し殺してすすり泣く誰かの声だけだった。

あれから1週間。ノゾムは3学年に進級していた。

進級試験は相も変わらずギリギリだったが……………。

ノゾムは今の自分を思う。

今まだ自分は立ち止まっている。リサのこと、学園のこと。俺自身のこと。

また逃げてしまいかもしれない。立ち止まったままかもしれない。

でも、その事実から目をそむけるのはもう終わりだと。

師の教えと新たな決意の萌芽を胸に、彼はソルミナティ学園の門へ歩みだした。

第1章終幕・後編（後書き）

いかかでしたか第1章のテーマは「逃避の自覚」です。

逃げ続けていたノゾムがそのことに気づくまでが、この章のメインテーマでした。

とりあえず第2章の構成を考えていたのですが、まだまだ足りない要素があるのでもう少し時間がかかると思います。

こんな駄文に付き合っていたいただき、ありがとうございました！

第2章第1節（前書き）

お待たせしました。第2章開始です。

第2章第1節

朝日がアルカザムの街並みを照らしている。

朝日を浴びてさええずる鳥達の声を聴きながら、街の人々は各々の一日を始めている。

街の道には人々が溢れ、それぞれの生活の糧を得るために、仕事に励んでいた。

そんな人々が行きかう道を一人の少年が歩いていた。

彼の名はノゾム・バウンティス。

このアルカザムの中心、ソルミナティ学園の3学年に所属する学生。

彼が師匠との対決を終えてから1カ月。彼は3学年にどうにか進級できていた。

「しかし……………よく進級できたな俺。」

シノとの対決が学年末試験2日前になり、その時に負った傷が原因で最後の追い込みができず、試験は予想以上に困難なものとなつてしまった。

上がった身体能力も活かせず、実技試験はほぼ全滅。筆記試験も、シノとの事を思い出してしまいうまくいかず、結果的に追試を3科目も受ける羽目になった。

「そのせいで結局最下位……………まあ、どうにか合格したんだから、まだまし……………か。」

ちなみに追試の回数は間違いなく学園史上最多数である。

そのせいでクラスは再び最下位の10階級。進学時の成績もぶつちぎりの最下位、相変わらずクラスでは落ちこぼれ扱いである。

(でも、今はまだこのままの方がいいかも……………あの龍殺しの力……………大きすぎるし)

そう、彼はシノとの戦い以来、人前で龍殺しの力の解放。正確には能力抑圧の解放を行っていなかった。

彼は実際3学年になってから、能力抑圧の解放をシノの小屋で数回行っていたが、ろくに制御できなかった。

解放された力で身体能力は劇的に上昇するものの、強すぎる力はあらゆる技を強化しすぎてしまい、元々殺傷能力の強い技はもとより、ただ殴ることさえ、とても学生生活の中で簡単に使えるものではなくなっていた。

「殴っただけで岩が粉微塵だもんな、とても使えないよ。」

(それに……………アイツの事もあるし)

彼が思いだすのは自分の中にいる滅龍王ティアマツト。抑圧を解放するたびに彼の体の中で暴れまわり、肉体を食い破ろうとしていた。

一度精神世界で戦い、奴の力を一部とはいえ取り込むことに成功していたため、解放したらすぐさま食われることはないが、それでも長くて2分間が、能力抑圧を解放できる制限時間だった。

その2分間でさえ、ノゾムが解放後もどうにか力を抑え込んだ時間である。制御も何もせず解放したら、十数秒で彼の精神は力に

潰されるか、肉体が崩壊するだろう。

「とにかく、これからどうするか、考えていかなきゃ……………」。

学園の事、龍殺しの事、リサの事。

リサとは進級後、何度か顔を合わせたけど、彼女は相変わらず彼を無視するか、敵意をぶつけてくるかしかなかった。

そんな彼女にノゾムも何も言えず、彼女の前では立ち尽くすしかできなかった。

(……………まだ、逃げてるな……………俺。)

いまだ前に踏み出せずにいるノゾム。しかし、いまだ逃げている彼だが、“自分が逃げているという事実”はしっかりと自覚できるようになっていた。

シノが命を賭して彼に伝えたことは彼の中で確かに小さな芽を出し、根を張り始めていた。

3学年10階級。このクラスにおいて、ノゾム・バウンティスは相変わらずの扱いを受けていた。

「なんだアイツ、まだいたのかよ。」「アイツのせいで俺達までアレと同レベル扱いだもんな、いい加減にしてくれよ。」「まったく

だ、アイツ3回も追試受けてんだぜ、いい加減自分の器、考えろってんだ。」

教室に入ると相変わらずノゾムに対して罵声が浴びせられる。彼はその声を聴きながら自分の席に座り、教科書を取り出して予習を始める。

数分後、

「なあマルス、今日あの店行こうぜ、あの娘がいるんだ。いいだろ。」

「おまえ、あの店の娘、狙っていたのか？ お前じゃ無理だよ。やめとけ。」

「……………お前ら飽きねえな……………」

入ってきたのはマルスとその取り巻き達。

どうやら放課後に立ち寄る場所について話していたようだが、マルスはどうもその話に乗る気が無いようだ。

「なあマルス、最近どうしたんだ？ 付き合い悪いぜ。」

「そうだけ、なんか最近おとなしくなっちゃまってよ。」

「……………うるせえ、何でもねえよ。」

マルスは取り巻きの2人が文句を言うのも聞かず、自分の席に行

く。その途中で彼はノゾムに気付いた。

「むっ……。」

マルスはノゾムを見る。その眼には今までノゾムを馬鹿にし、蔑んでいたときの眼ではなく、何かを確かめ、見極めるような、真剣さがあった。

「みんな〜。朝のホームルームを始めるわよ〜〜〜。」

アンリ先生が来たことで教室の生徒たちが席に着く。朝礼が終わり、授業が始まってマルスはノゾムの事が頭をよぎっていた。

マルス side

アイツがいる。それはあたりまえだ、ここはアイツが所属するクラスなのだから。でも俺は自分の中の疑問を拭えなかった。

どうしてアイツがこの最下位クラスにいる。アイツの今の実力なら少なくとも10階級のクラスではなく、もっと上のクラスにいるはずだ。

学期末の模擬戦でアイツは俺を仕留めることができるまで追い詰めた。

いや、俺はあの時アイツに負けていた。冷静さを奪われ、裏をかかれたのだ。実際の戦場なら俺はあの時アイツに殺されていたはずだ。

いい訳ではないが俺は実技の実力はかなりある。それこそ4学年とも渡り合えるくらいに。

その俺に勝てるアイツがなぜ10階級なんだ？

「そう言えばアイツ、試験前に怪我したらしいな、何でも荷物運んでたら、階段でトチツてこけたらしい。」

「アホだなく。まあ、ウスノ口のあいっらしいが。」

……怪我？ アイツが？ たかがそんなことで？

感じていた疑問が俺の内膨れ上がる。いくら階段から転げ落ちたってアイツならそこまで大きな怪我は負わないだろう。模擬剣とはいえ、気術で強化した俺の剣戟で吹き飛ばされても、アイツは大きな傷は負わなかったし、翌日の授業は普通に受けていた。

そんなアイツが学年末試験なんて最も大事な試験の前に支障が出るほどの怪我を負った？

その瞬間、アイツには何かがあると、俺は確信した。

マルス side out

午前中の授業が終わり、昼休みに入る。生徒たちは思い思いに友人たちとひと時の安らぎを過ごしていた。

ノゾムは購買でパンを購入して食べられる場所を探していた。

ちなみにこの学園は食べ盛りの生徒たちのためにかなり大きな食堂があり、また学生向けの購買もそれ相応に大きい。飢えた野獣のような生徒たちには人気のある品が足りず、常に戦場状態であ

る。

しかも、なまじ実力のある生徒たちなので場合によっては魔法の飛び交う本当の戦場になりかねない。

しかし、人気のない商品は余りやすく、簡単に手に入る。

ノゾムは購買ではいつも売れ残るようなパンを買い、校舎内をトポトポ歩いていった。

彼がふと中庭を見ると、人だかりが見え、その中心には2人の乙女が食事をしていた。

その2人をノゾムは知っていた。あまりにも有名な生徒達だったからだ。

1人はアイリスディーナ・フランシルト。

腰まで届く、長い艶のある黒髪と整いすぎた容姿。その髪に似た、引き込まれるような黒い瞳と凜とした表情。

ノゾムと同じ3学年1階級の生徒であり、“黒髪姫”と呼ばれ、総合成績で学年トップの才媛である。

もう1人はティマ・ライム。

アイリスディーナと同じく3学年1階級の生徒で“四音階の紡ぎ手”と呼ばれる才女である。

彼女は肩口で切りそろえられた茶髪を持ち、容姿はどちらかといくとアイリスディーナとは違い、儂げな印象を与える。

彼女はきわめて膨大な魔力を持ち、その魔力は伝説レベルである

そっだ。

また、本人のアビリティは地水火風4属性に高い適性を彼女に与えたことから“四音階の協奏曲”と呼ばれ、これが彼女の二つ名になっている。

彼女たちは3学年を代表する生徒であり、この学園でも数えるほどしかないAランクに到達した生徒でもある。

ちなみにノゾムのランクは相変わらずD、3年はおろか、2年でも下位のランクである。

「ノゾムく〜くん、見つけたわ〜」。

(げっ、この声は)

彼女たちを見ていたら横から間延びした声で呼ばれた。よく見るとアンリ先生とノルン先生がこちらに近づいてくる。

アンリ先生は子供のように元気いっぱい手に手を振っており、ノルン先生はそんなアンリ先生を見て苦笑していた。

「ノゾム君、お昼ご飯はまだ〜？もしよかったら一緒に食べない〜」。

「すまないな、ノゾム君。アンリがどうしても君と食事をしたいといってね。もしよかったら付き合ってもらえないだろうか。」

アンリ先生とノルン先生は笑顔でこちらを誘ってくる。2人とも見惚れるような笑顔だが、ノルン先生はともかく、アンリ先生には

その笑顔とは正反対の強い覇気が見える。是が非でもノゾムをつれていくとその雰囲気は明言している。

(アンリ先生……………まだあきらめてなかったんですね……………)

アンリの笑顔に冷や汗が出るが、彼女たちにノゾムは逆らえず、連行された。

ノゾムが連れて行かれた場所は保健室、ノルン先生の仕事場だった。

実は、ノゾムは3年になってから、時々アンリ先生に捕まり、この保健室に連れてこられていた。その理由は、

「ねえノゾム君、どうして2年の学期末試験のとき、あんな怪我したの……………」

「ですからアンリ先生。それは前言ったとおり「階段から落ちたっというの……………」?」
「そうです。」

昼食もそこそこに、アンリはノゾムを問い詰め始めた。

そう、彼女はシノとの決闘の時の怪我について、ここ1カ月ずっと問いただしていた。

「嘘はだめだよ。だってその傷、刀傷でしょう。そんな怪我するようならほっとけないもの。」

「……………」

「アンリの言うとおりだ、ノゾム君。さすがにあんなに怪我を繰り返した上、明らかに人に切られた傷があるようならさすがに看過できない。」

「……………」

ノゾムは何も答えない。彼はシノとの間に起こったことや自身の龍殺しの力について、とても話せなかった。

だからと言って言い逃れももうできない。この1カ月間のやり取りで、これ以上どう言い訳したらいいか、彼には分らなかった。

「……………」
「できなかつたらどうするんですか。内容を吐かせて憲兵にでも引き渡しますか?」

うまくいかない苛立ちから口からはつい憎まれ口が出てしまう。

「違うよ〜〜! 単純に心配なの〜〜〜〜!」

「そつだぞ! 私もアンリも単純に君が心配なだけだ!」

(ああ、また逃げてる。こんなこと言うつもりじゃなかったのに……)

「……………すみません……………言い過ぎました。」

「いや、いいんだ。私たちも少し強引過ぎた。」

いやな雰囲気保健室内に満ちる。

「……………ねえ〜、ノゾム君。私たち、そんなに頼りにならない？」

ノルン先生が悲しそうな声で問いかけてきて、その表情にノゾムはつらくなる。

(逃げてばっかだな、俺)

ノゾムは自分の情けなさが嫌になった。どうしても踏み込めない。自分が今まで嘲笑され続けたせいで、彼は少し人間不振になっていたのかもしれない。

(……………こんな顔、させたくない。……………すべては話せないけど……………話せることは話そう)

その顔が少し、決闘の師匠の顔に被った。自分の思いが伝わらず、泣きそうになった彼女の顔が。

「頼りにならないなんて、そんなことはありません。先生達が俺を心配してくれるのも、気に掛けてくれることも分かりますし……そのことは純粹に嬉しいです……俺にはこんな風に一緒に昼飯を食ってくれる人はいませんし。」

ノゾムはゆっくりとではあるが、しっかりと自分の想いを伝え始めた。ノルンにシノの時のような顔をしてほしくなくて。

「あの時、確かに俺には色々ありました。色々ありすぎて、今でも自分の中で整理出来ないものもあります。」

彼は2人の眼をまっすぐ見つめてひとつひとつ言葉を紡ぐ。

「でも、大事なことを教わりました。俺がこれから進むために………そのために、必要なことだったんです。………すいません、今はこれしか言えません。」

ノゾムは深々と頭を下げる。こんな事しか話せない自分の弱さに腹が立つが、それでも精一杯の誠意を尽くすように。

「……………わかったよ。アンリ、彼がこう言うんだ、私たちは彼が話してくれるまで待とうじゃないか。」

「……………でも〜。」

「心配なのはわかるけど、今はまだ駄目だよ。彼自身まだ整理できていないんだから。」

「……………分かったわ…………。」

アンリもどうにか納得してくれた様だが、やはり心配そうにノゾムを見ている。

「すみませんアンリ先生。」

「……………分かってるわ〜。ノゾム君に大変なことがあったことぐらい〜。ごめんなさいね〜。無理矢理問いただしちゃって〜。」

「いえ……………心配してくれるのは嬉しかったです。」

「ノルン先生もありがとうございます。」

「いいんだよ。私たちも少し焦りすぎた。君に何か大変なことがあったのは分かったけど、どうしたらいいか全くわからなかったからね。」

雰囲気是和らぎ、少しだが3人の表情が笑顔になる。

「さて、それでは昼食を片付けてしまおうか。もう少しで始業の鐘が鳴るし、あまりのんびりしてられない。教師が生徒と逢引して遅刻なんてシャレにならないからね。」

「ふふ、そうね〜。早く食べましょうか〜。」

「ええ、早く食べないと噂が立つかもしれないし。俺はばっこいですけど。」

互いに冗談を言い合い、雰囲気が和やかになり、3人は残りの昼食を楽しく食べ始めた。

ところがその時、保健室に駆け込んでくる影があった。

「すみません。ノルン先生怪我人が出たんです。治療していただけますか？」

入ってきたのは 艶のある長い黒髪と、深い漆黒の瞳を持った美少女。

アイリスディーナ・フランシルトが怪我をしたと思われる生徒に肩を貸してそこにいた。

第2章第1節（後書き）

第2章開始です。これからは学園が主体のお話になっていきますので、よろしくお願いします。

第2章登場人物

アイリスディーナ・フランシルト

3学年において総合成績トップの才女で、長い艶のある黒髪と整った容姿、完璧なプロポーションを持つ美少女である。

フランシルト家は、大陸西部の大国であるフォルスイーナ王国に長く仕える重鎮であり、彼女はそのフランシルト家の次期頭首。

かなり高い魔力を持っており、また使い手の少ない闇系統の魔法も使用できる。

使用する武器は細剣であり、体術もかなりのものである。

妹が一人いるらしく、その子の面倒を幼いときから見ていたため、面倒見がよく、また整った顔立ちと凛とした振る舞いから学年を問わず人気がある。

アビリティ

即時展開

思考した魔法を即座に発動できるアビリティ。

精霊魔法並みの速攻が可能だが、発動する魔法の威力は本人のイメージに依存するため。魔法についての深い知識と高い思考能力が必要となる。

ランクA

ソミアアーナ・フランシルト

アイリスディーナの妹で年は10歳。

姉と同じ黒髪のショートカットで元気いっぱいの子。

姉のことを尊敬し、目標としている。

腕には小さな鐘のついた腕飾りをしており、この腕輪を家族の絆の証と思い、大切にしている。

ティマ・ライム

アイリスディーナの親友であり、学園に数えるほどしかいないランクAの生徒。

きわめて膨大な魔力を保有し、その量は人間では間違いない伝説レベル。さらにアビリティ“四音階の協奏曲”で地水火風の4属性に適性を持っている。

ただ、本人の性格はあまり気が強くなく、魔力の制御力がやや低いので、戦闘はあまり得意でない。

茶色の髪を肩口で切りそろえており、少し気弱そうな眼をしているが、顔立ちは良く、人気は高い。

儂そうなイメージが男子生徒たちのツボにくるらしい。

アビリティ

四音階の協奏曲

地水火風の4属性に高い適性を与えるアビリティ。

ランクA

マルス・ディケンス

10階級に所属する剣士。実力は学年でも上位だが素行の悪さで最下階級に所属している。

ノゾムの事を今までよく思っておらず、何かと突っかかっていたが、2学年末の模擬戦において後塵に帰したことから、ノゾムのこととが気になっている。

アビリティ

風精霊の加護

風属性の魔法、気術に高い適性を与えるアビリティ。

ただし、反属性である土属性の術とは相性が悪くなる。

ランクB

エナ・ディケンス

マルスの妹。

かなりしっかりした少女で、昔からマルスの素行に悩まされてきたため、彼相手には容赦しない。

彼女の家は商業区で食事処付の宿屋を経営しており、彼女もそこで働いている。

また商業区以外の店にも臨時に働きに行く時があり、不良のマルス共々商業区では知られている少女。

ハンナ

宿屋“牛頭亭”を主人であるデルと切り盛りする中年の女性。

宿屋の帳簿や部屋の管理を主にしている。

非常に気前のいい、いわゆる肝っ玉母ちゃんである。

デル

宿屋“牛頭亭”を妻であるハンナと経営している。

厳つい顔をした巨漢で、主に厨房で料理を担当している。

第2章第2節

「すみません。ノルン先生怪我人が出たんです。治療していただけますか？」

アイリスディーナ・フランシルトが怪我をしたと思われる女子生徒に肩を貸してそこにいた。

彼女の後ろを見ると親友のティマ・ライムの姿もあり、彼女はアイリスディーナのものと思われる荷物を持っていた。

「分かった。まず怪我した生徒をその椅子に座らせなさい。」

ノルン先生はすぐさま生徒の様子を見に行き、ノゾムも棚の中から薬や包帯など、一通りの治療道具を取り出して彼女の元に向か合

う。

「なにがあつたの〜〜〜。」

アンリ先生は怪我した生徒を治療しているノゾムやノルンに代わってアイリスディーナたちから事情を聴いていた。

どうやら購買で人気商品の争奪という戦争していた生徒たちに巻き込まれたのが原因らしい。

「ふむ、足を捻挫しているが骨には異常はないな、筋も大丈夫のようだ。数日安静にしていれば治るだろう。一応塗り薬を塗っておこう。」

「
テキパキとノルン先生が手当をこなす横で、ノゾムも彼女を手伝っている、付添いのティマ・ライムと目が合った。」

「……」

彼女はノゾムと目が合うとすぐに目を逸らし、アイリスディーナの陰に隠れてしまう。

(……………俺、彼女に何かしたっけ?)

話したこともない少女からあからさまに避けられていることにノゾムは多少凹みながらも疑問を感じていたが、今はノルン先生の手伝いをしているのでそちらに集中することにした。

「これでいいだろう。しばらく安静にしておくことだ。」

「ありがとうございます。」

治療を終えたノルン先生に女生徒とアイリスディーナが礼を言う。自分が関わりがあったわけでもないのに、怪我人を助けて保健室に連れてきた上、手当してくれた人物にキチンと礼を尽くしているのを見ると、アイリスディーナという人物の人柄が見て取れる。

アイリスディーナは大陸西部の大国であるフォルスイーナ王国の重鎮の娘で、この学園では教師も無視できない人間だが、彼女はそれを鼻にかけるわけでもなく、日々努力を重ねる人格者であることは、この学園の人間なら誰でも知っている。

「さて、先生の言ったとおり、君はしばらくおとなしくしていた方がいいだろうね。」

「は、はい！！ ありがとうございます！！」

アイリスディーナが女子生徒に声をかけると、彼女は顔を赤らめ、上ずった声で答えた。

その容姿と際立った実力。高潔な人格を併せ持つ彼女は、学園では“黒髪姫”と呼ばれ、多くの男子生徒及び女子生徒から告白されているが、その想いを受け取ったことはないらしい。

ちなみに2年の1階級の模擬戦において、彼女と互角の戦いを繰り広げたのがノゾムの幼馴染であるリサ・ハウンスであり、彼女もまたその容姿と炎のような赤い髪から“紅髪姫”と呼ばれ、実技においてはライバル同士らしい。

「君も手伝ってくれてありがとう。」

アイリスディーナがノゾムに礼を言ってきた。

「い、いや、俺も偶々ここにいただけだから。」

整いすぎた容姿と深い黒の瞳に見つめられ、ノゾムの返答はかなりぎこちないものになってしまった。

「アイ。そろそろ授業の時間だよ……………」

ふと、アイリスの後ろにいたティマが言った。確かに昼休みは終わりが近づき、もうすぐ午後の授業が始まる時間だ。

「ん、そうか。では先生。私たちは教室に戻ります。手当ありがと

うございました。」

「そうか分かった。ノゾム君、手伝いありがとう。君も教室に戻りなさい。」

彼女たちはそう言い、もう一度礼を言うと、保健室を出て行った。部屋の時計を見ると、昼休みが終わるまであと数分。どうやら昼食の残りを食べている時間はなさそうだ。

「分かりました、教室に戻ります。」

ノゾムはそう答え、教室に戻った。

アイリスデイナー side

教室に戻る廊下で、私、アイリスデイナーは、先ほどの保健室で親友の様子がおかしかったので、そのことについて尋ねていた。

「ティマ。君が男性を苦手だというのは分かっていたが、先ほどの彼に対する態度はちょっと大げさだったんじゃないか。」

私が言うのは保健室でのティマのノゾムという男子生徒に対する態度だ。ティマは確かに男子が苦手で、一人で男の人の前に立つと碌に話せなくなる。

でも、先ほどの彼に対する態度は余りに過剰だった。

「ごめんアイ。でもあの男子。あの人だよ、リサさんを弄んだ

っていう……………」

リサは私たちと同じ3学年の1階級に所属する女子生徒だ。私たちと同じランクAに到達した優秀な生徒で、実技では私と互角に戦える数少ない人物の1人だ。

そういえば1学年の時に、そんな噂が流れていたのを耳にしたことがある。彼女は幼馴染の男子生徒と付き合っていたが浮気され、裏切られたと聞いた。彼がその相手だったのだろうか？

「しかし、噂を聞く限りでは彼とその噂の人物像は一致しないな。」

怪我人のために薬を用意したり、治療の手伝いをするなど噂で聞くような人物がやる事ではない。

「うん。でも私、あの時は怖くて……………」

ティマは落ち込み、俯いてしまう。彼女は優しいのだが少し気弱で、周りを気にしすぎてしまうところがある。

どうやら件の噂を聞いていたせいで、つい過剰に反応してしまっただようだ。

「まあ、今度会う機会があれば、その時謝ればいいさ。あまり気にしすぎても良くないぞ、ティマ。」

「……………うん。」

授業開始が近い。私は親友を慰めながら教室へと急いだ。

アイリスデーナ side out

「は〜い。それでは午後の授業を始めま〜す。」

アンリ先生の間延びした声が訓練場に響き渡る。

10階級の午後の授業は総合戦闘術だった。

この授業は今までの1対1の模擬戦とは違い、パーティーを組んで戦闘を行うので、個人戦闘能力だけでなく、チームワークが重要な力ギとなる。

そもそも、単体で強力な力を持つ魔獣に対して単独で戦うことはベテランの騎士でも危険極まりなく、また見返りも少ないので冒険者等のフリーランスの人たちも基本的に数人から数十人のパーティーを組んでおり、強力な魔獣の討伐時には臨時に他のパーティーと組んだり、助っ人を頼むときもある。

そのため今学園では複数のパーティーでの戦闘を通じ、それぞれの役割と様々な状況に対応できるような判断力を育成するため、3学年からは団体戦などの授業を多く取り入れているのだ。

しかし、クラスメート達がそれぞれパーティーを組むなか、ノゾムは相変わらず1人きりで、誰とも組めないでいた。

(分かってたけど、マズイなこれは)

この授業は複数で組まなければ意味がないが、ノゾムが声を掛けようとしてもクラスメート達は取り合わず、無視していた。

(このままじゃ授業にならない)

このままではパーティーが組めず、授業そのものができず、ノゾムにとっては意味の無いものになってしまう。

しかしクラスメート達はすでにパーティーを組んでおり、ノゾムが今から入る余地はなかった。

「おい、お前、組むパーティーいないなら、俺達と組むか。」

その時ノゾムに声をかけてきた生徒がいたが、その人物は、ノゾムはおるか他の誰も予想していない人物だった。

なんと声をかけてきたのはマルスだった。彼の取り巻きが驚き、クラスメート達がざわめく。

「お、おいマルス、本気かよ。」「なんでわざわざ役立たずを入れるんだよ。」

当然の反応だろう。マルスはクラスの中でも特にノゾムに突っかかっていた生徒なのだ。

クラスの除け者であるノゾムを誘う人間の候補からは真っ先に除外されるし、ノゾムも彼が自分に突っかかってくることを考え、組んでくれるとは思えなかったから彼らに話しかけてはいなかった。

マルスの取り巻き達が文句を言うてくるがマルスは取り合わず、ただノゾムを見つめていた。

ノゾムもマルスを見つめる。マルスが何を考えているかノゾムに

は分からないが、彼には選択の余地はなかった。

「……………分かった。入るよ。」

「……………よし。」

こうして、ノゾムとマルスの愉快な仲間たちという、このクラスでは最もありえないパーティーが完成した。

授業は相変わらずの模擬戦形式。マルス達とノゾムのパーティーの相手も4人。剣士の男子生徒が2人と槍使いの男子生徒が1人、短刀を2本持った短刀使いの女子生徒1人だ。

マルスの取り巻きの2人は1人が弓使いでもう1人は魔法を使う術士だ。

模擬戦開始の合図とともに、まず相手の剣士と槍使いが自身に強化魔法をかけて、マルスに切り掛かってきた。

「ふん！」

マルスは大剣を引き抜くと、2人の攻撃を受け止める。金属が激突する甲高い音が鳴り響き、強化魔法によって威力が引き上げられた攻撃がマルスを襲うが、気術で身体強化をかけたマルスは、全く揺るがない。

ノゾムは動きの止まった2人に攻撃しようとするが、突然目の前

を風の刃が通り過ぎたことで攻撃を封じられてしまう。風の刃が来た方向を見ると、短刀使いが魔法を詠唱していた。

再び風の刃が襲い、マルスと分断されてしまう。どうやら相手はマルスとノゾム達を引き離して各個撃破するつもりらしい。確かにこのパーティーで一番戦闘能力が高いのがマルスであることを考えれば、彼を引き離すことは戦略上必要だろう。

引き離されたノゾムに相手のもう1人の剣士が切りかかってきた。

「もらった!!」

ノゾムはすぐさま抜刀し、相手の剣を受け流す。身体強化をかけていたため、突進の勢いは強かったが、ノゾムに受け流されたことで体勢が崩れる。

ノゾムはすぐさま追撃を掛けようとするが、突然後ろから火の玉が突っ込んできて爆発し、吹き飛ばされた。

「あぐうう!!」

「おいおい、いいのかよ。アイツも巻き込んでしまった。」

「別にいいだろ。あんな使えない奴、おとり位にしかならないって。」

火の玉を撃ってきたのはなんとマルスの取り巻き達だった。彼らにとってノゾムは文字どおりおとりでしかなく、攻撃で巻き込んだとしても彼らにとっては痛くもかゆくもなかった。

「くそっ!!」

ノゾムは起き上がり、体勢を整えるがすぐさま相手の剣士が切り

かかってきた。さらにもう1人の短刀使いも加わり、ノゾムは防戦一方になる。3つの刃を受け流しながら2人同時に攻撃を受けないように移動を繰り返すが……

「そら！」

「ハハハ！ いい的だな！」

取り巻き2人も魔法と弓でノゾムごと攻撃してくるものだからどうにもならない。魔法による範囲攻撃で薙ぎ払われ、弓による正確な射撃で隙を突かれる。

取り巻き2人の攻撃は、遠距離攻撃という意味では相性がよく、お互いの長所がうまく絡み合い、攻撃における欠点である魔法の詠唱時間と次の矢をつがえるまでの隙をうまく消していた。

実質1対4の状況ではノゾムには打つ手がなく、捌ききることは出来るが、反撃しようとするとなりの取り巻き達がノゾムごと攻撃するのでそちらの対処をしないといけない。そして相手のパーティーから再び攻撃を受けるというループに陥っていた。

しかし、その状況が崩れた。横から猛烈な寒気を感じたノゾムは瞬脚を使い、全力で離脱する。

離脱していたノゾムの視界に映ったのは大剣を振り上げるマルス。相手をしてきた2人を倒したマルスはそのまま乱戦状態だったノゾムとノゾムの相手をしてきた2人の元に瞬脚で突っ込んできたのだ。大剣に風の刃を纏わせたマルスが全力で剣を横薙ぎに振るう。強化された薙力と風の刃によって、マルスの周囲が薙ぎ払われ、相手パーティーの残りの2人は吹き飛ばされて戦闘不能になり、模擬戦は終了となった。

ノゾムとマルスはお互い無言でにらみ合う。明らかにノゾムごと薙ぎ払ったマルスや、彼ごと攻撃してきた取り巻き達にノゾムは明らかに怒りを感じていた。

今までノゾムは学園ではすべてから目を背けていた。以前の彼ならすぐさま目を逸らし、自分の内に引き籠っていただろう。

ノゾム本人はそんな自分の変化に気づいてはいなかったが、彼は明らかに変化していた。

怒りが沸いていたノゾムだが、いつもと違うマルスの様子にやがて心の中で疑問が出てきた。

ノゾムごと薙ぎ払ったマルスだが、その眼にはこれまでのノゾムを蔑む色は見えない。その眼の奥にある考えはノゾムには分からなかったが、少なくとも敵意などではないことは分かった。

思えば3学年になってから、マルスのノゾムに対する雰囲気は明らかに変わっていた。

自分を罵ることも無くなり、授業中に突っかかってくることも無くなっていった。

(一体どういうことなんだ?)

ノゾムの心には怒りもあるがそれ以上に今はマルスの変化が気になった。しかし、互いに話しかけることはなく無言のまま。取り巻き達はマルスに話しかけてくるが、彼は取り巻き達を相手にせず、ただのノゾムを見ていた。

やがて授業の終了を告げる鐘が鳴り、解散となる。ノゾムは胸の中に芽生えた疑問に答えを見いだせないまま、訓練場を後にした。

マルスside

授業が終わった後、学校の廊下を歩きながら、マルスは先ほどの模擬戦について考えていた。

「アイツ……変わったな。」

思い出すのは巻き込むのも厭わず攻撃したこちらを睨みつけてきたアイツ。以前のアイツならそんなことはせず、ただ俯いて背を向けていただろう。

アイツ自身に何があったのかマルスには分からないが、奴の心境が変化する事があったのは察する事が出来ていた。

「……………しかしアイツ、どんな訓練してたんだ？」

マルスは先ほどの模擬戦で実質1対4だったノゾムの動きに感嘆していた。他の2人の相手をしていたため、戦いの最中に視界に入る程度だったが、4人の攻撃を捌いていたアイツの立ち回りには無駄がなかった。

アイツのように抑圧された状態で4人からの攻撃を捌くことは、自分では出来ないだろう。動き自体は遅く、そのため相手をしていたやつらを含めて周りは気付かなかったみたいだが、恐ろしいほどの確な動きだった。

相手の死角に常に動き、かつ常に1対1になるように動き回っていた。しかも、その状況で自分の不意の急襲を察知し、即座に動いたのだ。かなり広い視野を持っているのは間違いない。

「かなり戦いなれてやがるなアイツ。何処でそんな経験積んだんだ？」

この街で戦いの経験を積める場所は学園かギルドの依頼を受けることぐらいしかない。学園でアイツの相手をする人間はおらず、ギルドの依頼で討伐系を受けるにはアイツはランクが足りない。

学生がギルドから討伐などの依頼を受けるには一定以上のランクを保有するか、複数の人間でパーティーを組むしかなく、そうでない場合は雑務系の依頼しか受けられないようになっていいる。学園の生徒は所詮未熟者の集まりであり、また学園側も貴重な人材候補の喪失は避けたいところなので、このような取り決めが交わされているのだ。

「……………アイツ、もしかして1人で森に入ってるのか？」

他に実戦経験を積みそうな場所は森しかないが、学生が1人で魔獣の跋扈する森に入るのは無謀でしかなく、誰もそんなことをする者はいない。いくら町の近くには強力な魔獣はいないとはいえ、それは絶対ではなく、実際に旅人が襲われた例もある。だがそうでないと、アイツの動きの的確さに説明がつかない。

「……………確かめてみるか。」

マルスはある決心を固め、足早に廊下を歩いて行った。

第2章第2節（後書き）

第2章第2節です。いかがでしたか、今回マルス君はある決意を固めますがそれはまた後日投稿します。

ノゾムは龍殺しを含めた肝心なことは話せませんでした。アンリやノルンのおかげで少しずつではあるが変わってきています。

それでもやっぱり踏み出せないのは彼に“一歩を踏み出す意思”がまだ欠けているためです。そのあたりもこれから書いていこうと思います。

それではまた。

第2章第3節

放課後、授業を終えたノゾムはアルカザムの中央公園に来ていた。この公園は学園の回りを囲うように作られており、平日は学生たちがここで様々な話に花を咲かせ、休日には様々な露店が並び、市民たちの憩いの場所となっていた。

ノゾムがこの公園に来た理由は単純に考え事をするためだった。この公園のベンチに寝転がりながら、何度となく考えてきたことを考えていた。

今までの自分とこれからの自分。師匠の残した言葉と自身の内にある龍の力。リサとの関係。

でもいくら考えてもこれからどうするかがノゾムには分からない。それも当然だ、彼はまだようやく“今”を見つめ始めたばかりなのだから。

逃げてきたことを思い返せば、このままでいいとは思わない。でも……………

ノゾムは自分の内にいる巨龍を思いだす。全てを飲み込み、喰らい、滅ぼしかねない存在。シノとの戦いの後もノゾムの内で相変わらず圧倒的な存在を誇っていた。

ノゾムの顔が辛歪む。その表情は傍から見てもとてもつらそうだった。

あの圧倒的な存在のことが知られた時、自分はどうなってしまうのだろうかと考えてしまうとどうしても踏み込めない。

ソルミナティ学園は大陸各国の出資によって設立、維持されている。その学園で育成した人材は未来の国際情勢に影響を与えるため、この学園は各国の政府に注目され、政治的な駆け引きが表と裏で常

に行われている。

そんなホットスポットに数百年現れなかった龍殺しが現れたら……。
ノゾムにとってティアマツトは肉体的な意味だけでなく、精神的にもあまりに大きな楔として彼の心に打ち込まれていた。

「ノゾムさん何をしているんですか？」

ノゾムが自分の考えに懊悩していると突然声をかけられた。

傍らをみると10歳ほどの少女が腕に黒猫を抱えて事らを覗きこんでいた。

「ずいぶん難しそうな顔をしていたみたいですけど、大丈夫ですか。」

少女はずいぶん心配そうな顔をしている。ノゾムは慌てて表情を取り繕うと、少女に向かって微笑んだ。

「ううん。大丈夫だよ。ソミアちゃん。」

彼女の名前はソミアリーナ

ノゾムと彼女との出会いは、ノゾムがどうにか3学年に進級できた時まで遡る。

学年末試験の追試にどうにか合格し、進級がぎりぎり決まった後、学年が変わるために学園がしばらく休みにる頃、ノゾムはつかの間の休日に町に散歩に出た。

市民街の公園の屋台に立ち寄って昼飯を買う。買ったのは麦パンに野菜と腸詰めをはさんだもの。

ブラブラと歩きながら、屋台で買ったパンを食べていると、視界に一人の少女が公園の木を見上げてオロオロしているのが目に映った。

少女の周りには人はおらず、少女一人ではどうにもならないようだ。

仕方がなくノゾムは少女の傍に行き、声をかける。

「どうかしたのか？」

「えっ。」

ノゾムの声に少女が気づいてこちらを見る。歳は10歳ほど、艶のいい黒髪を肩あたりで綺麗に切りそろえていて、深い漆黒の瞳が印象的な美少女だ。

でも、顔立ちはやはり幼く、年相応である。

「えっと、じつはクロちゃんと遊んでいたんですけど・・・」

少女はそうやって木を見上げる。

ノゾムも木を見上げると、木の枝に黒猫がおり、どうやらあの猫が件のクロらしい。黒猫は木の枝の上で何かにじゃれついていた。

「あれ、わたしの腕飾りなんですけど、クロちゃん気に入っちゃって。もうっ。クロちゃん返してよー！ー！」

黒猫はよほどその腕飾りが気に入ったのか、少女をそっちのけでその腕飾りで遊んでいる。

「しかたない。」

ノゾムは食べかけのパンを胃袋に押し込み、木を上り始める。黒猫はこちらに気付いたのか尾を立てて警戒する。

「おとなしく観念してそれを返せ。」

ノゾムは黒猫のいる高さまで登り、猫を捕まえようとするが、奴は「ふしゃー！ー」とこちらを威嚇し、爪を振り回して抵抗する。

「くらー！！暴れるな！！！」

「フギヤ！」

猫はさらに抵抗し、ついには彼に飛び掛かってきた。木の上ではるくに動けずノゾムは猫にいいようにひっつかかれる。

「いたたたた！！！！ このくそ猫！！！！！」

狭い木の枝の上でノゾムと猫の大乱闘が繰り広げられる。彼は木の上ということもありるくに動けず、猫は“そんなのかんけいねえ！”とばかりにひっついてくる。

徐々にノゾムのバランスは崩れ、枝はギシギシと軋み、徐々に耐

えられなくなっていく、遂にバキッ！という音とともに枝が折れる。

「うおっ！！」

「ニヤニヤ！！！」

重力に引かれ、ノゾムと猫は真つ逆さまに地面に向かって落ちていく。

しかしさすが猫。黒猫は空中で素早く身を翻すと、そのまま少女の腕の中に納まる。それにくらべてノゾムは体勢を立て直せず、不恰好に地面に激突。「ぶっ！」という情けない呻き声を上げて地面にうずくまった。

「……あ、あの……大丈夫ですか？」

「……うん……大丈夫。」

ノゾムはやせ我慢して返事をして、どうにか立ち上がる。彼女は心配そうにこちらを見ていて、ノゾムは先ほどの醜態を思い出し、なんだか自分が情けなくなりそうだった。

「それより、腕飾りは大丈夫？」

黒猫は少女の腕の中で未だに腕飾りにジャレついているが、腕飾り自体は大丈夫のようだ。

「よかった。ありがとうございます。」

少女は心から安心したらしく、花のような笑みを浮かべた。無垢で純粋なその表情にノゾムも久しぶりに自然な笑みを返していた。

シノが亡くなり、居場所を失ったことでノゾムの心は本人も気づかない内に張り詰めていたのだろう。

「あ、ごめんなさい。自己紹介してませんでしたね。私、ソミアリアナって言います。友達はソミアって呼びます！」

「あ、俺はノゾム・バウンティス。俺はノゾムでいいよ。ソミアちゃん……って呼べばいいかな？」

「はい！ よろしくお願いしますね、ノゾムさん！」

「こちらこそよろしく。」

互いに自己紹介をしていたが、ノゾムは彼女の服に気が付いた。彼女の服はエクロスの制服だ。

エクロスはソルミナティ学園の付属学校で主に10歳前後の幼子たちが通っている。

この学校の創立目的は見込みのある子供たちを早い段階から英才教育を施すことで、より高い能力を持つ人材を育成することであり、各国重鎮の嫡子や生まれつき希少なアビリティを持つ子供などが大陸中から集められて、教育を受けている。

「ソミアちゃん、エクロスの生徒なんだ。」

「あっはい！ そうです。今年で5年生になります。」

エクロスは6年制の学校だ。ということは、彼女は少なくとも5年間英才教育を受けてきたことになる。

エクロスに入るということは各国から既にその才覚を認められて

いるということに等しい。少なくとも万年落ちこぼれの自分とはえらい違いだとノゾムは思った。

「でもノゾムさん、ソルミナテイ学園の生徒さんなんですよね！」

彼女は向日葵のような笑顔を顔いっぱい咲かせて訪ねてきた。

「うん。まあ俺はまだまだ未熟者だけどね。階級も10階級と最底辺だし。」

「そうなんですか。じゃあ私と同じですね！ 私もまだまだですもん！」

ソミアちゃんは、舌をペロツと出しながら恥ずかしそうに答えた。ずいぶん表情豊かな少女である。その笑顔を見ているとノゾムも不思議と元気が湧いてきた。

（なんとなく、ソミアちゃんはアンリ先生と気が合いそうだな。）

ノゾムは自分のクラスの担任の顔を思い出していた。彼女ののんびりとした性格と太陽のようなソミアちゃんとはなんとなく歯車が合いそうだった。

「そういえば、ソミアちゃんは何か目標でもあるの？ さっき自分のこと“まだまだ”って言うってたから、何と無くそんな感じがしたけど。」

「あっはい！ 私、姉様が目標なんです！」

その“姉様”について聞いてみると、ソミアちゃんはさらに饒舌になり、笑顔も5割増しの大売り出しとなった。

“姉様は強い” “姉様はかっこいい” “姉様は優しい”

どうやら件の人物はかなりの出来る人のようで、ソミアちゃんもその“姉様”を心から慕い、憧れているのが傍から見てもとてもよく分かった。

同時に同じくらい心配しており、無理していないか、怪我していないか、変な男に捕まっていないかと行き過ぎるくらい心配していた。

話を聞く限りではどうやらその“姉様”似たような感じらしいので、お互い似た者姉妹の様だ。

「そういえばこの黒猫。まだ遊んでいたのかよ。」

ノゾムがソミアの腕の中の黒猫を見ると黒猫はまだ腕飾りで遊んでいた。よく見ると腕飾りには繊細な装飾が施され、また同じように装飾を施された小さな鐘が付いていて、かなり価値があることが素人目にもわかった。

「この腕飾り、かなり貴重なものらしいけど何なんだろう？」

「あ、この腕飾り、家に代々伝わるものらしいんです。何でも家族の絆を繋ぐ物みたいで、これを持っているとたとえ離れ離れになってもいつか必ず再会できるっていわれています。」

「へえ、ずいぶん嬉しくなる言い伝えだね。」

「はい！ですからうちでは代々家長の2人目以降の子がこれを持つことになってるんです。たとえば家を出る事になっても絆が続きますようにって。」

彼女は本当に嬉しそうに腕飾りの話をする。彼女にとっては言い伝えもそうだが何より家族の繋がりがほしいのかもしれない。絆の言い伝えの腕飾りを常に身につけることで、家族を感じていたいのだろう。

話が弾んでいた彼女だが、腕飾りにジャレついている黒猫を思い出し、腕飾りを取り上げた。

「あつ、そうだった。クロちゃんもういいですよ。」

彼女が腕飾りを取り上げると、黒猫はまだ遊び足りないのか、“返せ返せ”とおもちやを取り上げられた赤ん坊のように腕をバタつかせていた。

「それにしてもずいぶん腕白な雄猫だな。」

「えっ！」

「だって勝手に飼い主の持ち物取り上げて、さんざん遊んだ上、まだ遊び足りないなんてなあ……。」

「……えっと……。」

ソミアちゃんは何か言いずらそうにしている。

「あのう、ノゾムさん。クロちゃん……女の子です……。」

「……………え？」

「だから、女の子です。」

なんとこの黒猫、メスらしい。腕白具合といい、木の上でノゾムと繰り広げた乱闘といい、どう考えてもオスとしか考えられなかった。

（普通クロって名前、オスにつける名前だよな）

「えっと……なんで名前、クロなの？」

「えっ、可愛いじゃないですか、なんかこう、フィーリング的に。」

「……………そ、そう。」

どうやら彼女のネーミングセンスは少しズレているらしい。

「あっそれにクロちゃんの飼い主さん、私じゃありませんし、たぶんこの子野良だと思います。」

彼女の話ではエクロスの校舎の周りで時々見かけるようになって、それから一緒に遊んだりするようになったらしい。

「へえ、こいつ野良なのか。ずいぶんソミアちゃんに懐いているみたいだったからってつきりソミアちゃんが飼っているのかと……………」

「

そう言ってノゾムがクロに手を伸ばした瞬間。

「シャー！！！！！！！」

「いてー！！」

突然クロがノゾムの手を引っ搔いてきた。

「あつ！だいじょうぶですか？ クロちゃん気難しくて懐いてくれない人には本当に懐かないんです。」

「いててて。そうなの？」

「はい、クラスの男子は全員ダメでした。女子は大丈夫なんですけど……………」

（それって単純に男はダメってだけなんじゃ…………）

どうやらこの黒猫。女の子にしか懐かないらしい。ノゾムが引搔かれた手をさすりながらクロを見ると、彼女の腕の中では大人しく、正に借りてきた猫状態。

クロはノゾムがこちらを見ることに気付くと“ツン”とそっぽを向いて、ソミアの腕の内側で寛ぎ始めた。

（こ、こいつー！）

ノゾムはクロを睨みつけるが当の本人（本猫？）はどこ吹く風と

完全にノゾムを無視。ソミアが持っている腕飾りに再びジャレつこうとしていた。

「ちょ、ちょっと、だめだよクロちゃん！」

ある意味とても猫らしい猫である。

その後、腕飾りで遊ぼうとするクロとそれを止めようとしたノゾムとの間で大乱闘が繰り広げられ、2人（1人と1匹ともいう）が仲良く揃って10歳児に説教をくらったのは甚だ余談である。

これがノゾムとソミアの出会いである。それから何度かこの公園で顔を合わせては、世間話をしていた。ちなみに時々1人と1匹の大決戦が繰り広げられるが。

「そういえばソミアちゃん。そろそろ誕生日だったよね。」

「はい！ 私、もうすぐ11歳になります！」

いつもの笑顔を振りまき、楽しそうに言うが、次の瞬間には表情が陰りを見せていた。

「でも、せっかくの誕生日なのに、父様帰ってこれないみたいなんです。」

話によると、父親は常に忙しく、ほとんど家に帰ってこれないらしい。母親もすでに亡くなっているらしく、家族は姉しかいないそ

うだ。

「でも、姉様が誕生会を開いてくれるそうなんです！」

でもソミアは再び笑顔を見せ、寂しさを胸の内にしまいこみ、明るく振る舞っていた。

(……強い子だな……)

今思えばノゾムが彼女ぐらいの時は、もっと親に甘えていただろう。気丈に振る舞う彼女を見て、ノゾムは感心すると同時に悲しくなった。甘えたい時に甘えられる相手がいないというのはとても辛いことなのだ。

ノゾムは自身の事を思い出す。学園で孤立して、誰にも頼れず、目を背けて、張りつめた糸のように何時切れてもおかしくない状態だった。

そんな時、師匠が言ってくれた「おかえり」という言葉とその時の抱擁にどれだけ救われただろう。

忘れていた人の愛情を思い出すことができた。

凍りついた心がやさしく溶かされ、思いっきり泣くことができた。

“ひとりじゃない”とあの時実感できた。

師匠が自分を受け入れてくれたおかげで自分は最後にあの人の願いを受け止めることができた。

本音で語り合い、全力でぶつかり合い、本気である人と向き合うことができた。

そして、大切なことを教えてくれた……前に進むために。

「ソミアちゃんの誕生日なら、おれも何かプレゼントを用意するか。」

「え、本当ですか!!」

彼女はノゾムがプレゼントを用意してくれるとは思っていなかったのか、満面の笑顔を浮かべてたずねてきた。

「うん、まあ大したものを用意できないけど、俺なりにいいものを用意するよ。」

「はい！ 楽しみにしてますね！！」

今度の彼女の顔には先ほどの暗い寂しさの影はなく、まさしく“お日様”のようだった。

（よかった。こんないい子が暗い顔をするところなんて、誰も見たくないしな）

ノゾムはその笑顔を見て、ホツと肩の力を抜いた。

「そういえば今日は何か用事でもあったのかい？」

エクロスの下校時間はもうとっくに過ぎており、ソミアがここにいる理由がノゾムには分らなかった。

「はい、今日は姉様を迎えに来たんです！」

（彼女の姉というと、出会ったときベタ褒めしていた人が、そういえば、お姉さんについては詳しく聞いたことなかったな。）

彼女が学園の下校時間に学園の傍の公園にいるところを見ると、彼女のお姉さんは学園関係者なのかもしれない。

「ソミアちゃん、お姉さんはソルミナティ学園にいるの？」

「はい、姉様もノゾムサンと同じソルミナティ学園の生徒さんなん

です！」

「へえ（ん、まてよ）。」

ノゾムはソミアの顔を見る。艶のある黒髪に漆黒の瞳、整った顔立ち。ノゾムはソミアの顔にある人物の面影が見えた。

「ねえソミアちゃん、もしかしてお姉さんって、ソミア、待たせてすまないな。」

突然かけられた声にノゾムが振り向くと、ノゾムの体は完全に固まった。

腰まで伸びたロングストレートの黒髪。整いすぎて現実とは思えないほどの容姿と、深い漆黒の瞳。その顔は凜としていて、美の女神に祝福されたような肢体からは選ばれた者だけが纏えるオーラが見えるようだった。

ソルミナティ学園3学年トップのアイリスディ・ナ・フランシルトだった。

第2章第4節

「あ、姉様！」

ソミアちゃんがアイリスディーナさんに駆け寄っていき、彼女はソミアちゃんを優しく受け止める。アイリスディーナさんの顔は微笑んでいて、学園での凜とした彼女ではなく、1人の優しい姉としての彼女のように思えた。

ソミアちゃんは頻りにアイリスディーナさんに話しかけていて、彼女もソミアちゃんの言葉にひとつひとつ頷いていて微笑ましく、その光景を見ていた周りの人たちにも笑みがこぼれていた。

（そうか、ソミアちゃんのお姉さんってアイリスディーナさんだったのか）

確かに2人にはよく似ている。髪の色、瞳、顔立ち、それぞれの纏う雰囲気の違いすぎて分からなかったが、言われてみれば2人はとても似ていた。

（たぶんアイリスディーナさんの小さい頃はソミアちゃんと瓜二つだっただろうな）

ノゾムはソミアの待ち人が来たので姉妹の邪魔をするのも悪いと思いい、そのまま帰ろうとしたが、ソミアと彼女に手を引かれたアイリスディーナがこちらに歩いてきた。

「やあ、妹が世話になったね。」

「え、あ、ああ……………」

アイリスディーナがノゾムに微笑みながら話しかける。

当のノゾムはいつも周りから向けられる嫌悪にゆがんだ顔ではないことに驚いていた。

何より彼が返事に詰まった理由は彼女の笑顔。唯でさえ彼女の容

姿は芸術品のように整っているのだ。そんな彼女に笑みを向けられ
たら……………」。

かつてリサが自分に向けてくれていた生命力に溢れる笑顔ではな
いが、清流の様な澄んだ笑顔に、ノゾムはまともな返事を返せな
かった。

「……………?どうかしたのかい?」

「い、いや! なんでもない!」

アイリスディーナが固まったノゾムに再び話しかけると、ノゾム
はようやくまともに返事を返した。最も、返事はまともでも声自体
はガチガチに固まったままだったが。

「クスクス、ノゾムさん。アイ姉様の笑顔に見惚れてたんですよ。」

（ち、ちょっとソミアちゃん!!）

ソミアの一言でノゾムは慌てた。

（見惚れていたのは本当だが、それを本人と当人の前で堂々と言わ
なくてもいいでしょう!）

「ふふ、そうかそれは光栄だな。」

ソミアが余計なことを口走ったせいでノゾムはアタフタと慌てる
が、アイリスディーナは全く動じずにすぐさま返す。

どうやら2人に遊ばれたようだ。ノゾムは恥ずかしさから2人を
ジト眼で見つめるが、ソミアはペロツと舌を出して誤魔化し、アイ

リスディーナも口に手を当てて微笑む。その表情も可愛くて、ノゾムは自分をからかった彼女達をつい許してしまった。

(…………美人って得だよ……………)

「そういえば、君は今日の昼休み保健室にいたね。あの時は手伝ってくれてありがとう。」

ノゾムが思ったより気さくな人だなあと考えていると、アイリス・ディーナが昼休みの時の治療の礼を言ってきた。

「いえ、自分もたまたま保健室にいただけですし…………それに治療をしたのはノルン先生です。」

「それでも君は私たちが連れてきた子が怪我人だと分かったらすぐに薬を持ってきてくれただろう。」

「まあ、何もしないもの良くないので…………そういうアイリスディーナさんも自分と関係ない子が怪我したのに保健室まで連れてきてあげたじゃないですか。」

「まあね。目に付いた以上、無視はできないよ。それに怪我をした人を助けるのは当たり前だよ。」

やはり彼女は人柄がいいのだろう。自分が直接関係なくても困っている人がいるなら助ける。それが彼女のやり方のようなのだ。

“困っている人がいるなら助ける” そう言う彼女には押し付けがましさや不自然な気負いなどはない。きっと彼女は自然に人を助けることができる人間なのだろう。

そんな彼女がノゾムには眩しく、輝いて見えた。

目の前の男の子と話しているが、やはりあの噂が立つような人とは思えない。

最近妹が公園で困っていたところを助けてくれた人がいたとは聞いていたが、それが彼とは思わなかった。

妹が楽しそうに話すその男の子と噂の人物は保健室で私が感じたとおり、大きくかけ離れていた。

ノゾム・バウンティス。

少なくともその名前をいい意味で捉える人はいない。同学年のリス・ハウন্ズの元恋人で彼女を裏切った裏切り者。知り合いや後輩の女子生徒に聞いても似たような話が出てきており、そのほとんどが彼に対して強い怒りを覚えていた。

リス・ハウন্ズは真紅の髪と明るい笑顔の持主で、学園でも屈指の実力者だ。しかし、本人はその才覚に驕ることはなく、理不尽な暴力は許さないなど、自分から見ても魅力的な女性であるし、好感を持てる人だった。

そんな彼女が幼馴染で恋人の男子生徒に浮気をされて捨てられたという噂が立ったのが、1学年の夏だった。

当時、私たちの学年はその話で持ちきりで、恋人に捨てられたという彼女の元にはたくさん生徒たちが心配して駆けつけていた。駆けつけてきた人は皆、彼女を捨てたという男子生徒に強い怒りを覚え、聞いたところによると、そのリンチまがいのこともあったらしい。

同じ女として、話を聞いた時は私も彼女を裏切った男子生徒に対して憤りは感じたものの、さすがにやり過ぎだとは思った。

目の前の男子生徒を見る。際立った容姿などはない、どこにでもいるような普通の男の子だ。たぶん人混みにまぎれたら見分けがつかないだろう。

彼をからかった妹とジャレ遭うその姿は微笑ましく、妹も懐いて
いるようで、それには少し驚いた。

私の家はあまり言いたくはないが大きく、いわゆる名家と言われ
ている。長く国に仕え、重要な役職につき、国に奉仕してきた。

それに伴って大きな権力を持つようになり、その力はこのソルミ
ナティにおいても強い影響を与えてしまう程だった。

そんな強い権力にはその甘い蜜を吸おうと多くの蟲が寄りついて
きた。

その蟲たちは、頭首の実子である私たち姉妹も当然標的にしてお
り、汚濁のような心を能面のような笑顔で取り繕って近づいてきた。
子供の頃から私たちはそんな欲に塗れた大人たちに囲まれてきた
ためか、人の内にある悪意に妹も私も敏感になり、そんな人と会話
をする時は、楽しそうに話ながらも心には大きな壁を作っていた。

そんな処世術を身につけてしまった私と妹だが、彼と遊んでいる
時の妹にはそんな壁は存在せず、素のままの自分をさらけ出してい
る。私もこうして向き合って話をしていても、心には彼に対する警
戒感は湧かない。

自分で言うのもどうかと思うが、私の容姿はかなり良いらしく、
同年代の男の子の視線は私の胸やお尻に向かい、それと同時に劣情
の視線も感じるのであまり好きではない。

だが彼にはそのような不快感はない。妹に指摘されて慌てていた
が、それはどちらかというと微笑ましく、不快感を煽るようなもの
ではなかった。

不思議な青年。それが彼に抱いた最初の感想だった。

その後、陽が落ち、夕焼けが公園を照らし始めたので、ノゾムは2人に別れを言い、寮へと戻った。

戻る途中の道中で先ほどのアイリスディーナとの会話を思い出すとノゾムは少し嬉しくなった。

あんな風に同年代の人と自然に話すのは本当に久しぶりだったからだ。

(中々話す機会はないと思うけど、また話ができたらいいな)

寮に戻るとすぐに支度をし、寮を出る。向かうのはシノの小屋。明日は休みということでノゾムは夜に鍛練を行い、シノの小屋に泊まることにしていた。シノの小屋は森の中にあるので、そこなら能力抑圧を解放しても、人には気付かれぬ。ノゾムが龍殺しの力を解放する時は必ずそこで行っていた。

「……………?」

寮を出てしばらくすると、ノゾムは妙な視線を感じた。寮を出てからずっと自分を跡をつけてきている。

学園で自分をよく思わない人間かと思ったが、視線には敵意はないのでそうではないようだ。

街を出てもまだ追って来ている。どうやら視線は1つなので、追っ

て来ているのは一人のようだ。

「森に入れば撒けるかな。」

しかし下手に撒くと後々面倒なことになりそうなので、ノゾムはそのまま森に入り、いつもどおり小屋へと向かう。

しばらく森を歩いていたが、視線が感じられなくなったことを確認すると、一旦足を止める。

「ふう、いなくなったみたいだ。でも誰だったんだろう。」

ノゾムは視線の持主について考えるが、答えは出ない。しかし、こんな風につけられる理由を考えると推測はできるが、その推測はあまり歓迎できないものだった。

（もしかして、龍殺しってバレた？）

それはノゾムにとってはあまりによくないものだった。もしそうなら各国政府がどんな対応をしてくるか予想できない。

（でもそれなら最後までつけてくるよな？ 森に入ったくらいで追跡を止めるとは思えない。）

自分でいろいろと推測を立ててみるが、今のノゾムには答えを出すことはできず、結局そのままシノの小屋に向かった。

「やっぱりアイツ、森に行っていたのか。」

ノゾムの後を付けていたのはマルスだった。ノゾムが森に入っているのを確かめて、その上で言い逃れできないようにして色々聞き出すつもりだったのだ。

しかし、相手が森に入ってしまった、一人で森に入るのは危険と判断して森の手前で引き返したのだ。

「森に入られちゃったが、まあいい。明日は幸い休みだ。色々問い詰めるにはもってこいだな。」

元々マルスに魔獣の跋扈する森に一人で入る気はなかった。

今回ノゾムが一人で森に入っている事実を確認できれば、その事実から問い詰められると考えていたし、他にも方法は考えていた。かなり力ずくな手段ではあるが……………。

シノの小屋に到着するとノゾムは荷物を小屋の中に置いて、掃除をする。

掃除をしていると、棚の上に置かれた位牌と一振りの刀がノゾムの視界に入った。かつてシノが使っていた刀だ。

シノの死後、小屋の中にある故人の荷物の整理をしていたノゾムは彼女がノゾムに向けて当てた遺書があった。

そこには「わしの刀をお前に譲る。」とだけ書かれていた。遺書に書くようなことは初めから死の間際にすべて伝えるつもりだったのだろう。

そんなあり方がまっすぐな師匠らしいと、この遺書を見た時ノゾム

は思った。

しかしノゾムはまだその刀を使わなかった。

未だ逃げている自分が、この刀を持つには相応しくないと思っていたのだ。

しかし、

（師匠……今はまだこの刀を持つことはできませんが、いつかきつと……）

掃除が終わると、ノゾムは素振りを始める。自然体の状態から即座に抜刀し、抜き打ちの刃が空気を切り裂く。放たれた刃をすぐさま返し、返しの刃を放つ。返された刃の勢いを殺さずに連撃へと繋ぐ。

左切上げ、逆袈裟切り、横薙ぎ……。

すり足による流れるような体重移動と体幹の筋肉を連動がそれらの斬撃を無駄なく連動させる。

連撃を行う中でノゾムは自分の内に埋没する。

やがて周囲の音は聞こえなくなっていき、完全に自分の世界の内で刀を振るいながら自分の斬撃を修正していく。

そのまま今度は身体強化を発動し、型の中で気術による技を絡めていく。刀身に気を纏わせて切り払うと即座に納刀。“破振打ち”

を放ち、体術に移行する。

正拳突き、踏み込んだの肘打ち、体を回転させつつ腰を落としての足払いと追撃の鞘打ち。

抜刀からの連撃と体術を連動させ、絶え間なく舞うように踊り続ける。

最後に一気に刀を振り下ろす。空気が切り裂かれ、凧ぐ風が髪を揺らす中でノゾムは残心。

佇まいを正したノゾムは刀を鞘に納めると目を瞑る。ここからは細心の注意を払わないと即座に死ぬことになる。

ノゾムは再び自分の内に埋没していく。やがて自分の体に巻き付いた鎖が見えてくる。ノゾムのアビリティ“能力抑圧”が具現化した鎖だ。

これから行うのは能力抑圧の解放と龍殺しの力の制御。

「……………ふう……………」

息を整え、鎖に手を掛ける。

もし制御に失敗すれば滅龍王を開放してしまうことになり、その時ノゾムは間違はなくタダでは済まないだろう。

しかし目を背けるわけにはいかない。制御できないまま放置して取り返しのつかないことになった時、自分だけではなく、アンリ先生やノルン先生、アイリスディーナさんやソミアちゃん達に累が及んだら一生後悔するだけでは済まない！！

ノゾムは覚悟を決めて身を縛る鎖をはずす。

その瞬間、解放された力が一瞬で望の体を満たし、収まりきらずに体から溢れ出す。

「ぐ、ぐううううー！」

ノゾムは歯を食いしばって耐えるが、強すぎる力によってノゾムの精神はあっという間に押し流しされそうになり、体には脂汗が浮く。

大きすぎる力は一人のちっばけな人間の精神など容易く壊してしまいが、ノゾムの精神はどうか耐えていた。

龍殺しとなり、ティアマットの力を一部とはいえ手に入れたことで、その力に対する耐性を多少なりともノゾムは手に入れていたのかも知れない。

しかし、やはり限界が訪れる。必死に抗っていたノゾムだが遂に耐え切れなくなるなり、再び自身を縛る鎖を己の体に巻き付けた。

「く！ ハアハアハアハア……………」

能力抑圧がティアマットの力を封じ込めると、ノゾムはその場へへたり込んでしまう。

ドツと出た脂汗と力の反動で全身はガクガクと震え、すぐには収まりそうにない。

「やっぱり、どんなに抑えても2分位が限界か……………くそ！」

ノゾムはそのまま仰向けに寝転がる。

結果は芳しくない。やはり今のノゾムでは2分が限界で、これ以上制御できそうな気配はない。

ノゾムの表情には、一向に成長する気配がない制御力に焦りが見えていた。

結局その日の鍛練はそれ以上の結果を出すことはできず、ノゾムは翌朝帰路に就いた。

ノゾムが寮の自分の部屋の前に着くと、ノゾムにとって意外な人物が彼を出迎えた。

「よう、ずいぶん遅かったな。」

ノゾムの部屋のドアにもたれかかっていたのはマルスだった。

「……何か用なのか？」

「ああ、ちよつと顔貸しな。」

マルスは有無を言わせぬ口調でノゾムにそう告げた。

「いったい何だ。俺は仕事帰りで眠いんだけど。」

森に入っていた事と、そこで龍殺しの力の鍛練行っていたことは話せないので、ノゾムは朝方まで仕事をしていたと嘘を付く。

「ふん、仕事ね、それは森の中でやるようなものか？ 確かお前、ランクが足りないから森でやるような仕事は受けられないよな。なのに、なんで森に行っていたんだ？」

マルスの言葉にノゾムの意識は一瞬真っ白になった。

（何で知られた？ もしかして昨日つけてきたのは……………）

「もしかして、昨日俺をつけてきたのは……………」

「ああ、俺だ。…………しかし、やっぱり気付いていたのか。ならちよ

うどいい、お前に聞きたいことがある。ついて来い。」

マルスが背を向けて歩き出す。ノゾムにはその背について行くしか選択肢は無かった。

第2章第4節（後書き）

第2章第4節投稿です。

次はマルスの追求が始ります。
それではまた。

第2章第5節

マルスがノゾムを連れてきた場所は、街の外周部。既に太陽は高く昇り、徐々に暖かくなつていく陽の光が春の陽気を町中に振り撒いていた。

アルカザムは街の周囲の森に生息している魔獣等の侵入を防ぐため城壁で囲まれている。

また、城壁は街までの間にかなり距離を空けて建てられている。これはいざ大規模な侵攻を受けた時に、大規模な部隊の展開を可能とし、またその部隊を維持するための物資の保管場所ともなるためだ。

また、街からの距離も離れているため、人に見られる可能性も森の中ほどではないがかなり低い。

そこでノゾムとマルスは2人きりで向かい合っていた。

マルスは背中に背負った大剣を抜き放つと、いきなりこちらに切り掛かってきた。

「くっ！」

ノゾムは刀を抜刀しながらマルスの大剣の側面を撃ち、同時に相手の側面に回り込むようにして回避する。

「ちよっ、いきなりどうということだよ！」

マルスの体には気が満ち、軽く流すところではなく明らかに戦闘態勢である。ノゾムは訳が分からず、マルスに問いかける。森での事や自分の事について問い詰められるとは思っていても、まさかいきなり剣を突きつけられるとは思わなかった。

「別に、ただこちらの言うことに答えてもらっただけだ。」

「じゃあなんで剣を向けるんだよ！」

マルスはノゾムの問いかけには答えず、斬りかかってくる。ノゾムはやむを得ず迎撃する。2人の奏でる剣戟の音が木霊した。

マルスが強化された身体能力を使い、大剣使いとは思えない連撃を放ってきた。

剣の軌道は袈裟切り、横薙ぎ、逆袈裟切りの3連撃で、剣の動きに遅滞はなく、また威力も十分にあり、マルスの大剣使いとしての力量がかなりのレベルであることを伺わせる。

大剣等の重量のある武器での連撃はかなりの高等技術である。生半可な身体能力では大剣の重量に振りまわされ、流れるような連撃など到底放てない。

しかしマルスは威力の十分乗った斬撃を十分な速度で放ってきた。

ノゾムは初めの袈裟切りは体を横に向けてかわし、横薙ぎをしゃがむことで避ける。

最後の逆袈裟切りはマルスの刃筋に対して刀を斜めに掲げながら、斜め前に一步踏み込む、自身が受ける力のベクトルを斜めから横方向に変え、そのまま踏み込んだ方向に体を移動しながらマルスの側面に移動する。

ノゾムは移動する勢いを利用してマルスを切りつけるが、マルスも読んでいたのか、刀の軌道に大剣が割り込み、甲高い音とともに防がれてしまわれてしまう。

ノゾムは防がれたことは気にせず、そのまま連撃を放つ。間合いはマルスの大剣の間合いのやや内側、ノゾムの刀がギリギリ届くくらい。

ノゾムの連撃はマルス以上に無駄がなく、速度と力は足りないが、隙がないためマルスは迂闊に攻めに転じることができなかった。

攻めに回れないマルスは、仕方なく大剣を器用に使ってノゾムの連撃を捌く。

大剣を両手で持っていたため、両手が塞がっていたマルスは自身の体に気を高めて解き放つ。技名はなく、ただ気を放出させたただけだが、豊富な気を持つマルスの気の放出はノゾムの連撃を僅かではあるが遅らせる。

その隙にマルスは片手に気を集中させてノゾムを殴り飛ばす。

優れた身体能力を持ち、なおかつ気で強化されたマルスの拳は、魔獣の一撃に匹敵する。能力抑圧の影響下にあり、気術の強化の恩恵もあまり受けられないノゾムには無視できない一撃だ。

ノゾムは鞘でマルスの拳を受け止め。後方に飛ぶことで力を受け流す。

ノゾムが着地する瞬間、マルスが追撃してきた。瞬脚で間合いを詰めると気術“塵風刃”を発動。大剣に纏わりついた風の刃を大剣ごとノゾムに叩きつけようとするが、ノゾムは着地の瞬間にマルスと同じく瞬脚を発動。気を足に集中させて脚力を限界まで強化し、

一気にマルスに向けて呐喊した。

「なっ!!!」

マルスはまさか真正面から突っ込んでくるとは思わなかった。

それも当然だろう。ノゾムは今まで攻撃するにしても、まず受け流し、その上で攻撃していた。

ノゾムは模擬戦でも自分から攻めることほとんどしていない。

能力抑圧の影響で攻めるために必要な瞬発力に制限がかかっていたためだ。

マルスが振り下ろし大剣は勢いがつきすぎていた為、マルスは他の行動を起こすことができない。

ノゾムの速度は頭上に迫る大剣の剣速を上回り、マルスの間合いを侵食する。ノゾムの予想外の動きがマルスの剣筋を僅かに鈍らせたことが原因だ。

マルスの大剣が自身に届く前に、ノゾムは彼の大剣の内側に侵入振り下ろすマルスの腕に肘打ちを打ち込む。

「グッ！」

ガントレットに守られていない部分を攻撃された為、マルスの表情が歪む。

マルスは片手を大剣から放し、気を集中させると、彼の拳に風の塊が発生する。

マルスはその風の塊をノゾムの至近距離で解放する。

気術“風塊掌”

一塊にした風を一気に解放し、相手を吹き飛ばす風属性の気術。

解放された風はノゾムを吹き飛ばし、再び間合いを大きく開けたため、仕切り直しとなった。

互いに間合いの外で睨みあい、自分と間合いと相手の間合いを測り合う。しかし、お互い踏み込まないまま、時間だけが過ぎて行った。

マルスは改めてノゾムの持つ技量に感嘆していた。

(なるほどな……やっぱり純粋な剣の技量ではあいつのほうが上か……)

力では圧倒的に自分俺のほうが上なのに攻めきれない。最初の斬撃の次に速度重視の連撃を放ったが、すべて避けられるか、受け流された。下手に力で押し切ろうとすれば即座にカウンターを放たれた。

俺の剣はあいつを追い詰めるが、仕留めることはできなかった。

知りたい。あいつがここまで強くなれた理由が、そうすれば俺はもっと強くなれる。

もつと、もつと、さらに強く……………。

その為に、こいつを知らなくてはいけない。信じられないほど強くなったこの男の事を……………。

互いに剣を向け、相手から目を逸らさず、臨戦態勢のままだったが、マルスは「ふう」と息を吐くと練り上げていた気を霧散させて、剣を納めた。

「悪かったな。いきなり斬りかかって。」

ノゾムはあれだけやる気満々だったマルスが剣を納めたことに疑問を持ちながらも、とりあえず自分も刀を納める。

「……………お前に聞きたいことがある。……………いつから森に入るようになったんだ。」

マルスは真っ直ぐにノゾムを見つめる。言い逃れはさせないとその眼が雄弁に語っていた。

正直な話、ノゾムは龍殺しとばれたらどうするか具体的な考えは

なかった。正確には知られては不味いとは思っていたが、この力をどうしたいのか、如何するべきなのかといった事は思いつかなかったのだ。

逃げ続けていた自分を自覚し、このままではいけないと思っていたが、“リサの夢を手伝う”という目的を失い、この学園にいる理由を無くしたノゾムには自分が如何したいのかという具体的な考えはなかった。

この“強くなる目的”の喪失も“無自覚な逃避”と同じくシノが懸念していたことであり、無自覚な逃避を自覚した今、ノゾムが未だに前へ進めない最大の要因でもあった。

だからこそノゾムは、“困っている人を見つけたら助ける”と言ったアイリスディーナや“姉に追いつきたい”と言ったソミアの様に、目標にむかって前に歩いていく人たちに強い憧れに似た感情を感じていたのだ。

「そうだな……森に入るようになったのは1年の夏から秋にかけてだったよ。……まあ、あの時は……リサの事とか……いろいろあったから……」

マルスの追及にノゾムはとりあえず当たり障りのないことを話すことにした。よく考えれば昨日自分をつけてきた気配は森に入ると無くなっていたことから、ノゾムは直接龍殺しの力を見たわけではないと考えたのだ。

「……………呆れた。お前、そんな時から一人で森に入っていたのか

「？」

頷くノゾムにマルスは呆れ、天を仰いだ。学生では危険だからと学園も条件を満たさなければ森に入れないようにしているし、生徒達もそんなとはしない。たまに無茶をして警告を無視する生徒もいるが、そんな生徒のほとんどは重傷を負ってベットの世話になるか、最悪そのまま魔獣の餌になり、いなくなるかのどちらかだった。

所詮学生は未熟者。いくら能力や戦闘能力が高くても、的確な判断ができなくては生き残れない。その事実は毎年幾人かの無謀な生徒たちの犠牲によって学生達に周知されていた。

「だか納得いった。お前のあの異様なまでの的確な動きと判断力は森の中で培ったんだな。」

確かにマルスの言うことには正しい。シノに師事してからしばらくは森の中を只管走らされ、当然魔獣にも襲われた。

襲ってきた魔獣はどれも低ランクに分類される魔獣だったが、当時のノゾムは身体能力こそあまり変わらないものの、刀術、気術、戦術、判断力、どれもが未熟であり、いくら低ランクとはいえ勝てる要素はなかった。

だからこそ、如何に逃げ切るかが重要だった。

川に入って臭いを消し、体に葉っぱをつけて擬態し、木に登ってやり過ごす。

ノゾムの戦場における判断力は、その時生きるために様々なことを考え、判断し、実行していくうちに自然と身に付いていったものだ。

一昨日の集団模擬戦の時の動きもそうだ。囲まれないように常に動きながら1対1を繰り返す行方。

これはワイルド・ドックなどの群れで狩りをする魔獣と戦う内に身に付いたものだ。

そしてシノとも模擬戦。

桁外れの力量を持っていたシノとの戦いは、少しでも行動が遅ければ即座に気絶させられたし、判断を間違っても沈められた。

そんな環境にいたのだ。嫌でも判断力はずくだらう。

「それで、マルスはなんで俺を呼び出したんだ。まさかそんなことを聞くためにいきなり斬りかかってきたのか。おい」

ノゾムはジロリとマルスを睨みつける。当然だろう、ノゾムには一切非はない。いきなり呼び出され、いきなり斬りかかられたのだ。当然の反応といえよう。

「うっ、まあ、その……なんだ。」

さすがに非常識な事をしたという自覚はあるのだろう。マルスの口調がしどろもどろとなる。

「?????」

急にどもり始めたマルスにノゾムは訳が分からず首を捻る。

しかし、言いよどむマルスの雰囲気を見る限り、とても自分が龍殺しということを知っているようには見えず、単純にいきなり斬りかかったことに対して気まずさを感じているだけのようだ。

ノゾムが森に入ったことなどはズバツと聞いてきたところを見る

と、この男が剣や強さに関わることで、言いよどむとは思えなかった。

ノゾムはとりあえず自身が龍殺しであることは知られていないよ
うなので、少し安堵した。

「つ、つまり俺が言いたいののは「あー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
お兄ちゃん何しているの！！」げ、あいつ！」

突然鳴り響いた大声がマルスの言葉を遮る。声の方を見るとマル
スとよく似た顔立ちの少女がこちらに駆け寄ってきた。少女の顔に
は怒りの表情が張り付いていて、視線はマルスの方に向いている。
どうやらこの少女はマルスの妹のようだ。

「お兄ちゃん！！こんな人気のない所に人を呼び出して何しよう
してたの！！！！」

「な、何もしてねえよ！　　といつかなんでお前がここにいるんだよ
！！！」

「お兄ちゃんが朝からこ〜んなしかめっ面で出かけて行ったから、
碌なことにならないと思って後を付けてきたのよ。そうしたら案の
定こんなところでカツアゲなんかしようとしているし……………」

少女が自分の眉を指で吊り上げながら言つと、マルスは心外だと
いわんばかりに反論した。

「ちげーよ！なんで俺がカツアゲすることになってんだ！！」

「今までお兄ちゃんがしてきたことを考えれば当然の結論よ！今までどれだけ私やおばさんがお兄ちゃんに迷惑を掛けられた人達に頭を下げてきたと思ってるの！！」

「うっ！」

確かにマルスは周囲の人達に手の付けられない不良と認識されている。本来なら上位のクラスに入ってもおかしくない実力があるのに、いまだに10階級であることが彼の曰ころの素行の素行が如何に悪いかを示している。

しかし、マルスは妹には弱いのか、先程から逆に責められっぱなしである。

多少反論してもすぐさま正論で封殺され、自分の素行が悪いことはマルス自身も分かっていて家族に迷惑をかけていることは自覚していたのか、やがてその反論もできなくなり、妹による一方的な言葉攻めが展開された。

「お兄ちゃんが暴れたせいお気に入りのお店が出入り禁止になった！」
「お兄ちゃんのせいでで近所の同い年の子からボス扱いされた！」
「お兄ちゃんのせいで一昼夜近所の人たちに謝り歩いた！」
等々、出るわ出るわ、よくもここまでやったなと思えるほどだった。

当のマルスは話が出るたびに「ぐっ！」とか「むう！」とか呻き、何か槍みたいなものがグサグサ刺さっているようだった。

やがてそれはマルスの恥ずかしい昔話へとシフト。

「最後のおねしょは自分より遅かった。」とか「馬に乗ってみたいと言って、馬車の馬に飛び乗ったら馬が驚いて大暴走。近所の男達総出の大捕り物になった。」とか。

過去の自分の恥を防露されたせい、ついには耐え切れなくなり両手を地面についてうなだれるマルス。自業自得とはいえ、見ていて哀れである。

マルスを散々髑つていた少女だが、マルスが撃沈したのを確認するとノゾムの前にやってきた。

「すみません。愚兄がご迷惑をおかけしました。」

「あ、いや、別にいいんだけど……お兄さん大丈夫なの？」

「はい。こうでもしないと兄は反省しません。それにこの人のせいで随分大変な目に合ってきました。このぐらいは当然の報いです。」

「そ、そう……………」

心を抉られまくったマルスがさすがに哀れに思え、ノゾムはどうにか少女をなだめようとするが、少女は一刀両断に切って捨てた。

いきなり斬りかかってきたマルスに怒りを覚えていたノゾムだが、いくら不良でも実の兄をバツサリ斬って捨てた少女にドン引きしてしまっていた。

「あ、自己紹介が遅れました。私、そこで死んでる愚兄の妹でエナといいます。」

「あ、どうも。マルスの同級生のノゾム・バウンティスです。」

マルスと違い、きちんと礼儀正しく挨拶をする少女。兄のせいで随分苦労させられたせいなのか、随分としっかりした少女である

「今日は愚兄がご迷惑をおかけしました。ぜひお詫びがしたいので、よろしければ家のお店に来ていただけませんか？うちは酒場付きの宿屋をやっているので昼食くらいはごちそうできますよ。」

詫びがしたいと言ってくる少女。ノゾムは別に詫びについてはいいからいいけど、エナが「ご迷惑をかけた以上、きちんとしないとイケない。」とかなり強くよく言ってきた。無理に断るのも悪いと思い、ノゾムは御呼ばれに与ることにしたのだが……。

「まあいいけど、マルスはどうするの。」

「あ、そうでした。お兄ちゃんいい加減邪魔だから早く歩いて！」

エナはマルスに蹴りを入れる。マルスは「何すんだ！」と怒るが、睨みつける妹の眼光に意気消沈してトボトボと俺たちの後に付いてきた。

第2章第5節（後書き）

ちよつと更新するのに時間がかかりました。また思ったより長くなりそうだったので2分割して投稿します。

今回のノゾムとマルスのやり取りですが、マルスは根本的に“力”を求めています。

今回の行動は強くなったノゾムの強さの理由を知りたかつたのですが、基本的に脳筋のマルス君。言葉ではなく実力行使という手段からやっつけてしまいました。

実は彼も心の内を明かせるような本当の意味で友達はいなかったんです。それゆえにこんな変な行動をしてしまい、後で後悔していたのですが。

その辺の話も次回から書いていきたいと思います。
それではまた。

第2章第6節（前書き）

お待たせしました。

第2章第6節の開始です。

それではどうぞ。

第2章第6節

エナが案内したのは商業区の一隅。この場所は様々な国から商人等が集まるので、その人たちが寝泊まりできるように、あちこちに宿屋があり、大商人御用達の高級宿から、荷物運びなどの下手人が泊るような安宿まで様々ある。

ノゾムが連れてこられた宿は“牛頭亭”という看板が掲げられた宿。見たところ1階は食事処になっていて、2階に泊まるための部屋があるようだ。

「ここが、うちがやっている宿屋“牛頭亭”です。」

エナはそう言うのと店の入り口に消えていく。ノゾムも後を追って入ると、エプロンをつけた恰幅のいいおばさんが出迎えた。

「おや、お帰りエナちゃん。マル坊は見つかったかい。」

「ただいまですハンナさん。また他の人に迷惑をかけてしまったのでちゃんと叱っておきました。あ、それとこの人が、お兄ちゃんのご迷惑をお掛けした人です。」

「ああそうかい。すまないねえ、家の馬鹿坊主が迷惑かけて、お詫びにおごるからちょっと待ってとくれ。」

「いえ、別に気にしていませんから、それに彼女がちゃんと言ってくれましたのでもう気にしていませんよ。」

「よかった。じゃあゆっくりしていつとくれ。こら！お前さんは何やっているんだい！！また人様に迷惑かけて！！ちょっとこっちへ

来な！！」

「いててててて！！離せ！！くら！！！」

ハンナと呼ばれたおばさんはマルスの耳を掴むとそのまま厨房へと消えて行き、その後、ゴイ~~~~ンというまるで鍋で頭を叩いたような音が宿屋中に鳴り響いた。

しばらくするとハンナさんがトレイを持って戻ってきた。トレイの上の皿にはパンとこんがり焼かれた肉。それとサラダが盛られていた。

「はいよ。牛頭亭自慢の一品、穴ウサギのステーキとサラダの盛り合わせだよ。これはあの馬鹿坊主が迷惑かけた詫びだから、御代はいいよ。」

そう言っただけハンナさんはノゾムの前に料理を置いた。こんがり焼けた肉とあふれ出る肉汁の香りがノゾムの食欲中枢を刺激する。時間はずでに昼飯時。ノゾム自身、空腹感を覚えていた。ハンナさんは「いいからお食べ。」と、ノゾムを促すので、彼はせっかくながら用意してくれたのだからとその料理に手を伸ばす。

穴ウサギはこの辺り一帯の森や草原に生息しているウサギで、名前の通り地面に穴を掘って生活していて、主に食用として狩猟されていた。

穴ウサギのステーキはよく叩いてから焼いてあるので柔らかく、また酒か何をかけて焼いたのか香りもよく、肉汁も豊潤でそれだけで

も食が進んだ。

付けられていたサラダとパンも肉に合い、肉汁と絡ませることでいくらでも食べられそうだった。

「ごちそうさまでした。ほんとおいしかったですよ！」

あつという間に完食してしまったノゾムが礼を言うと、ハンナとエナも嬉しそうな顔で笑った。

「いや、いいんだよ！気にしないで。こっちが迷惑かけたんだから。それにあんなに美味しそうに食べてもらえたんだ、作ったかいがあるってもんさ。」

「そうです。もともとあの愚兄に原因があります。ノゾムさんは気にしなくてもいいんですよ。いきなり呼び出して斬りかかるなんて何考えているのか……………」

「あの馬鹿は今うちの亭主がもうこんな事しないようにしっかりと躡けているから、許してやってくれないかい？」

「まあ、俺自身もう気にしていませんからいいですけど……………」

さすがにいきなり襲いかかれた事には怒りを覚えたが、エナの過去の恥部を大声で暴露するというエグイ精神攻撃を見た後だとさすがにもう十分だろうとノゾムは思っていた。

「そうかい……………よかったよ……………エナちゃん、悪いけどうちの

亭主がそろそろ夜の仕込みをするから手伝いをしてくれんかい。」

「え……………あ、はい、分かりました。」

何か言いたそうにしているハンナさんに気付いたエナちゃんが、空いた皿を持って厨房に消えていった。

「…………ノゾムって言ったかい？ちょっと話したいことがあるんだけど……………いいかい？」

「????話したいことって何ですか？」

「あの子、マルスとエナちゃんのことだよ。2人のことどう思うかい？」

「????？」

ノゾムは質問の意味が分からず首を傾げる。しかしハンナさんを見るとその目は真剣そのもので、「冗談はともいえそうにない雰囲気だった。」

「……………そうですね……………エナちゃんの方はさっき会ったばかりなので何とも言えませんが、しっかりした子だと思いましたよ。多分マルスの影響が大きいんでしょうけど。」

エナについては、ノゾムは彼女とは会ったばかりなのでよくは分からないが、素行の悪いマルスのせいであんなしっかりした子に育ったのだと思った。

「マルスについては……………正直よくわかりません。あいつは俺のことはよく思っていますでしたし、そのことを隠そうとはしてい

ませんでした。でも……………2学年の末あたりからでしたか、あいつの態度がどこがおかしかったのは感じていました。」

マルスは2学年の末の模擬戦でノゾムにあわや負かされるところまで追いつめられた。

それ以来、マルスはノゾムに対して今までのように、罵声や嘲笑を浴びせなくなった。

マルスの態度が変化したことはノゾム自身気づいていたものの、その理由までは分からなかった。

しかし、模擬戦のことを聞いたハンナさんは納得したように呟いた。

「そうかい……………やっぱりかい。」

「やっぱりとは?」

「あの子のおかしいことは分かっていたんだよ。でもノゾム君の話聞いて理由がわかった。」

「理由……………ですか?」

「うん、まあ……………ね。でも安心したよ。あの子にもまだ友達になれそうな子がいたんだってね。」

「……………え、それってどういうことですか?。」

嬉しそうに話すハンナさんだがノゾムはその言葉には疑問だった。最近は大人数になったとはいえ、今までのマルスのノゾムに対する反応を見れば、少なくとも友達になれそうとは思えなかった。

「いや、あの子、君がここに来ることを嫌とは言わなかったからね。多分だけど、今はもう君のことを悪く思っていないと思うよ?」

聞いた話だと、マルスは一度もからの取り巻きや、付き合いのあるガラの悪い連中をこの店に連れてきたことは一度も無いらしい。これにはノゾムも驚いた。

(少なくとも自分のやっている事が悪いことだって分かっているみたいだし、思ったほど悪い奴じゃないのかも……………)

少なくともマルスや彼の取り巻きにいたぶられてきたノゾムにとって、家族が自分の行いに巻き込まれないようにするマルスの行動は新鮮に思えたし、マルスのことが少しだが分かったような気がした。

時間を遡り、ノゾムがハンナの料理を食べているころ、厨房ではマルスと敵つい顔をした巨漢が向き合っていた。

巨漢の男の名前はデル。ハンナの夫で、この店の主人である。

マルスはいよいよ先ほどまでハンナに説教されていて、デルが料理を作り終わり、それを彼の妻がノゾムに届けに行ったことであろうやく説教から解放されていた。

しかしマルスは頭をハンナにフライパンで叩かれたため、大きなたんこぶが出来ており、さすがに痛かったのか、彼の眼には涙が浮

かんでいた。

「まったくお前は……いつまでこんなことやるつもりだ。」

「……………」

マルスがノゾムにやったことを聞いて宿屋の主人は呆れかえる。マルスもさすがにやりすぎだと思っていたので押し黙るしかなかった。

「最近お前の様子がおかしかったのは彼のせいか？」

「……………」

「お前の様子からすると多分お前、彼……………ノゾム君と言ったか。その子に負けたんだらう？」

「な!!！」

マルスは事実を言い当てられたことに驚く。ノゾムとの模擬戦のことは今まで誰にも話していなかったからだ。

「いったい何年お前たちの親代わりをしていると思っっているんだ？いくら負けたのが悔しいからって「そうじゃねえよ!」「じゃあなんでそんなムキになるんだ？」

「……俺はただあいつが強くなれた理由が知りたかっただけ……。」

「マルスはそっぽを向いて呟く。その様子にデルは「はぁ……。」とため息を吐きだした。」

「マルスはハンナやエナにはなかなか素直になれないところがあった。やっぱりプライドがあるのだろう。どこか自分が守る側であるという意識があるのだ。」

「しかしデルにはある程度だが素直に話をする時があった。マルスにとってデルはかけがえのない家族であり、“頼りになる父親”であり、ある意味目標の一つであった。たとえそれが血の繋がりが無いのだとしても……。」

「ならなんで素直にそう言わない。最初から彼にそのことを聞けば済むことじゃないか。」

「……今更そんなこと聞けるかよ。それにアイツも俺の事なんざ碌でもない不良としか思ないだろうしな……。」

「さすがにマルスも今まで散々罵ってきた相手にいきなり素直になることは出来なかったようだ。まあそれが普通の反応だろう。」

「なんだ、自分が不良だって自覚はちゃんとあったのか。」

「あんた俺を馬鹿にしてんのか!」

「いや、さすがにいつもお前を見てみると、お前の頭にはエレクラゲでも湧いているのかと……。」

「んなわけねえだろ!」

マルスが顔を真っ赤にして否定するが、その姿を見てデルは少し安心する。

マルスは今まで柄の悪い連中との付き合いは合ったが、その連中をこの店に連れてきたことはない。

恐らく自分達を心配してのことなのだろう。そんなマルスが迷惑を掛けたとはいえ、エナがこの店に連れてきたことに異を唱えなかったところを見ると、マルスもノゾムのことを認めているのがデルには分かった。

ちなみにエレクラゲとは海に生息する魔獣の一つで海流に乗ったままふよふよと漂い、長い触手に発生する電流で獲物を痺れさせて捕食する。

大きさは大人ほどもあるが、移動する手段を持たないので、ただ海中を漂うことしかできず、あまり危険性はないとされている。

デルはマルスに友人ができたところが嬉しく、それゆえにやるべきことはしっかりやるように言い含めた。

「……………少なくともお前のやったことはきちんと謝っておけよ。」

「う、わ、分かってるよ……………」

気まずそうに視線を反らしながらもきちんと言つことを聞くマルスにデルの表情は自然と緩んでいた。

すっかりご馳走になったノゾムはあまり邪魔するのも悪いと思い、そろそろお暇することにした。

「邪魔しました。食事、美味しかったです。」

「いいんだよ。それよりまた来てくれ。なかなかの食べっぷりだったからね。こっちも作りがいがあったよ。」

「ノゾムさん兄がまた迷惑をお掛けするかもしれませんが、よろしくお願いします。」

デルがその敵つい顔に似合わない笑顔で答え、エナもまたお辞儀をしてノゾムにお礼を言う。

「ほらマルス。あんたはノゾム君をきちんと送りなさい。あんたが迷惑をかけたんだから。」

「分かってるよ……………」

促すハンナさんにマルスは不精といった感じで答える。そのまま俺はハンナさんたちに礼を言うと、マルスと共に寮への帰路に就いた。

寮への帰り道では2人は無言のままだった。今までマルスはノゾムを罵るだけだったし、ノゾムもマルスとはまともな会話を交わしたことはないので、無理もないことだった。

そんな沈黙が支配する中、先に話しかけてきたのはマルスの方からだった。

「あつと……悪かったな……今日は。」

マルスが気まずそうにノゾムに謝罪をしてきた。

「いや、俺はもう気にしていないからいいけど。(さすがにあんなにボロボロに罵られた相手をさらに痛めつけるなんてできないし)」

ノゾムはあの時、苛烈な精神攻撃を行ったエナと彼女によって心をズタボロにされたマルスを思い出す。

さすがにあの口撃の後に、さらに追撃することはノゾムにはできなかった。

「……………お前、今変なこと考えなかったか？」

ノゾムの不穏な雰囲気を感じたのかマルスがノゾムを問い詰めてくる。

「いや、自分の妹にあれだけズタボロにされた人をさらに責めるのは人間としてどうかと……………」

「てめえ！しっかり考えてるじゃねえか！！というかお前もすっかり覚えていたのかよ！！」

「いや、さすがにあんなインパクトがあると忘れられないというか……」

「忘れる！今すぐ忘れる！！即座に忘れる！！！」

「ちよ、こら！なにするんだ！！！」

慌てふためいて詰め寄ってくるマルスとそんなマルスにアタフタするノゾムだが、彼は少しマルストと自分との距離が縮まっている事を感じていた。

（なんだか懐かしいな。こんな風に話す人は師匠以外ほとんどいなかったのに）

ギヤイギヤイ喚きながらあるいていく2人。

その後ろ姿はだれがどう見ても仲のいい悪友同士にしか見えなかった

第2章第6節（後書き）

いかがでしたか。

今回はノゾムとマルスの和解でした。

実はまだまだ書きたいことがありましたが、ストーリーの都合で次回以降の章に持ち越しとなりました。

気長に待っていただけると幸いです。

それではまた。

第2章第7節

マルスと和解してから数日の間にクラスでのノゾムの扱いはかなり変わっていた。

ノゾムをいの一番に嫌っていたマルスが彼とよく話をするようになったのだ。

10階級の生徒は基本的に他のどのクラスの生徒達からも落ちこぼれ扱いされる。徹底した実力主義を謳っているソルミナティ学園の弊害だ。

そんな落ちこぼれ扱いされていた彼らの捌け口が、万年最下位のノゾムだった。

しかし、10階級とはいえ、学年上位に比肩するマルスがノゾムと話をするようになると、今までノゾムを罵っていた連中は手を出すことができなくなり、結果としてノゾムに関わらないというスタンスを取るようになった。

またマルスは今までの自分たちの取り巻き達とは距離を置くようになり、実技の授業では何時もノゾムと組むようになった。

必然的にノゾムはマルスとの時間が長くなるわけだが……………。

「嬉しいわ〜〜！ノゾム君とマルス君が仲良くなって〜〜〜〜！！」

昼時の保健室。今日もノゾムはアンリ先生に拉致され、保健室で一緒に昼食を食べていた。ちなみにそばにいたマルスも彼女のターゲットの1人だったので同じように捕獲されている。

アンリ先生のテンションは最初からクライマックス状態で、何時にもましてルンルン空気を周囲に振りまいている。

「はあ、どうも……………」

ノゾムはアンリ先生のあまりのテンションの高さに少し引いてしまいが、彼女が純粹に喜んでいることには分かるので、その気持ちには素直に感謝していた。

「……………ふん。」

マルスは不精面で昼飯をかきこんでいた。

「まあまあ。アンリも嬉しいんだよ。ノゾム君とマルス君が友人になったことが。アンリはノゾム君だけでなく、マルス君の事も気にしていたからね。」

「???どういうことだ。それは？」

「アンリはマルス君の事を不器用だけど優しい子だと言っていたよ。」

「だつて…………」。マルス君。2学年末にノゾム君の事を見直して、自分がノゾム君にやってきたこともちゃんと反省したんでしょ…………?」

「……………」

「そんな子が悪い子なはずないもん〜。」

そう言うノルン先生の顔にも笑みがこぼれており、マルスの思っていたことをスバリと言い当てていた。これには彼も驚いた。

まあ彼女のぼやぼやした雰囲気をいつも見ていれば、実は鋭い人間とは気付きにくいだらう。

ノゾムは以前彼女に、2学年末のノゾムとシノの対決やそれによってノゾムに起こった変化をある程度気付かれ、指摘されたことがある。

だからこそマルスの心の変化を指摘したノルン先生についてマルス程の驚きはなかった。

「……………」

マルスはそっぽを向いていたが顔は紅く、照れているのは明白だった。

「ふふ。……ところでノゾム君、君は今何を作っているんだい？」

ノルン先生が早々に昼食を食べ終わり、机の上で何かやっているノゾムに話しかけて来た。

ノゾムは保健室の机の上に細工用の工具一式を取り出して何かを作っていた。

「これですか？ 友達への誕生日プレゼントですよ。」

「へえ！ そうなのかい。誰に何をあげるのかな？」

ノルンは、今この学園にノゾムの友達マルスのみだと思っただので少し驚き、またノゾムが作っているものにも興味を覚えて聞いてきた。

「あげるのはこの間知り合ったエクロスの生徒です。あげる物については教えられません。これはその子が一番初めに知るべきものですから。」

今作っているプレゼントについてはともかく、ソミアについては隠す必要はないとノゾムは考えたので、彼女との出会いなどについて話すと、ノルン先生とアンリ先生が大層驚いていた。

「へえ！まさかフランシルト家のご令嬢と知り合いなんて、ノゾム君も隅に置けないね。」

「???なにをそんなに驚いているんだ？」

マルスはよく分かっていないようだが、フランシルト家といえば大陸西部にある大国フォルスイーナ国の建国当初から使っている重鎮中の重鎮である。

またフォルスイーナ国は10年前の大侵攻の際に、魔獣の群れに対して逸早く軍を派遣しており、その軍は、後に編成された連合軍の中核的存在となり、大侵攻を退ける大きな原動力となった。

また、ソルミナティ学園の創立を各国に提案した国でもあり、この大陸においては非常に大きな存在である。

そんな名家中の名家の令嬢と知り合いになるなどほとんどの人間には全く縁がない話だろう。

「知り合いと言っても、彼女がフランシルト家の人間だと知ったのはつい先日で、知り合った時はまさか彼女がそんな名家の人間とは知りませんでしたよ。まあ、俺は気にしませんでしたが、彼女は隠していたことを少し気にしていたようです。」

ノゾムはそう言いながらも両手を動かしながら何かを作り続けている。

「彼女の生い立ちを考えれば無理もないか。」

まあ、名家は名家なりの悩みがあるのだろう。

ノルンが作業をしているノゾムの顔を見ると、彼の表情には僅かだが笑みがこぼれている。

（うん。これなら大丈夫かな。）

おそらくプレゼントを相手に渡すことを考えると、楽しくて手仕方がないのだろう。そんなノゾムを見るとノルンまで楽しくなってきた、彼女の顔には自然と笑みがこぼれていた。

放課後、ノゾムとマルスは街の外周部へ向かっていた。2人は和解除してから放課後、だいたい2日に1回はそこで手合わせをしていた。

「結局昨日マルスに勝てなかったな。やっぱり今の俺じゃお前の相手は役不足か……………」

「……………」

手合わせの結果は、今のところマルスの方が勝率は高い。ノゾムもあと一歩までマルスを追い詰めるのだが、“幻無”等の攻撃用の気術を使っていないので、決め手にどうしても欠けるのだ。

ノゾムの攻撃用の気術は相も変わらず殺傷能力が高い。

これは少ない気を効率的に使うと同時に、相手を確実に仕留めるため、郊外の森の中で魔獣との命のやり取りをやってきた（シノに無理矢理やらされてきたともいう）ため、生き残るためには必要だった。

しかし、学園生活や模擬戦ともなると話は別で、これらの殺傷能力の高い技は手加減しなくてはいけない。

だが、ノゾムは気量が多いわけではないので手加減するには必然的に技に使用している気の密度を下げなくていけないが、これでは相手を仕留めるには不十分な技になってしまう。

密度を下げると相手を仕留めるに十分な威力を発揮しないという板挟みの状態なのだ。

また、多少改善したとはいえ、ノゾムの能力抑圧の影響は大きく、身体強化や瞬脚といった補助的な気術の効果も低いため、やはりマルスぐらいの実力者を相手にするには役不足になってしまうのだ。

「……………」お前、それでも俺に数回勝っている時点でおかしいぞ…

「……………」

「???そうか?」

マルスはノゾムのセリフに対してボソリと呟くが、それに対するノゾムの反応は淡白だ。

常識的に考えれば、1対1でノゾムがマルスに勝てる要素はない。ノゾムとマルスの身体能力、気量の差は明らかで、しかもノゾムには魔力がほとんどないため魔法にも頼れない。

それでも本来上位のクラスにいるはずのマルスに多少とはいえ勝利している時点で、彼の技量がこの学園でいかに高レベルであるかを示唆している。

もっともノゾムにその自覚はない。

ノゾムにとつての刀術の基準は自らの師であるシノである。これは今まで手合わせをしてきた相手はほとんど彼女だったからだ。

これは今までのノゾムの交友関係の狭さが原因で、もし学園に一人でも手合わせをしてくれる友人がいれば多少違ってきただろう。あんな化け物じみた実力者が基準になってしまったら自分の実力が周囲と比べてどの位置にいるかなど正確に測れるはずもない。

またノゾム自身も自身の実力を低く見積もってしまうところがあった。

これは能力抑圧と今までの模擬戦の結果が原因で、能力抑圧の影響で常に打ち合いで力負けし、しかも模擬戦で勝てたことはほとんどない。

このためノゾムはある意味“負け慣れてしまった”状態なのだ。

(こいつ、あんな凶悪な技封印しているくせに何言ってるんだ!!!)

実は、マルスは一度だけノゾムの“幻無”を見せてもらったことがあったが、見た時は戦慄を覚え、身震いした。

放たれた気刃はマルスの目の前を瞬く間に通過し、標的だった大岩を苦も無く両断した。

信じられないほど圧縮され、研ぎ澄まされた気刃。飛翔速度は極めて速く、マルスには目の前を通り過ぎた気刃の残像すら見えなかった。そしてそれほどの刃を作るのに半秒ほどの時間しかかからない制御力。

あの刃を自分に向けて放たれたら、その瞬間避ける間もなく防御ごと両断されてしまうだろう。

（はあ〜）。あの時の俺の負けはやっぱり確定だったなこりゃ。（

マルスは2学期末、自分が目の前の男に追い詰められた時を思い出していたが、あの時放たれていたのがこの技なら自分はこの世にいなかっただろう。

（まあ、あんな技授業中には使えないわな）

ノゾムがいままで攻撃に気術を使わなかった理由に納得している

と、前方から3人の女の子が歩いてきた。その内1人がノゾムの姿を見ると大きく手を振ってきた、ノゾムも手を振ると、3人はこちらにやってきた。

「こんにちは！ノゾムさん。」

「こんにちは。ソミアちゃん。今日はお姉さんと一緒なんだね。」

「やあ、こんにちはノゾム。久しぶり……という程でもないかな。」

「い、こんにちは……………」

歩いてきたのはアイリスディーナさん、ソミアちゃん、そしてテイマさんだった。

テイマさんはやはりこちらが苦手なのか、相変わらず少し引き気味。

「ほら、テイマ。ノゾム君に言うことがあるんだろうっ？」

「う、うん。」

「……？」

テイマさんがアイリスディーナさんに促されてノゾムの前に立った。どうやらノゾムにいたいことがあるらしい。

「あ、あの！保健室の時はごめんなさい！」

「……………え？何のこと？」

「ええつと、私、ノゾム君に失礼な態度、とつちやったなあつて……噂、聞いちゃってたから……」

彼女はそう言うと、シユンと肩を落とす。彼女は見ているこちらが悪く思えてしまう程気落ちしてしまっていた。よほどあの時のことを気にしていたのだろう、

「すまないな、ノゾム君。ティマは少し男性が苦手だね。君の噂を聞いていたせいで少し構えてしまっていたんだよ。」

「……ああ！ あの時のこと？ 別にいいよ。今ちゃんと謝ってもらったし、俺の噂を聞いているなら無理ない話だし……。」

確かにノゾムの噂を聞いているなら無理ない話だ。当時、学年でも有数の女子生徒と付き合いながらも、浮気をした拳句振られたなどの噂を聞けば、誰も彼に対していい印象など抱かれない。

ティマの話聞いた時、ノゾムの胸の奥がずきりと痛んだ。

(………やっぱり………つらいな………)

友人もでき、以前よりはあまり感じなくなつたが、ふとした拍子に思い出すと、その痛みはノゾムの心を蝕んだ。

(………俺、やっぱり、逃げている。………リサのこと、思い出すたびにこれだもんな………)

ノゾムはリサとの失恋や今まで蔑まれたことを乗り越えたわけではない。ソミアやアイリスディーナ達と出会い、マルスと和解し、新たな人間関係ができていく内に、自然と思いつく機会が減っていっただけの話だ。

「あの。ノゾムさん。こちらの人は誰ですか？」

つい、黙り込んでしまったノゾムだが、ソミアちゃんはノゾムの隣にいるマルスに気付いて尋ねてくる。

「ああ、こっちはマルス。俺の同級生だよ。」

ノゾムの紹介に3人はマルスを見るが、マルスは相変わらずの不調面でアイリスディーナ達を見つめていた。

「……………なんだよ。」

「ひっ。」

マルスの威圧感にティマさんが小さな悲鳴を上げてしまうが、マルスはそれが気に入らなかつたのか、視線が更にきつくなる。

そのマルスの表情にティマさんがさらに怯えるが、マルスの表情は余計に硬くなり、その表情を見たティマさんはさらに委縮してしまふという悪循環を起こしてしまった。

「マルス落ちつけよ。どうしたんだ。」

「……………別に……………」

ノゾムの問い掛けに何も無いように答えるマルスだが、実は彼はティマの怯えた態度が気に入らなかった。

彼女はマルスのBランクの上のAランクの生徒だ。この学園ではほとんどいない人間で、マルスをも上回る実力者にしか与えられない。

しかしBランクの自分に怯える彼女の姿は、強さを信条とするマルスには受け入れられないものだった。

だが、ティマにはそんなマルスの信条など知らない。彼女にとって体格がよく、不良として知れ渡っていたマルスは摩獣以上に恐怖の対象となっていたのだ。

「あ、ああそうだった。ソミアの誕生会の日取りが決まったんだ。できればノゾム君にも来てほしいと思ったんだが……………」。

マルスとティマの間に嫌な空気が流れそうになると、アイリスデイーナは場の雰囲気を変えるために、ノゾムに対してソミアの誕生会の話題を振り、ノゾムもそれに答えた。

「ええつと。いいんですか。フランシルト家の令嬢の誕生会となればいろんなところから高名な方々が来るはずですよ。そんな場所に自分たちが行っていいんですか？」

フランシルト家はアークミル大陸各国に名の知れた名家だ。そんなところのご令嬢の誕生会となれば各国の重鎮も来るだろう。

そんな中に一介の学生でしかない自分たちが加わるのはいささかマズい考えたノゾム。まして自分はソルミナティ学園でもよくない

噂が立っているのだ。

だが、当のアイリスディーナはまるで気にしないという風に言った。

「構わないよ。そもそも今回の誕生会は身内のみで行うつもりだったからね。それにノゾム君はソミアのと友達だろう？ 問題ないさ。」

アイリスディーナはノゾムの心配をまるで関係ないことのように笑って吹き飛ばした。その表情には嘘も偽りもなく、本当にそう思い、そのようにすることを決めていた。

その笑みにノゾムも参加することを決めた。

「……分かりました。参加させていただきます。」

「そうか！ よかったよ。ソミアも楽しみにしていたんだ。」

「はい！ノゾムさんがプレゼントを用意してくれるって言うてくれましたから！」

彼女が両手を目一杯広げて、満面笑みを浮かべる、腕飾りがチリンと鳴った。

アイリスディーナもソミアも満足したように笑みを浮かべ、誕生会の日程や場所の確認をして、その日は別れた。

帰り道、俺とマルスは歩きながら先ほどのことを思い返していた。

「マルスはどうするんだ？ 参加するのかわ？」

「……一応俺も呼ばれたからな。参加だけはするさ。」

マルスもアイリスディーナさんに誘われていた。俺の友人ということでも彼にも声が掛つたのだ。

「それにしてもずいぶんティマさんに突っかかっていたな。」

マルスのティマさんに対する態度は明らかにおかしかった。感情的になりやすいマルスだが、彼女に対する態度は、以前の俺に対するものに近かった。

「……あんな奴が一番イラつくんだ。強いくせになんであんなにオドオドしてやがって……。」

「……何が怖いかなんて、本人しかわからないさ。おまえだって分からない訳じゃないだろ……。」

「……………」

何がその本人にとって辛いことなのかなんて本人しかわからない。彼女にとってはそれがマルスとは違うということだが、マルスの表情は硬いまま、結局牛頭亭に着くまで彼の顔はそのままだった。

「……………ティマ、大丈夫かい？」

「……………うん……………」

私は、暗い顔をしたままの親友を慰めるが、その表情は芳しくな
い。

ティマは生まれつき魔力が高く、それゆえに周囲の人たちに敬遠
されていた。特に同年代の男子からあまりいい扱いを受けていな
った。

また、彼女の容姿は子供の時から整っていたようで、それゆえに
多くの人から様々な視線を浴びせられ続けていた。

羨望、畏怖、嫉妬、憎悪。

まだ自身の魔力をうまく扱えなかった彼女にとって、それらの視
線は何よりも強い心理的な負担となった。

結果として彼女は衆目、特に男性に強い苦手意識を持つようにな
り、また、感情の不安定さはそのまま魔法の制御不足にも繋がった。
誰よりも魔法の才に溢れながら、どうしても制御がうまくいかな
い。

「まあ、ノゾム君は気にしていないようだし、彼……………マルス君だっ
たか。そっちも何とかするさ。」

「そうですね！ノゾムさん友達って言いますし、きっと大丈夫です
よー！」

「……うん……」「めんねアイ、ソミアちゃん……」

「ティマ、できるならありがとうの方が私としては嬉しいのだが。」

「そうです！」「うういときは“ありがとう”ですよ！」

私は多少ふざけた感じに、ソミアは目一杯の笑顔で答える。

「……うん、ありがとう、2人とも。」

そんな私とソミアの返答に、ティマの顔に笑みが浮かぶが。結局彼女の表情が本当の意味で晴れることは無く、私たちはそれぞれの帰路に着くしかなかった。

第2章第7節（後書き）

第2章第7節投稿です。

第2章も後編に入り、そろそろ佳境に入ります。

もう少し時間が掛りますが、お付き合ひ願えたら幸いです。

今回のマルスとティマですが、元々正反対の二人ですからこのようになりました。いろいろあるかと思いますが、彼らについても追々書いていきますので、よろしく願います。

それではまた次節で。

第2章第8節

ノゾム達がアイリスディーナ達と別れてからしばらくの後、2人は牛頭亭にやってきていたが……………

「何をやっているのよ！お兄ちゃん！！！！」

その牛頭亭ではマルスがエナに説教されていた。不機嫌な顔で帰ってきたマルスに気付いたエナがマルスとノゾムを問い詰め、彼がティマにガンつけたことが原因だった。

「なんでお兄ちゃんはすぐに人に突つかかるの！！」

「……………うるせえ！大体なんでお前がゴチャゴチャ言うんだ！お前には関係ねえだろうが！！」

「何言っているのよ！これでまたハンナさんたちに迷惑が掛かったらどうするつもりだったの！」

「……………ええっと……………」

2人の言い合いは激しさを増しており、ノゾムは既に蚊帳の外だった。

「気にしなくてもいいよ。2人にとっては日常茶飯事さ。」

「ハンナさん。」

牛頭亭の女将であるハンナは皿に軽食とミルクを入れたコップを

ノゾムの前に置くと、2人の喧騒をまれで気にしないかのように言った。

「あの2人にとってはこのくらいのケンカはスキンシップみたいなもんさ。明日になれば元通りだから気にするだけ無駄だよ。」

周りを見ると店にいた数人の客は2人のケンカを止めるようにする人はおらず、ただ苦笑いを浮かべているだけである。

どうやらこの店ではいつもの光景らしい。

「何でお兄ちゃんはいつもそうやって余計なことばかりするの！もしかしてお兄ちゃん、そのティマさんのことが好きになったの！？意地悪して気を引こうなんてどれだけ子供なのよ！！」

「べつにそんなこと思ってねえよ！勝手に俺の感情を捏造するんじゃないやねえ！！」

小さな宿に勃発した大舌戦はさらに勢いを増し、もはやノゾムにはどうにも出来なくなっていた。

あまりの音量に宿の窓ガラスが揺れ、ノゾムの持つコップのミルクには波紋が立っていた。はつきり言って魔獣同士が戦っていると言われても納得してしまうほどの騒がしさである。

(でもお客さんは全然動じていない……………どんだけよ。)

そんな状態でも周囲のお客さんの様子は変わらない。これだけ騒いでも憲兵が駆け付けないところを見ると、どうやら憲兵たちすらこの兄妹の喧嘩は周知されているようだ。

驚くべきはこれだけの大喧噪の中で普通にしていられる地元の住民達か、それともそんな光景を“普通”と認識させてしまった兄妹

達か……………。

バキイイ！！！！

ノゾムが周囲を見渡して呆然としていると、喧嘩をしている2人の方から突然大きな音が鳴り響いた。

(な、なんだ！！)

ノゾムが慌てて音のした方向をみると、エナがカウンターの椅子を持ち上げて床に叩きつけていた。

「お、お前いきなり何すんだ！！」

「もうお兄ちゃんに何を言っても駄目だとわかりました！こうなったら実力行使で分かってもいます！！覚悟して！！！」

エナが椅子の足を両手で掴み、青眼に構える。その構えは妙に様になっていた。

「てやあああああああああ！！」

エナがマルスの脳天めがけて椅子を振り下ろす。マルスは慌てて振り下ろされた椅子を回避するが、いきなり椅子を頭に叩き付けられそうになったせい、その顔は妙に引きつっていた。

「こ、殺す気かお前！！ちょっと遅かったら脳天力チ割れていたぞ！！！」

ノゾムがギリギリ回避したマルスを見ると、彼の体からは高められた気の気配がする。どうやら身体強化まで使っているらしい。

(…………… ちょっと待て。身体強化したマルスがギリギリ回避って
どういうことだよ?)

ノゾムが妙な違和感を感じ、エナの方を見ると、彼女の体からも高められて気の気配がする。どうやら無意識に身体強化を使っているらしい。

(…………… あれ? 確かエナちゃん、身体強化とかの戦闘訓練なんて
積んでいないって聞いていたけど?)

ハンナ達の話ではエナは戦闘技術の習得などしたことは無いと言っていた。にも拘らず無意識に身体強化をしているところを見ると彼女もマルスと同じように、かなりの才を持っているのかもしれない。

…………… というかそんなに強化した身体能力で肉親に殴りかかる
など言いたい。あまりにも遠慮が無さすぎる。

(無意識とはいえ、下手すりゃマルス本当に死んでたな……………。)

「ちょっと待て! お前俺には暴力を振るうとか言っておきながら
自分は振るうのかよ!」

(まあ…………… 殺されかたマルスからすればもっともなセリフだよな…
……………。)

マルスは完全に腰が引けていた。

無理もない。エナは14歳で、身長も決して高いというわけでは無い。しかし今の彼女の纏う気迫は完全にこの場を支配している。このままでは本当にマルスが殺されかねない。

さすがにそれはマズイと思い、エマをなだめる為に声をかけた。

「ま。まあエナちゃん。さすがにそれはやばいと思うよ……………」。

「邪魔しないでくださいノゾムさん！お兄ちゃんを更生させるにはもうこれしかないんです！もしかしたら衝撃でまともな性格になるかもしれません！！」

「いやいやいや！その前にマルスの頭が別の意味で使い物にならなくなるから！ちよつと落ち着こうよ！！！！」

ノゾムがエナをなだめながらマルスの方を見ると、彼は激しく首を上下に振っている。流星に今のエナの状態はマズイと悟っているのだろう。

「ダメです！ここでお兄ちゃんをまともにしなときつと私、後悔します！！」

（いやいやいや！どうにかした方がきつと後悔するから！！）

エナがマルスに飛び掛かりそうになり、ノゾムは彼女を後ろから彼女を捕まえて止めようとするが、身体強化をしているエナの臂力にノゾムは振り払われそうになる。

（ちよ、力強！！）

ノゾムも当然身体強化を使っているが、エナの身体強化は無意識

に行っているせいか、まったく加減がない。

ちなみに当のマルスは完全に戦意喪失し、部屋の隅に追い詰められていた。

傍から見れば、暴力夫に暴力を振るわれている妻と、それを止めようとしている娘の図である。

言うまでもなく、暴力夫がエナで、妻がマルス。止めようとしている娘がノゾムだ。

3人の様子を見ていた客たちが大声で笑い始める。

……………「配役を間違っているとしか思えないが、喜劇としてはいいのかもしれない。」

もっとも、当の本人たちは至極真面目であるが……………。

喜劇の結末を言えば、結局マルスはエナの椅子の一撃を受けた。しかしノゾムがどうにか抗ったため、死なずには済んだが気絶し、ハンナに部屋まで引きずられていった。

マルスを粛清……………いや更生？したエナは全く動じずに接客へと戻っている。

(……………うん、エナちゃんは怒らせないようにしよう……………)

ノゾムは友人の尊い犠牲によって、ひとつ忘れてはならないルールを己の心に刻みつけた。

……もつとも、元を正せばやはりマルスの自業自得なのだが……

ようやく騒動が終わり、ノゾムがひと息ついて椅子に座りこんだ。先ほどの喧騒はお客を遠ざけるどころか、逆に引き付けたようで、今店の客席はほとんど埋まっており、空いているのはノゾムの座っているテーブルだけだった。

(まったく、ここに住んでいる人達元気すぎるだろ……)

そんなことをノゾムが思っていた時、店のドアが開き、新しい客が入ってきた。

「あ、いらっしやいませ。ようこそ牛頭亭へ！」

エマが元気な声で新しい客を出迎える。先ほど全力で気を使っていたとは思えないほどである。

(……エナちゃんタフだな……)

ノゾムが半ば感心して入ってきた客を見た時、ノゾムの表情は固まった。

「ねえケン、このお店なの？」

「うんそうだよ。かなりおいしい肉料理を出してくれるんだ。」

入ってきたのは幼馴染のリサとケンだった。

「すみません、今は席がいっぱい合席となってしまうのですがよろしいですか？」

「いいかい？リサ。」

「別にいいわよ。」

「ありがとうございます。それではこちらへどうぞ。」

エナがそう言うと2人を連れてこちらにやってきた。やがて2人はノゾムに気付कि、驚き声を上げた。

「あれ？ノゾム？」

「!!--」

3人の視線が交差した瞬間。リサの表情が一瞬で険しくなった。

「.....やあ。」

ノゾムはどうか声を絞り出すが、その表情はとても硬い。

「あ、あのノゾムさん、お知り合いですか？」

「う、うん。幼馴染なんだ……………」。

「そう……………なんですか？ あの、相席でもいいですか……………？」

「うん……………俺はいいけど……………」。

幼馴染といった割には険悪な雰囲気エナが言いよどむが、他に席もないのでノゾムは相席を了承した。

「あ、あの……………お客様もよろしいですか。」

「僕はいいけど……………」。

「……………いいわよ……………」。

ケンがリサの様子を見ながら答え、彼女も了承した。

3人で1つのテーブルに向かい合うように座る。その雰囲気はお世辞にもいいとは言えない。そんな中、ノゾムはかつての自分達を思い出していた。

こんな風になってしまっ前、俺たちはよく3人で出かけ、様々なところを回りながら色々な話をしていた。

学園での事、故郷にいる家族の事。そして、自分たちの夢の事。リサは決まって冒険がしたいといい。俺はリサと一緒に行くとい

い、ケンも仕方ないから付いていこうかな？と言っていた。

その時の俺達にはこの先には辛くても3人一緒に居られることに何も疑問を感じていなかった。

しかし俺達は一緒ではなくなった。正確には俺だけが外れてしまった。

あの時、どうしてリサが俺を突き放したのか未だに分からない。リサの表情はいまだに硬いまま、依然見せてくれていた、陽の光のような笑みは無く、瞳の奥には燃えるような怒りしかない。

その顔を見ると何も言えなくなる。

「この店にノゾムもいるなんてね。よく来るのかい？」

ケンが話しかけてくる。その声には変な硬さはなく、リサにどう接していいかわからない俺には正直ありがたかった。

それが逃げに繋がってしまったことは分かっているが、少なくとも何らかしらの会話のきっかけにはなると思った。

「まあ、最近来るようになったからな。友達の両親がやっていて、さっきの店員は友達の妹さんだよ。」

「へえ。そういえばここの肉料理はうまいって聞いたけど、どうなんだい。」

俺は依然ハンナさんがご馳走してくれた穴ウサギのステーキを思い出した。こんがり焼けた肉と溢れるような肉汁。確かあれはうまかった。

「そうだな。期待していいと思うぞ。」

「そうなんだ！いや良かったよ。友人からおいしい店だって紹介されたからリサと食事をしようと思って来たんだけど期待できそうだよ。」

「……………そうか……………それはよかったよ……………」

ケンの“リサと一緒にという言葉に胸の奥がズキリと痛む。リサとケンが付き合うようになってから見せつけられてきた。

ケンと一緒に歩く彼女。

ケンの横で微笑む彼女。

そしてケンと背中合わせで戦う彼女。

そのどれもがケンに絶大な信頼を寄せているのが分かり、尚の事自分が惨めになった。

……………そして逃げた。鍛練に。そしてもう叶えられなくなったかつての自分の夢そのものに。

目を瞑る。思い描くのは大切なあの人。

……………でもその人が気付かせてくれた。

自分の命を懸けて“お前は逃げている”と気付かせてくれた。

そして教えてくれた……“逃げている事を忘れなければそれでもいいんだ”と。

それを聞いて少し、弱い自分を受け入れられたような気がした。まだ前に進むことは出来ていない。けど、自分が逃げている事実は直視すると決めた。

……だから俺は彼女にもう一度問いかけた。“どうして……”と。

「なありサ。どうして俺は君に振られたんだ？」

「！……！！」

リサは大きく目を見開くと、すぐに俯いてしまった。体は小刻みに揺れ、感情が抑えきれない。

「ノゾム、それは………。」

ケンが俺を止めようとするが、俺はその声を無視する。自分が逃げている事には、俺が振られた理由も含まれている。

逃げているという事実に向き合うためにもリサからちゃんとその

理由を聞かなくてはならない。

そうしなくては俺はきつと前に進むと決めた時に進めなくなるかもしれない。

「なあ、どうして俺は」……ふざけないで。「、え。」

「ふざけないで!!!!!!!!!!!!!!」

彼女の大声を上げるとバンとテーブルを叩き、椅子を蹴飛ばして立ち上がった。

「いまさら!いまさらなによ!ふざけないで!!!!!!!!!!」

彼女の声には俺は何も言えなくなる。彼女の声は憎しみに溢れていて、怒りに滾っていて、………何より、自身の心を引き裂く様に悲痛だった。

深夜のアルカザムの中央公園。その闇の中に1つの影が月光に照らされ、映し出される。

「あと少しですな。」

映し出されたのは一人の老紳士。黒い執事服を着こみ、白い手袋に包まれた手で何かを弄んでいる。

「あまり気は進みませんが、主の命とあれば、やむ負えませんな。」

老紳士の表情は変えずに呟くと、街の一角に目を向け、歩き始める。

「生まれる前から定められた運命……ですか。」

すべてが闇に呑まれ、静寂に包まれた街。動く者のいない中、運命の歯車だけがゆっくりと動き始めていた……。

第2章第8節（後書き）

ノゾムが逃げていることには、彼がリサに振られた理由も含まれていません。

彼はリサからその内容を聞いていません。

彼は一方的に別れを告げられ、理由を聞いても答えない彼女から逃げました。

心の中で“どうして”と問いかけながらも、ノゾムは彼女から拒否され続けることが怖くて問いかけ続けることができなかつたんです。

彼女に振られて理由をちゃんと聞くことが、“逃げた事実と向き合うこと”になるわけです。

彼らに何があつたのかの全容はまだ分かりませんが、次章から少しずつ分かってきます。

そして最後の不穏な雰囲気。そろそろ2章も終わりかな？あと何節で終わるかは分かりませんが、最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

それではまた次節で。

cadetでした。

第2章第9節

「いまさら！いまさらなによー！ふざけないで！……！」

「リサ！」

その言葉に俺は何も言えなくなる。

彼女の顔には憎悪がありありと浮かんでいて、俺を呪い殺さんばかりの視線をぶつけていた。

彼女は踵を返すと店を出ていく。ケンは慌てて彼女を追いかけろが、俺の足は動かさず、座ったまま。

「リサ……………」

分かっていた。彼女が俺の事をどう思っていることくらい。彼女に振られてから散々突き付けられてきたんだ。

……………つらい。分かっけていてもつらい。

ずっと好きだった彼女。小さいころに一目惚れして、ずっと想い続けて、やっと届いたと思ったら……………。

先程まで楽しそうな雰囲気だった店内は静まり返り、気まずい空気が支配している。それだけ彼女の剣幕は凄まじかった。

「あ、あの。ノゾムさん……………」

何時の間にかエナちゃんがテーブルの傍にいた。片手には伝票を持っており、おそらく注文を受けに来たのだろう。

「……ごめんね、エナちゃん。騒ぎにしちゃって。」

「あ、あの。それはいいんですけど………追いかけていいんですか？」

彼女はリサが飛び出て行ったドアと俺を交互に見つめる。

「……………」

俺は首を振る。

俺はケンとは違い、リサを追いかけることができなかった。

彼女のあまりの剣幕にこれ以上踏み込むことができなかった。

俺に彼女が憎悪をぶつけてくることはもう分かっていた。今まで彼女に会うたびにその視線を俺に向けていたのだから。

それだけならまだ良かった。その時傷つくのは自分だけ、そのはずだった。

でも今回は少し違っていた。

リサの叫びが響き、彼女が踵を返した時。俺は彼女の眼に溜まり、零れ落ちそうな涙を見た。

その涙を見たら、俺は動くことができなかった。

此処で彼女を追いかけない事が今の自分の“逃げ”であることは分かっていたが、俺の存在が彼女を あそこまで追い詰めているのだと突き付けられると、足はどうしても動いてくれなかった。

結局俺はリサを追い詰めるばかりで、何もできなかった。

「……………俺、今日は帰るよ。お代、ここに置いておくから。」

「あ、ノゾムさん!?!」

俺は代金をテーブルの上に置くと店を出て行った。エナちゃんが後ろで何か言っていたように聞こえたが、俺は彼女の涙が目につつき、気付くことはなかった。

「ハアハアハアハアハア……………」

リサは後ろを振り返らず、夜の街をただ只管に走っていた。

彼女の心の中はただ激情が渦巻いていた。何かにつづけていなければ容易く溢れ出してしまっほどの感情の猛り。それを誤魔化すために、行先など考えず走り続ける。

どれほど走ったのだろうか、やがて彼女は街の外周部の野原まで来ると走るのをやめた。

息は上がり、足はガクガクと震え、肩は激しく上下している。

「ハアハアハアハア……………ふえ……………」

やがて彼女はぺたんと崩れ落ちるとすすり泣き始めた。周囲に人影はなく、彼女がどうして泣いているのかを知る者はいない。

「グスグス……………ふえ……………ヒック……………」

「……リサ。」

すすり泣く彼女の後ろから人影が現れる。現れたのは店からずつと追いかけていたケンだった。

「……ケン。」

「大丈夫？」

ケンはリサの傍に寄り添い、彼女に声をかけるが、彼女は泣き続けるばかりだった。

「グスグス………ご、ごめんねケン。泣いちゃって……デート、ダメにして……ごめんね。でも私……あれを聞いたら我慢できなくて……。」

「リサ、いいよ。いいんだよ。」

ケンは泣き崩れているリサを抱きしめる。リサはただ泣き続け、ケンに謝るだけ。

誰もいない野原の中で、ひとつに寄り添う2人を春の虫たちだけがみつめていた。

夜の街をノゾムはフラフラと歩いていた。その足取りはおぼつかず、ノゾムは何度も転びそうになっていた。

ノゾムの頭には、先ほどのリサの表情がグルグルと回り続けた。

(結局、俺は……………)

リサは必死に我慢していたようだが、明らかに泣いていた彼女。本来なら追いかけるべきだろう。

しかしノゾムは追いかけれなかった。自分がリサを苦しめ続けているという事が、自分が逃げ続けた故の事として突き付けられ、彼の心の中で重い枷となっていた。

「……………はは、逃げ続けた奴には相応しいよな……………」

自嘲の声が漏れる。自分が逃げた事と向き合うことは出来たが、結局それはリサを傷つけ、今でも傷つけ続けている。

頭の中はグチャグチャになり、ノゾムにはもうどうしたらいいかわからなかった。

ただ、彼女の傍に自分の居場所はない。それが、ノゾムが再確認出来たことだった。

「の……ぞ……む……く……ん。」

ノゾムが思考の海の中に沈没していると、突然後ろから声を掛けられ、後ろから抱きつかれた。

「うわ！ノ、ノルン先生?!いきなり何するんですか!」

「何って……。おんぶしてもらってるの……。」

「ぐ、さ、酒くさ……。」

抱きついてきたのは担任のノルンだった。

彼女の息は酒の臭いがかかりしており、また顔は赤く、相当な量の酒を飲んでいたことが分かる。

「の、飲んでいるんですか？先生……。」

「そ……よ。先生大人だから……、夜まで飲んでいいのよ……。」

そっぴいながら、ノルンがノゾムの身体に回した腕に力を入れると、彼女の豊かな胸がノゾムに押し付けられる。

「大人は自分の生徒にいきなり後ろから抱きついたりしませんよ……。」

美人を背負って、かつ胸を押し付けられるなど、男なら生唾物であるが、今のノゾムにはそれを喜ぶ気力すらなかった。

「ぶ……。ノゾム君はどうして先生を子ども扱いするのよ……。」

子供の様に頬を膨らませて抗議してくるが、その様子はまさに大きな子供の様だ。

(この人はホント、変わらないよな……)

変わりきってしまった自分とリサの仲を思い、そんな感想が頭に浮かぶが、今はノルンが持つ“変わらなさ”がノゾムには嬉しく、ノゾムの顔には少しだが笑顔が見えた。

「……………うん！ちょっとは元気になった？」

「……………え？」

「なんか……、ノゾム君しょんぼりしながら歩いていたら、元気出して……って思ってた！」

「……………分かりましたか？」

「うん！」

やはり彼女はノゾムのおかしいことに気付いていたようだ。まあ先ほどフラフラ歩いていた彼の様子は傍から見てもおかしかつただろう。知らぬは本人ばかりなり。

「……………ノルン先生俺は……………。」

「うん。」

「……………いえ、何でもないです……………。」

先ほどの事を話そうとするが、ノゾムは胸が詰まるような感じを覚え、言いよんどんでしまう。

「……………そっか！」

でも彼女は何も聞く気は無いようだ。

その様子に、ノゾムは少し疑問を感じた。以前シノとの戦いの後などではこちらが辟易するぐらい問い詰めてきたというのに………

「……………何も聞かないんですか？」

「うーん。聞きたいけど……。ノゾム君、今苦しいんでしょう？」

「……………ええ。」

「話した方が楽になると思うけど……ノゾム君、まだ話せそうにないんでしょう？」

「……………はい。」

彼女の言うとおり、今のノゾムには先ほどリサとの間に起こった出来事を話せそうではなかった。

人が自分で心の内を他人に曝け出すには、実は途方もないほどの気力が必要になる。特にそれが自分の心の中で大きければ尚更だ。

また自分の過去と向き合うことにも大きな気力が必要とする。特に過去の罪や恥など、本人にとって嫌な思い出は特にそうだ。

ノゾムが決めた“逃げた事実と向き合う”という事は自分が無意識に避けてきたことと向き合うという事。

言い返せば無意識に逃避をしてしまうほどの精神的苦痛と向き合うという事だ。

今のノゾムはこの2つの出来事が重なり、極度に大きな精神的な負担を強いられていた。

目に見えて分かるほどに。

「だから今は無理しなくていいわ。前の時はノゾム君がまだつらいのが分からずに随分問い詰めちゃったけど……、だから、もし話せるようになったら話してね！」

「……………はい。」

だからこそ、いつもどおりに振る舞ってくれる彼女の気遣いがノゾムには嬉しかった。

「こんばんわ、ノゾム君。すまないな、ノルンが迷惑を“また”掛けたようだ。」

「またって何よ……！そんなことしてませ……ん。」

しばらくするとアンリ先生がやってきた。どうやら今日は親友同士で飲んでいたようだ。

「ええ、迷惑なんてかけられていません。少し話をしていただけですよ。」

ノゾムは微笑みながらそう言った。その表情はまだ少しぎこちな

いが、先程に比べれば随分良くなっている。

「……………ふふ、そうかい。」

「ええ、そうなんです。」

ノゾムの笑顔にノルンも笑みを浮かべ、互いに見つめ合う。そうなると思白くないのが、ノゾムの背中にいる大人な子供（いや、子供な大人？）。

「ぶ……………ぶ……………」

頬を膨らませてむくれるその姿はどう見ても子供にしか見えないが……………正直言っただけかなり可愛かった。

その姿にノゾムとノルンがクスクスと笑い始めるが、それが面白くないのかアンリはノゾムの背中でジタバタと暴れはじめた。でもそんな仕草も子供っぽく、ノゾム達を笑わせるだけだった。

「も……………！2人して私を笑うなんて……………！」

「す、すみません……………プツ、クツ。」

「クスクス、ごめんねアンリ。君があまりに可愛いから……………ふふ。」

「もうもうもう！！2人ともひどいよ……………」

そんな話を繰り返しながら、夜の街を帰路に付く3人。

「というかアンリ。そろそろノゾム君の背中から降りて自分で歩い

たらどうだい？」

「え〜〜〜〜〜。」

（あ、そういえば背負ったままだった）

アンリと話をしたことで少し気が楽になったので、改めて今の自分の状態をノゾムは認識した。

（うえ、こ、これってやばい。ノルン先生のむ、胸が……）

今になって背中に押し当てられているアンリの胸に気付き、ノゾムの顔は瞬く間に赤くなった。

ノゾムが背中 of 感触に悶々としている中、アンリとノルンの会話は続いていた。ノゾムの背中がよほど気に入ったのか、降りようとならないアンリとそれを説得するノルン。

不満そうな声を出すアンリだがノルンに説得されて、渋々ノゾムの背中から降りた。

背中 of 柔らかい感触が消えてしまい、ノゾムは少し残念になるが……。

「おやノゾム君。まだアンリを背負っていたかったかい？」

「い、いえいえ。そ、そんなことはありませんよ。」

完全にノルン先生に見破られていた。ノルンの意地悪な質問を、アタフタしながら答えるノゾム。そんなノゾムの様子をニヤニヤした顔で見ながら、さらに弄ろうとするノルン、正直かなり鬼畜であ

る。

「????」

しかし、当のアンリは相変わらずと言えはいいのか、2人の様子を全く分かっていないようだ。

「さて、ノゾム君弄りも楽しかったけど「ちょっと!!」今日はもう遅いし帰ろうか。」

「そうね。明日も学校があるし、そろそろお開きかしら。じゃあノゾム君、明日学校でね。」

「じゃあお休み。気を付けて帰りなさい。」

「はあ。お休みなさい。」

ノゾムは2人と別れて寮へと変える。先ほどまで重く、ふらついてきた足取りは、かなり軽くなっていた。

翌日、ノゾムは早朝から寮の庭で刀を振るっていた。

これは修練ではない、ただ自分の内に語りかけ続けるだけの確認行為でしかない。

でも、今ノゾムには必要だった。刀を振りながら自分の世界に埋没し、昨日のこと、そして今までのことを思い出しながらそれらを整

理することが。

昨日分かったことは、自分自身がまだリサを傷つけ続けているという事。結局その根幹にある理由は分からずじまいで、ノゾムの心はむしる苦しくなるだけだった。

自分が振られて理由を知ることが“逃げ続けた事実を直視する”という事だと思ったから聞いた。

でもその行為そのものがリサを傷つけている事。

そして逃げ続け、それ以上踏み出せない自分。

逃げている事実を直視したとしても、現状は何も変わっていない。

「それに、問題はまだある……か。」

意識を集中すると見えてくる自分に巻き付いた鎖。自身の中に潜む巨龍の力。そしてそれが引き起こすかもしれない惨劇と予測不能な未来。

正直、人一人が解決できる処理能力を超えている問題だ。どの問題もノゾム一人ではどうしようもない。

でも、それらが引き起こしかねない事を想像すると人に相談もできない。そもそもノゾムは友人が極端に少ない。

また、ノゾム自身が拒絶され続けてきたため、“また拒絶されたらどうしよう”という思いも、ノゾムが自身を曝け出すことを妨げていた。

結局いくら刀を振っても答えは出ないまま、時間だけが過ぎて行った……。

第2章第9節（後書き）

第2章第9節投稿です。

今回はあの騒動の結末とノゾムの現状の再確認でした。

正直かなりキャラクターの心理描写が厳しかったです……。

ノゾムとリサですが、互いに踏み出せない又は拒絶しているため、互いの現状を全く分かりません。

まあ彼らにはまだまだいろいろありますが……。

今回は、いろいろな事がかなり複雑に絡み合っているので、その辺を書いて説明したいところですが、そうするとネタバレになるのでかなり控えています。

ですので、読者の皆さんには説明が足りないと考える場所が出てくると思いますが、ご容赦いただけると幸いです。

これも私の修行不足が原因申し訳ありません。

それではまた次節で、c a d e tでした。

第2章終幕前篇

リサとの出来事から数日。ノゾムは何も変わらない日常へと戻っていたが、あの時、牛頭亭で起きたことに対して結局明確な答えは出ないままだった。

しかし、たとえノゾム自身が立ち止まったままでも、時間はそんな彼に関係なく進んでいき、彼も日常に戻らざるを得なる。

ある意味それは良かったのかもしれない。日常の喧騒の中で自身の抱える問題を少しではあるがノゾムもリサも紛らわせることができたのだから。

昼休みの学園の中庭。ここではノゾムとマルスが購買で買ってきた昼食を食べながら、すぐそこまで迫ったソミアの誕生日会について話をしていた。

「しかし、今日がソミアちゃんの誕生日か。アイリスディーナさんの話ではパーティーは放課後やるって言っていたけど。」

「あ、ああ。そうらしいな……。」

だがどうもマルスの様子がおかしい。朝から妙にソワソワしている。午前の授業中にも何回か講義をしている先生に注意されていた。

「?……お前どうしたんだ?なんか様子がおかしいぞ。」

「い、いや。大丈夫だ。ほ、放課後にはちゃんと元通りになっているさ……。」

「そうか？ならいいけど。そういえばエナちゃんはどうするんだろう。俺達だけパーティーに参加するって言うのも悪い気がするけど……。」

「だ、大丈夫だろう。そ、そもそもアイツ呼ばれていないからな。招待していない人間がいきなり行くのもまずいだろう……。」

「確かにそうか……。」

確かにマルスの言うことは正しい。エナはそもそもパーティーに招待されていないのだから参加しないのは普通だが、ノゾムは妙に緊張しているマルスが気になった。その原因が分かるのは放課後、パーティーに参加するためにアイリスディーナさんの家に行った時だった。

アルカザムの北区画。ここはこの学園都市の政治機関が存在し、この都市の政治的な運営を行っている。

同時にその行政を行う人間の住居もこの区画に建てられており、その中にフランシルト家の屋敷も建っていた。

しかしその大きさは、この区画に建っている他の屋敷とは比べ物にならないかった。

他の屋敷と比べても二回り以上広い敷地があり、その敷地を人の身長の3倍を超える柵が囲っている。

屋敷自体も大きく、小さな村の住民達が寝泊まりしても大丈夫なくらいの広さがあるだろう。

ちなみにこの屋敷の主はフランシルト家の次期頭首であるアイリスディーナらしい。この屋敷自体、彼女がソルミナティ学園に入学が決まった時に建設されたものだ。

娘の引越しに屋敷を用意するなど、普通の一般人では考えられない。

授業を終え、ノゾム達はパーティー会場であるアイリスディーナの屋敷の正門前に来ていたが、そのあまりの大きさにただ圧倒されていた。

「……………広いな。」

「……………ああ。」

「……………会場、ここだよな。」

「……………ああ。」

「本当に大きな屋敷ですね。お兄ちゃんまた変なことしないでくださいね。」

一般人からすれば絶対に縁が無いであろう豪邸を前にして呆然としていたノゾムとマルスだが、傍から聞こえるよく聞きなれた声を聞いて現実に戻ってきた。

「……………ところでマルス。エナちゃん参加しないって言ってなかった

か？」

「うー！」

ノゾム達の傍にいたのはパーティーに参加しないはずのエナだった。ノゾムがマルスに疑問をぶつけるが、マルスは気まずそうに眼を逸らす。

そんな兄に見かねたのかエナが事情の説明を始めた。

「勘違いしないでくださいノゾムさん。私はパーティーに参加するために来たわけじゃないんです。」

「え、じゃあ何のために？」

「この間、お兄ちゃんが絡んでしまった方に謝罪するためです。お兄ちゃん1人じゃあ心許ないですし……………」

どうやらエナはマルスがこの間絡んだティマさんに謝罪するためについてきたらしい。当のマルスは頭を抱えている。学校で彼の様子がおかしかったのもこれが原因だろう。

「マルス…………お前…………。」

ノゾムが呆れたような様な声を上げる。妹が謝罪に付き添いで来るなんて情けないにも程があるだろう。

「違う！何考えてやがる！こいつが勝手についてきたただけだ！！」

「何言っているのよ！お兄ちゃんだけだったらまた変なこと言っただけならまだいいから！」

「いい加減にしるや！お前は俺の母親か！！」

「お、おい2人とも……。」

いつも通りじゃれあう兄妹。当然のことながら2人は周囲を行きかう人達に注目されている。ノゾムははっきり言って恥ずかしかった。何度か2人に呼びかけるが、当人達は舌戦に夢中で気付いていない。

こんな大きな屋敷の前で大声を上げていれば、目立つのは当然だが、いい加減この兄妹の喧嘩を止めるのは無理だとノゾムは分かっていたので、2人を無視して門に向かって歩き出した。

ノゾムが門の傍に近づくと門が開き、中からこの屋敷で働いていると思われるメイドが現れた。

「すみません。この屋敷の前で騒がれるのはご遠慮願いたいのですが。」

「あ、すみません。今日はソミアちゃん……ソミアアナーさんの誕生会に呼ばれてきたのですが。」

「あなた方が……ですか？」

明らかに不審者を見る目でノゾム達を見てくるメイド。ノゾム達はソルミナティ学園の制服を着ているが、後ろで行われている騒動のせいで、メイドの眼には彼らが思いつき怪しい人間として見えていた。

ちなみに制服である理由は、身内とはいえ名家の令嬢の誕生会に着て行けるような一張羅をノゾムもマルスも持っていなかったから

である。

「……………大変もうしわけありませんが、このような怪しい方々を屋敷内に入れるわけには「やあノゾム君、来てくれたんだね。」お、お嬢様！」

やんわりとだがノゾム達を帰そうとしていたメイドの後ろから現れたのは、パーティーの主催者であるアイリスディーナだった。彼女の後ろには親友のティマもいる。

「彼らは私の友人だ。通しても大丈夫だよ。案内は私がするから、君は職務に戻ってくれ。」

「は、はい。」

「あ、ありがとうアイリスディーナさん。」

メイドは慌てた様子で去っていき、ノゾムはあわや追い返されると思っていたのでホッとしていた。

「ふふ、こちらが招待したお客様を門前で追い返すわけにはいかなからね。……………ところで彼らはいつまでやっているのかな？」

端正な顔に誰もが魅了される笑みを浮かべて、アイリスディーナはノゾムに答える。しかしやはり後ろの兄妹が気になるのだろう。2人はいまだにこちらに気付かず口喧嘩を続けている。こちらの事はおろか、自分達の周囲には人だかりができているというのに全く気が付いていないようだ。

「あの2人は……………おーい！！！！もう中に入るぞ！いつまでやっ

「ているんだ!!!」

「「……………え?」」

ノゾムは大声を上げて2人を呼んだところ、今度は届いたようだ。ふたりは間抜けな声をあげてこちらを見ると、ようやく自分たちの痴態に気付いたのか大慌てでこちらにやってきた。

「ノゾム!気付いていたなら言えよ!」

「そうですよノゾムさん!恥ずかしかったじゃないですか!」

「……………え。」

余りに理不尽なことを言う2人にノゾムは頭を抱えるしかなかった。そんな3人をアイリスディーナ達は面白そうに見つめていた。

「ふふふ。楽しそうだね。でもノゾム君よかったら彼女を紹介してくれないかな?」

アイリスディーナの視線はノゾム達の傍にいたエナに向けられている。

「あ、そういうエナちゃんに会うのは初めてでしたね。」

「まあね。聞いているかもしれないけど、私はアイリスディーナ・フランシルトだ。よろしくね。」

「は、はい!え、エナ・ディケンズです。」

アイリスディーナの雰囲気を押されて、緊張した様子でエナは自己紹介をした。続いてアイリスディーナの後ろにいたティマも自己紹介をする。

「ふふ、ティマ・ライム。よろしくね。エナちゃん。」

「あ、あなたがティマさんでしたか。いつぞやはうちの愚兄がご迷惑をかけまして申し訳ありませんでした。」

エナは目の前にいるのがマルスが絡んだ人だと分かると頭を深々と下げて謝罪した。その様子にティマは少し面食らっていた。

「べ、別にいいよ。気にしなくても……。」

「いえ、さすがにそういうわけには……というかお兄ちゃんも謝りなさい！元々お兄ちゃんが悪いんだから……！」

「だから！お前は俺の母親か！お前のせいで俺が話し難くなっているんじゃないか！」

「何よ！どうせお兄ちゃん1人じゃ謝るなんてできないでしょ！そんなだから私たちが最初に謝っておくんじゃない！」

「だから、それが余計だっていうんだ！！むしろ逆効果だったの！！」

「ちよ、ちよつと待った2人共！人の家、しかも誕生会の時に喧嘩はマズイって……！」

「ぶ、アハハハハ。」

再び喧嘩を始めようとする2人をどうにか止めるノゾムだが、そんな2人を見ていたアイリスディーナの笑い声に驚いた。ノゾムが今まで見てきた彼女は凜としていてぶれることが無く、しかしその超然とした雰囲気は、何処か自分達とは違う人間の様にノゾムは感じていた。

しかし、今日の前で笑う彼女にその様な超然さはなく、自分たちと同じ年頃の少女の姿だった。

そんなアイリスディーナを見たマルスとエナは今し方していた口喧嘩も忘れ、ポカンとしていて、後ろにいたティマも驚いた様子で黒髪の少女を見ていた。

「ふふ、ごめん。2人ともとても仲がいいんだね。……………そうだ。エナちゃんだったかい？よかったら妹のパーティーに参加してくれないかな？」

「え。で、でも……………私、こんな所のパーティーに出たことありませんし、それに……………」

エナはかなり躊躇っている。

元々自分は兄の付添いのつもりで来ていたので、そのままパーティーに参加することに戸惑いを覚えているようだ。

しかしアイリスディーナは気にしない様で、別にかまわないと言う。

「硬くなる必要はないよ。今回は身内だけのパーティーだから無礼講さ。それに人数が多い方が妹も嬉しいと思う。」

「まあ……主催者がこう言っているんだから言いと思つよ。」

「………分かりました。お邪魔でなければ参加させてください。」

ノゾムも彼女の意見に同調したので、エナも断り続けるのは悪い
と思い、参加することに決めたようだ。

パーティー会場に着くと様々な人がいたが、ほとんどがこの屋敷
で働いている人たちのようだった。

パーティー自体は立食形式のようで、会場のテーブルの上には様
々な料理が並んでおり、そのどれもがシェフが趣向を凝らしたもの
だとひと目で分かった。

主賓のソミアは中央にいて、エクロスの制服を着た同年代の子供
たちに囲まれている。おそらく学校の同級生だろう。

アイリスディーナがソミアの傍に行くと、姉に気付いたソミアは
彼女の胸に飛び込み、飛び込んできたソミアをアイリスディーナは
優しく受け止める。

女神の様な笑みを浮かべて妹を抱き上げる姉と満面の笑顔で姉に
抱き着く妹。

その光景はとても優しく、周りにいた人達にも自然と笑みが浮か
び、パーティー会場は温かい雰囲気で包まれた。

「今日は私の大切な妹の誕生日を祝ってくれてありがとうございます。今日はいつもの職務や分別を忘れて大いに楽しんでほしい。」

アイリスディーナの挨拶と共にパーティーが始まり、みんなは思い思いに楽しみ始めた。

ノゾムは先ほどからマルス達と一緒に料理に舌鼓を打ちながら、会場の様子を見ていた。

アイリスディーナやソミア、そしてティマの周りには人だかりが出来ており、みんな楽しそうに話をしていた。

ソミアは同級生たちと話としていたが、ノゾム達に気付くと大きく手を振ってこちらにやってきた。

「こんばんは！ノゾムさん。」

「こんばんは。ソミアちゃん。誕生日おめでとう。」

「よう。」

「ありがとうございます。今日は来てくれてありがとうございます！」

ソミアは元気よく答える。彼女はよほど嬉しいのか、何時にも増して元気いっぱいだった。

「ノゾムさん。そちらの人は誰ですか？」

ソミアはマルスの隣にいたエナに視線を向けて訪ねてきた。

「初めまして。マルス・ディケンズの妹でエナといいます。今日はアイリスディーナさんにお誘いを受けて参加させていただきました。よろしく願いしますね、ソミリアーナさん。」

「あ、ソミアでいいですよ。私もそう呼んでくれた方が嬉しいので、気にしないでそう呼んでください!」

「分かったわ。よろしく、ソミアちゃん。」

「はい!」

それから2人が笑顔での事を話しはじめ。自己紹介や今の様子を見る限り、かなり意気投合しているようだ。

今2人が話しているのは自分たちの兄や姉についての話。2人も年上の家族を持つせいかな、話は弾んでいるようだ。エナは兄にどれだけ苦労させられてきたかを話しており、ソミアは散々言われているマルスをフォローしている。

マルスは自分を散々コケおろす妹に抗議し、それに言い返す妹。三度始まりそうになる大舌戦を止めようと、間に入るソミアに騒ぎを聞きつけてやってきたティマが加わる。

ノゾムはその様子を少し離れたところで見えていたが、そこにアイリスディーナがやってきた。

「やあ、ノゾム君。楽しんでいるかい?」

「ええ、こんな機会、なかなか有りませんから。それより止めなくていいんですか、あれ。」

「構わないよ。マルス君たちはいつもの事の様だし、ソミアもあれで楽しそうだ。ティマが少し大変そうだが、たまにはいいだろう。」

彼女はクスクスと楽しそうに喧騒を見つめている。その様子は年相応で、学園での凛々しい彼女とは違うが、とても惹きつけられる笑顔だった。

「ッ！」

「?どうかしたのかい？」

「い、いや。なんでもない！」

「?そうかい？」

ノゾムはそんな彼女の笑顔を見ていたことが恥ずかしくなり、つい目を逸らしてしまう。

アイリスディーナは様子のおかしいノゾムに詰め寄ってくるが、それが尚の事ノゾムの心臓をドキドキさせた。

「そういえば君にお礼を言っていなかったな。」

「お礼？」

ノゾムはアイリスディーナの言葉に首をかしげる。お礼など言われる理由が分からなかったからだ。

「私たち姉妹の母はソミアを産んで、その時亡くなってしまった。だからこそ私はソミアの母親になろうとしてきたんだが……やっぱ

り実の母親が恋しいのか、ソミアは誕生日が近づくとどこことなく悲しそうにしていたんだ。」

彼女の独白にノゾムも真剣に彼女の話に耳を傾ける。
彼女の母親が亡くなっているとはノゾムは知らなかった。

「でも今回はそうでもないんだ。やっぱり君たちに出会えたおかげなんだと思う。屋敷でも君の事をソミアはよく話していたよ。変わったお兄ちゃんに会ったってね。」

「そう……だったんですか。」

ソミアの方を見ると、彼女は喧嘩をしているマルスとエナをアタフタしながら止めようとしている。大変そうだがそこにイヤな雰囲気はなく、何処となく微笑ましかった。

「もういい加減にしてください！ 姉様！ノゾムさん！そんなところでほのぼのしないでどうにかしてよ。」

ソミアの声にノゾムとアイリスディーナは視線を交わすとクスリと笑う。

「さて。お姫様が呼んでいるからそろそろ行こうか。」

「ええ、とりあえず俺はマルスを止めますね。」

2人は互いに頷くと喧騒の中へと走って行った。

フランシルト邸の正門。そこに執事服を着た1人の老紳士が立っており、彼が門の呼び鈴を鳴らすと、ノゾム達を諫めたメイドが現れた。

「はい、どなたでしょうか。」

「夜分に申し訳ありません。こちらの屋敷の主にご利用がございまして、お取次ぎ願えないでしょうか？」

「申し訳ありません。本日は主様の妹君の生誕日を祝うパーティーが開かれておりますので誰も取り次ぐことは出来ません。ご用件ならば後に主に伝えますゆえ、ご容赦願えませんか？」

この屋敷の主とはアイリスディーナの事。メイドは老紳士を見たところ、身なりはきちんとしているし、言葉使いも丁寧だが、何処かおかしい。

要件について尋ねてみるが、老紳士は本人の前で話さなければならぬと言い、決して譲らない。

老紳士は繰り返し屋敷の主に合わせてほしいとメイドに問うが、メイドは主の命だからとやんわりと断り続ける。

「ふう、仕方ありませんな……………」

やがて老紳士はため息をついて、執事服の襟を正すと、右手の指をパチンと鳴らした。

すると、突然メイドの身体から力が抜け、その場に崩れ落ちた。

「申し訳ありません。これも主の命故。」

老紳士は崩れ落ちたメイドを抱き留めると、彼女の背中を優しく門に預けると、右手の指を素早く空中に走らせる。

その瞬間、巨大な魔方陣が老紳士の足元に現れたかと思うと、巨大な魔力が屋敷を覆い尽くした。

楽しい時間が過ぎ去り、パーティー自体もお開きになったため、パーティーに参加していた人達は各々帰路着くか、会場の片付けを行っていた。

しかし、当のノゾム達は未だ会場に残り、ソミア達を待っていた。彼らにとって、まだ誕生日は終わっていなかったからだ。

「お待たせしました、みなさん！」

ソミアがノゾム達の所に駆け寄ってくる。後ろにはアイリスデイナー達の姿もある。

ノゾム達がまだ残っていたのはソミアにプレゼントを渡すためだった。

パーティーの間に他の人はプレゼントを渡していたが、ノゾム達はその機会がなかったのだ。

ちなみに原因はマルスとエナの大喧嘩。大騒ぎした2人の首輪としてパーティーが行われている間ずっとノゾムがストッパー役をしていたため、プレゼントを渡す機会を逸していたのだ。

ソミアはワクワクしながらこちらを見つめてくる。その目は”はやくはやく”とノゾムをせつつかせる。

その様子にクスリと笑うとプレゼントを出そうとした。だが瞬間、途方もない魔力がパーティー会場を覆った。

周囲に満たされた魔力がノゾムの身体を覆い、強烈な眠気がノゾムを襲う。

「っ！く！」

ノゾムは全身の気を高めることで魔力を弾くと眠気は途端に引いた。パーティー会場は既に片付けが済んでおり、周囲に人の姿はない。周り見渡すと、窓の外の景色の色も変わっていた。

「い、いったい何ですか？」

ソミアが不安そうな声で姉に問いかける。

「たぶん結界魔法だ。だれが使ったかはわからないけど……。」

結界魔法は陣術の1つで、地面や起点となる場所に魔力を込めた陣を描くことで、一定範囲内に持続的な効果をもたらす魔法だ。

効果時間が長く、使い方によっては長時間有利な状態を維持できるが、基本的に陣を張るのに手間が掛かるので、非常に戦略的な運用を必要とする魔法だ。

また効果範囲を広げれば広げるほど持続時間と効果が減退する特徴もある。

マルス達を見ると、マルス、アイリスディーナ、ティマは大丈夫
そうだが、エナが辛そうな顔をしている。

「こんばんは皆さん。失礼いたします。」

突然声が響く。声のする方を見るとパーティー会場の入り口に1
人の老紳士が立っていた。

「夜分遅くに申し訳ありません。ご婦人の邸宅に無断であがるなど
言語道断なのですが何分こちらにも事情がありますゆえ。」

その老紳士は黒の執事服を着込み、銀の髪を後ろで纏めており、
赤い目と片眼鏡をかけていた。

「私、デイザート皇国のウアジアルト家に仕える執事ルガトでござ
います。今宵はウアジアルト家とフランシルト家との古の契約に従
い、ソミリアーナ様の魂をいただきに参りました。」

第2章終幕前篇（後書き）

第2章終幕前篇開始です。

ようやくここまで来ましたが、ついに第2幕もクライマックスです。今回はバトルは無しですが、次回からはバンバン出していきます。それではまた次節で。

第2章終幕中篇

ルガトという名の老紳士の言葉に、ノゾム達は耳を疑った。

「……ソミアの魂を貰っていくとはどういう事ですか？」

アイリスディーナが厳しい表情で問い詰める。彼女からすれば目の前にいる老人は不審者以外の何物でもない。

「言葉どおりでございます。300年前に交わされた契約。当時、フランシルト家が抱えていた問題を解決するためにウアジアルト家の助力を得る代わり、300年後に当主の子供の内、後継者ではない子の魂をウアジアルト家に差し出すという契約です。ソミア嬢の付けている腕飾りが何よりの証拠」

老紳士はそういうと胸元から、一枚の古ぼけた羊皮紙を取り出し、ノゾム達に見えるように広げた。その紙には確かにフランシルト家に助力する代わりに、頭首の子供を差し出すことが明記され、差し出される子供にはその印となる腕飾りを付けさせることも記され、サインの場所にはフランシルト家の頭首しか使うことを許されない家紋も書かれていた。

「そんな……………」

「姉様……………」

契約の内容が偽りのないものだと分かり、愕然とするアイリスディーナとソミア。

「では、契約を完遂します」

「ま、まで!」

アイリスディーナが慌てて止めようとするが、ルガトは構わず契約書に魔力を込めると、契約書は黒い汚濁の様な光を放ちはじめた。同時にソミアの腕飾りも同じ黒い光を放ち、まるで契約書と共鳴するようにキチキチと小刻みに振動し始める。

次の瞬間、黒い光が膨れ上がり、闇の中からフードをかぶった影が出てきた。

その影の容貌は一言でいえば死神だった。

ぼろぼろのフードとその下の白骨化した体躯。目にあたる部分は赤く光り、手には死神の象徴である身の丈ほどの大鎌を持っている。

「それは本契約を司る使い魔でございます。契約の監視者にして魂の導き手。この者がソミア様の魂をご案内いたします」

「え、きゃあああ!」

ルガトが契約書を胸元にしまい、そう宣言すると、突然死神のフードの下から鎖が出てきてソミアを縛り上げてしまう。死神はその名にふさわしい大鎌を振り上げ、彼女に勢いよく振り下ろそうとするが……………。

「させない!」

アイリスディーナが一瞬で魔法を展開。黒色の鎖が空中に現れ、使い魔を捕縛した。

拘束魔法“闇の縛鎖”

闇属性の中級魔法だが、何より特筆するのは発動の早さだった。彼女は魔法を使うために必要な詠唱もなく、陣も描かずに魔法を発動していた。

「ほう、その展開速度。アビリティの即時展開ですか」

アビリティ“即時展開”

本来魔法を使用する際は、陣や詠唱などの自身の魔力を隆起させ、外界に行動が必要になるが、このアビリティを持つ者はそのプロセスを行わずに魔法を発動できる。

だが、それだけではこの死神を捉えるには不十分だったようだ。使い魔を縛っていた鎖がギチギチ軋み、無数のひびが入る。

「くっ！」

アイリスデイナーは腰に差していた細剣を抜くと使い魔に切り掛かるが、逸早く死神は自らを拘束していた鎖を破壊。手に持った大鎌で彼女を弾き飛ばし、再びソミアに切り掛かろうとするが……。

「ぐう！ テイマ！！」

「うん！」

しかし、死神は動くことができなかった。

死神の周囲に4色の魔方陣が展開し、それを頂点としてさらに大きな魔方陣が死神を縫いつけていた。

アイリスが稼いだ僅かな時間にテイマは詠唱を終わらせ、より強

力な拘束魔法を発動していた。

発動した魔法は“廻り続ける封縛陣”。

4属性の魔方陣をそれぞれが互いに絡み合い、複雑な魔方陣を形成し、その陣の中に使い魔を完全に閉じ込めていた。

「ほう、素晴らしい魔法ですな、各々の属性が反発することなく循環し、より強固な拘束陣を形成しております。私も長く生きておりますが、これほどの魔法を使える人間はそう見たことはありません。またアイリスディーナ殿の魔法も素晴らしい。即時展開による魔法の効果は集中力如何で容易く落ちるというのに私の使い魔を一時とはいえ拘束できるとは」

本当に感動しているのだろう、ルガトの声には2人の少女に対する純粋な賛辞が込められていた。

「しかし、いくら使い魔を止めても解決にはなりませんよ。」

ルガトから強烈な魔力が湧き上がる。2人を契約を完遂する邪魔者と判断し、排除にかかったのだ。

ルガトは左手を伸ばすと、人差し指で空中に陣を描く。すると描かれた魔方陣から魔力弾が放たれ、ティマの肩に直撃した。

「ぎゃあー！」

私の肩に衝撃が走り、危うく倒れそうになるがどうにか踏ん張る。魔力弾が当たった場所の服は破れ、血が滲んでいる。

でも私はそんな怪我など気にせず、ひたすら魔法の維持に集中する。もし私が魔法を維持できなくなったら、ソミアちゃんの命が狩られちゃう！

大事な親友の妹で私にとっても大切な友達。

子供の頃から根暗で、引っ込み思案で、前に立つことができない私。

ずっと一人で友達もいなかった私にできた最初の友達の家族。

今でも覚えている。1学年の時から自分の持つ魔力は注目されていて、クラスの中でも浮いていた。

私自身人に話しかけるのが苦手ですますクラスメートとの距離は開いてしまつて……。

そんな時、アイが話しかけてきてくれて友達になった。仲良くなつて、ソミアちゃんとも会つた。

2人とも根暗な私と違って、輝いていた。アイは夜空に一際強く輝き、旅人を導く一番星の様に。ソミアちゃんは闇夜を照らすお日様の様に。

2人のおかげで私は一人じゃなくなった。

「まだ頑張りますか。かなりの精神力をお持ちのようですね」

そういつてあのお爺さん……ルガトさんの左手の五指が空中に5つの魔方陣を描く。どうやら指1本で1つの魔方陣を描いているみたい……。

「させない！」

アイがそう言ってお爺さんに切り掛かるけど、お爺さんは右手で4つの魔方陣を描く、そのうち2つは同じ魔方陣で残りの2つは違う魔方陣。どうやらお爺さんはそれぞれの指で描く魔方陣も変えられなんて……。

2つの魔方陣からは真っ赤な血色の剣が出てきてアイへと放たれる。血剣は空中を自在に動いてアイに襲い掛かり、足止めをする。残り2つの魔方陣を描いた指が複雑に動いているところを見ると、どうやらあの指で血剣を制御しているみたい。

そう思っていたら、左手の5つの魔方陣から5つの魔力弾が放たれ、私の身体を直撃した。

「ッ！ ああ！ くう！」

余りの痛みに目の前が真っ白になるが、それでも私は魔法の制御を手放さない。

かみしめた唇は破れ、鉄の味が口いっぱいに広がるが、私は一層強く唇をかみしめる。

魔法が体を撃つ痛みを、自らを傷つける痛みで耐える。

アイとソミア、自分を導いてくれた星と太陽。

それを失いたくない一心で魔法を維持し続けるが、強力な魔力を感じてそちらを見ると、先程よりも強力な魔力弾が5つ作られ、私に向けられていた。

アイが打たせまいと魔法を放ち、斬りかかるが、お爺さんの右手の3指から放たれた魔法と2指で制御された血剣で阻まれる。

左手の5つの魔力弾が放たれるが、拘束魔法を維持に手一杯の私はこの場から動くことができない。少しでも集中を切らせばこの使い魔を解放してしまう！

私は覚悟を決めて迫りくる魔力弾を睨みつける。躲しようのない必中の攻撃。

だがその魔法が私の身体を穿つことはなかった。私の身体に当たる直前、割り込んできた影が魔力弾を殴り飛ばしていたから。

気がついたら俺は、アイツに当たりそうだった魔法の射線に割り込んで、風を纏わせた拳で魔力弾を殴り飛ばしていた。

「……………マルス……………くん？」

俺が助けに入ったのが不思議なのだろうか、アイツが呆けた様な声で俺の名前を呟く。

……………初めは気に入らない奴だった。Aランクでありながらオドオドして相手の顔色を窺い、気に入らない態度をとったはずの俺に言い返す気力もない。

でも今見せていたアイツの顔にはハッキリと自分の想いを示していた。“あきらめない”と。

「……………何呆けていやがる。お前は魔法に集中しろ。あの爺の魔法は俺がどうにかする。」

視線はあの爺から離さずに、自分の意思を込めてアイツ……………テイマに言い放つ。

両手の拳さらに気を送り込み、構える。

気術“風塊掌”

圧縮した風を拳に纏わせ、打撃力を上げる気術。送り込まれた気は風をさらに掻き集め、目にはっきりと見えるほどの風塊を作り上げる。

「……………うん！ お願い！」

はっきりとした声に思わず口元が緩む。

「ノゾムお前はエナを避難させて、俺たちの剣を持ってこい。」

「え！」

俺達は屋敷に入る際に、持っていた剣をメイド達に預けていた。流石に人の誕生日会での帯剣はメイド達が許さなかった。

エナの方は爺の展開した結界魔法のせいで眠りに落ちている。ここにいたら戦いに巻き込みかねない。

「だが、保管場所が分からないぞ！」

「保管場所は屋敷の入口の右手の小部屋だ！　これがあれば入れる！」

アイリスディーナがノゾムに鍵を投げ渡す。どうやらこの屋敷のマスターキーの様だ。

俺もノゾムも自分の武器がない。この爺の相手はティマとアイリスディーナだけでは無理だ、今の状況を打開するには俺達も参戦する必要がある。

「わかった！　みんなたのむ！」

ノゾムがエナを背負って部屋を出ていくのを足音で確かめて、息を吐く。

爺の強さを目の当たりにして、無意識に緊張していた適度に体がほぐれ、血液が全身を駆け巡る。

目の前の爺はAランクの2人を容易くあしらった。奴の身体から滲み出る覇気は学園最強の剣士、ジハード・ラウンデルとほぼ同じ。実力は恐らくSランクだろう。

“ Sランク ”

それはこの大陸で十数人しかいない強者の称号。

それにアイツが言っていたディザート皇国。

あの国は他の国との国交がほとんどないが、凄まじい軍事力を持っている。

10年前の大侵攻の時も、自国に攻め込んできた魔獣達を一国で退けてしまっていたはずだ。

そんな出鱈目な国の強者を前にして俺の気持ちはどうしようもなく昂っていた。

「……………で、どうすんだ？」

「あの使い魔はルガト氏の持っている契約書によって召喚されている。ということとは……………」

「あの契約書をどうにかするしかない。そのためには爺の所まで行く必要があるっていうのか。」

あの爺は同時に十の魔法を操れるなんて馬鹿げた奴だ。今の俺達が持つ魔法や俺の気術での遠距離攻撃など意味はないだろう。

活路を見出すには接近戦しかない。

「だが接近するのも簡単じゃねえ」

「ああ、手数が違いすぎる。」

今のところ、使ってきた魔法は魔力を集めて打ち出すだけの初級魔法である“マジックバレット”。血剣の方は1本当たり2本の指を使っていたところを見ると、上位の魔法を使うには複数の指を使うのかもしれないが、それでも速さが半端じゃねえ。

「たとえそれでも勝つ！！ マルス君はティマを頼む！」

「わかってるさ」

アイリスディーナが宣言する。

当然だ。俺も負ける気などサラサラ無い。たとえ相手が誰だろうと！

互いに頷き、爺と相對する。相手はこの大陸で最上位十数人の内の1人。

まともに戦えば俺たちなど一蹴できる存在。

爺が両手を広げる。まるでオーケストラの指揮者気取りだ。

俺達は確かにアンタより弱いが……………それでも勝つ！！

確かな意思と共に、俺達は目の前の強者と相對した。

ノゾムは保管場所から自分の刀とマルスの剣を回収して、戦場に戻るために廊下を走っていた。その途中、ノゾムはルガトについて考えていた。

(ルガトさんはたぶん師匠と同格の人だ……)

師匠を思い出す。

魔法と刀という方向性こそ違うものの、ルガトさんは師匠が持っていた強者の放つ独特の雰囲気を持っていた。

そして俺は同時にある確信も得ていた。

(たぶん……アイリスディーナさん達じゃ勝てない……)

誰よりも師匠との傍にいて、師匠と命がけて戦ったから分かる。ルガトさんの力量とアイリスディーナさん達を比べた時。真正面からでは勝てないことはすぐに分かった。まして今の彼女達はルガトの従える使い魔も抑えなくてはいけないのだ。

(急がないと!……でも俺達、勝てるのか?“アレ”を使わずに……)

俺が勝つために真つ先に思いついたのは能力抑圧の解放。

でも俺の心に巢食った強大な力に対する恐怖がそれを行うことを躊躇わせ、前に進むことができなかった。

解放した力に怯えられ、恐怖の視線で見られ、「化け物!」と言われ、拒絶される。

それを考えると体が震えた。またあの暗い、一人きりの場所に戻るのかと。

この力を狙うであろう者たちとの戦いに巻き込むのかと。

「ツツ！くそつたれ！！」

逃げ続けるだけの自分の弱さが嫌になる。俺はそれを誤魔化すように足を速めことしか出来なかった。

「ゲウツ！ ツアアアアア！！」

マルスは迫りくる魔力弾の嵐を拳で弾き続ける。ルガトはティマに対して容赦なく魔力弾を浴びせるが、間に割り込んだマルスが盾となり、ルガトの魔法を防いでいた。

しかし、いくら気で強化したとはいえ、素手で魔力弾を弾くことは容易ではない。しかも初級魔法とはいえ、Sランクの実力者の魔法だ。マルスの手の皮は既にズタズタになり、拳は血みどろ、一部には白い骨も見えていた。

それでも彼は拳を振るう。その度に床には血が舞い散り、白い床に血の花畑が出来ていた。

「はあああああ！！」

アイリスディーナの方も同じように劣勢だった。マルスの様に目に付くような傷を負ったわけではないが、全く接近することができな

かった。

ルガトは彼女の即時魔法に即座に対応し、複数の指で素早く陣を構築。彼女と同等の速さで魔法を発動し相殺。

また、同時に血剣も操り、彼女の接近を阻んでいた。

「ハアハアハア！」

「クツ……マルス君。だい……じょうぶ？」

「ハアハア……うるせえ、俺より魔法の維持に集中しろ……」

ティマが心配そうに話しかけてくるが、彼女の顔色も悪く、今にも倒れそうだ。

（無理ねえか、あんな高等魔法を維持し続けるには相当の魔力と集中力が必要だ）

ティマの魔法は4属性を同時に使う、極めて高度な魔法だ。その魔法を発動するにも維持するにも膨大な精神力を必要とする。

さらに彼女の身体はルガトの魔力弾を数発喰らっている。決して打たれ強いわけではない彼女。傷はジクジクと痛み、徐々にだが、確実に彼女の集中力を削いでいた。

3人は徐々に押され、ついに限界が訪れる。迫りくる魔力弾を捌ききれずマルスの態勢が崩れたところにさらに魔力弾が叩き込まれた。

「がああああああああああ！！！！」

絶叫と共にマルスは弾き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「終わりですな」

「！！！！」

マルスがやられたことでルガトの魔法を遮るものがいなくなり、ティマに複数の魔力弾が撃ち込まれる。

「きゃあああああ！！！！」

彼女にそれを避ける術はなく、魔力弾が直撃。彼女は崩れ落ちるように床に倒れ伏した。

同時に使い魔を拘束していた“廻り続ける封縛陣”が解除され、死神が解き放たれる。

「ティマ！ マルス君！！」

「ぐう！！」「ツツツ！！」

アイリスディーナが叫ぶが2人は答えられず、呻き声を上げるだけだった。

「く！！」

彼女は死神を止めようとソミアの元に駆け寄りつつあるが、目の

前を高速で通り過ぎた魔力弾に足を止められる。

ルガトは空いた左手で魔力弾を放ち、右手で血剣を制御する。先程とは比較にならない濃密な攻撃にアイリスディーナは完全に動けなくなる。

死神はソミアの目の前で止まると大鎌を振り上げる。もはやこの死の使いを止められる者はおらず、ソミアの死は確定だった。

「ソミア！！！！」

「あ、ああ……」

必死に妹の名を呼ぶ姉と死の恐怖に吞まれた妹。もはやこの姉妹の運命は確定した………そのはずだった。

死神が鎌を振り下ろそうとした瞬間。その両腕が大鎌ごと空中に舞っていた。

「……え。」

その場にいた全員の思考が停止し、一瞬時間が停滞する。その時間の中を一つの影が疾走していた。

その影は素早く死神に突っ込むと、持っていた刃を煌めかせ、致命の一撃を放った。

気術“幻無・回帰”

極限に研ぎ澄まされた斬撃は死神の身体を両断し、核となってい

た腕飾りを粉々に斬り砕く。
核を壊された死神は霧のように消え、周囲には砕かれた腕飾りの破片が舞っていた。

「ノゾム……さん？」

ソミアが確かめるように呟く。

ノゾムはソミアの問いに答えることなくルガトと相對する。

(…………… 師匠。俺は…………… どうすねば……………)

未だ、答えの出ないまま……………。

第2章終幕中篇（後書き）

第2章終幕中篇更新です！

すみません。今回ちよつと時間が掛かりました。

今回はマルス君たちの活躍。まあ一方的な展開でしたが、彼らの実力差は実際かなりあります。

予定では次回で第2章が終了します。

また、ディザート皇国や、ウアジアルト家についても第2章終了時に追加で説明を乗せようと思います。

それではまた次の話で。c a d e tでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7408y/>

心の中の ” ころ ”

2011年12月31日02時49分発行